妻を船中に投げ入れたり。吾妻はきえ〳〵となりて人ごゝちもなかりけるが、稍ありて目をひらき、うちわなゝきつゝ月のひかりにつきて四邊をかへりみるに、此の川は渺々として宇治川とも思しき大河なり。此の船にある人は則ち是れ堂左衛門なれば、吾妻は唯あきれたるばかりなり。しかるに堂左衛門は野ぶせりを船に乘らしめて、且つ褒美の金をあたへ、船を遙かに漕ぎいださしむ。吾妻は船中に打伏して泣き居るさま、夕立の雨に蓮の花をそこなひ、木枯の風に玉の枝を折りけるにかとうたがはる。堂左衛門は怒れる面色にて船中に坐し、吾妻を詈りていはく、「汝輩にあらずば、我がいふことをよく〳〵聞け。我汝がために許多の黄金を費すといへども、我を癩人の如くいみきらひてあはざるは、そもいかなる理ぞ。金だに用ゐれば何者にもあれ、まみゆるが阿曾比のならひならずや、我汝に辛き目を見せて、十が一ツ憤りをはらさめと思ひて、かく奪ひ出しぬ。」といへば、野ぶせりも詈りて口をとゞめず、さて此の船を遙かむかうの蘆深きところに漕ぎ入れて、堂左衛門は堤の上に飛びのぼり、自ら携へたる吸筒をとり出し、まくり手して船中を見おろし、「其の女を此に引きあげて我が酒の伽させよ。」といへば、野ぶせりは、「こゝろえ候。」といひつゝ、吾妻を引立てて堤にのぼらんとするに、吾妻は船梁にしかと抱きつきて敢て身をうごかさず。堂左衛門はこれを見て、「しぶとき女めかな。」といひつゝ、手酌に數杯をかたぶけて又船中にくだり來つ、みづから吾妻が手をとりて引きたてんとするに、吾妻はたゞ聲を限りに泣きさけべば、堂左衛門はます〳〵怒り、「やあ汝我に打たれんと事を求むるか。」といひつゝ、襟首をとらへて引倒しければ、櫛櫛枝くだけてばら〳〵と落ち、鬢きれて髪の黑髪みだれけるが、堂左衛門拳をにぎりて打たんとするを、吾妻ふりはなちて槍に立上り、いと凄まじく漲りおつる水中に飛びいらんとせしを、野ぶせりの乞食あわてふためきて抱き止めぬ。堂左衛門は胡盧ひ、「汝身を投ぐる體をなして我を嚇さんとするや。たとへ汝死したりとも我汝を人しれず奪ひ出させたれば、我に於て何の難儀かあらん、さりながら命を失はすもやくなき事なり。汝もし泣きやまば放ちて歸らしむべし、泣きやまずはいつまでも歸すまじ。」といふにぞ、吾妻は漸う泣きやみければ、堂左衛門は野ぶせりに船を漕がしめて、舊の處に歸り、吾妻を岸の上に投上げて、船はいづくともなく漕ぎ去きぬ。吾妻は毒蛇の口をまぬかれたりといへども、此のところはすべて草茫々と生ひしげり、露濃やかなる野原にて、方角だにしれず、殊更夜中なればいづくを心あてに走るべうもあらず、恰も足なき蟹の如くなれば、すべきやうなく、只聲をはなちて泣きけるとき、側づかひの女童が聲して、「こちの君何にかおそはれ給ふ、目を醒し給へ。」といふに心つきて睡りを醒せば、これみな南柯の夢なりけり。吾妻はいとたゆけに息をつき、「くるしき夢を見し事よ。」といひて、身上の汗をぬぐはせ居たる折しも、花車の女來りて吾妻にむかひ、「堂左衛門ぬし御身を贖ひ出し給はんと

議し給ひて、身の價を千兩にきはめ、此の庭の冬牡丹の花の散る比、凡そ二十日を期に金を渡して、曲中をいだし給はんと約したまひぬ。おん身は彼の主をきらひ給ふよし、そはあしき心ぞかし。彼の主のごとく金多く持ちたる人におもはれ給ふは、おん身のよき幸ひならずや、身受の事もよろこばしく思ひたまへ。」といひてそゞろ笑ひす。吾妻はこれを聞くとひとしく胸つとふさがりて、暫しいらへもせざりけり。遠きおもんぱかりなき時は近き愁へ有りとは、今餘吾郎が身の上なり。餘吾郎はじめのほどは、路用の金のうちを遊興につかひけるが、後には吾妻を揚げづめにして奢りをきはめけるゆゑ、纔かの間に彼の常住金の二百兩石塔料の百兩まで殘らずつかひ盡しけるにぞ、いかにすべきと思へど更に術計もなければ、此の程は吾妻が許にもゆかず、旅宿に籠り居てひたすら心を苦しめけり。吾妻が方よりは日毎に文をおくりけるが、一日の文に堂左衞門妾を噴ひ出さんといふことにつきて、急にまみえたきよしをいひ越しければ、餘吾郎はます〳〵心をくるしめ、其の夜かしこへゆき吾妻に見えけるに、吾妻はひたすら身受の事を歎き、「よき思案して給はれかし。」といひつゝ泣くのみなり。餘吾郎今更常住金石塔料のなくてかなはざる金をもちゐ盡せしとは、さすがにいひがたく、先づ當座の心をなぐさめて、後に良計をほどこすにしかじと思ひ、「しからば我急に本國へいひ遣はして金をとりよせ、堂左衞門より前に噴ひいだすべし。」といへば、吾妻はこれを聞きてすこしく心を安んじ、酒酌みかはしなどして鬱結をなぐさめけるが、餘吾郎は元來酒量あさけれども、しばしも愁へを忘れんために酒を飲みすごして、此の夜も妾に宿し翌日も歸らず、又三四日連留し、四日めの日彼の青貝の座敷のはしちかく出でて、庭の木草をながめつゝ、二人しめやかに酒を酌みかはしけるが、吾妻手匣をさぐりて、錦の手帀につゝみたる横笛を取り出し、これは妾が父の祕藏せし濡髪と申す笛なり。おん身過ぎつる夜の物語に、笛を好き給ふよしのたまひしが、さだめて堪能におはすらめ、妾も片端をまなびぬれど、憂き節滋き身にし侍れば靜心なくすておきぬ。ねがはくは教へたまはれ。」といふ。餘吾郎いはく、「己とても拙けれど、所望とあれば默止しがたし。」といひつゝ、竝笛といひて一ッの笛を二人ならび居て其の手ををしへ、餘吾郎指を撫せば、吾妻これを吹きぬ。此の時は是れ冬の始め小春といふ時節にて、殊に暖氣なりしが、此の庭の花壇に植ゑたる冬牡丹の花、霜雪の欺くをおそれず咲きみだれて、國色天香春の花にもをさ〳〵おとらず、造化の不思議をあらはせり。殊に奇らしきは一ッの朶に二輪の花竝び咲きて、一輪は赤く一輪は白し、これいはゆる雙頭の牡丹なり。時に二つの殘蝶花香をしたひ翩々としてたはぶれぬ。此の二ッの蝶一ッは白く一ッは薄縹の色なり。是れもまた奇なりといふべし。然るに吾妻が手飼の猫花の下に睡り居たるが、忽ち眠りを醒して二ッの蝶を目がけ、縊につけたる鈴をから〳〵と鳴らしつゝ、飛上り驅けめぐりて、餘念もなげに狂ひけり。かか

る折しも、庭前の柴折戸の外面に、白木の手束弓に短冊をあまたつけて持ちたる歌占の女趦趄まり、耳をかたぶけて笛の音色に聞きとれたる體なり。こなたの二人はなほ笛を吹きすまし、其の聲咽々悠悠として人をして腸を斷たしむ。猫はまさ〳〵蝶に狂ひ、つひに薄縞の蝶をとりて喰ひ殺しぬ。時に北風はげしく吹きて牡丹を搖り動かしけるが、忽ち赤き方の花はら〳〵と散りて白き方は恙なし。餘吾郎これを見て笛の手をとゞめていはく、「あな不思議や、牡丹花下の睡猫は、其の心蝶にあり。我は心牡丹にあり。一枝に二輪の花咲きて、赤白二色にわかる事、豈天工の私ならんや。昔唐の玄宗皇帝、沉香亭前に牡丹を植ゑて、楊貴妃と共に愛し給ふ、是れ卽ち雙頭の牡丹なり。帝これを見そなはして、『花木の妖なり。』と賞じ給ひ、楊國忠にたまふと聞く。牡丹は花の王といふ、一枝に兩花の王有る事、今すでに南朝北朝と別れ給ひ、一天下に二人の王のおはしますに異ならず。然るに南方の火に屬す紅牡丹、水に屬す北風のために散り失せしは、北朝の聖運強くまし〳〵、足利殿の德風草木をなびかして、南朝味方のともがらの衰花を散らしたまふ前表ならん。前の年信州苫形の城にて亡びたる、相模次郎時行、竝に其の砌打死したる、大佛九郎貞直等が殘黨餘類、南朝の天威を假りて、足利殿を亡ぼさんと計るよし、緋緘の鎧草に身をかためたる冬牡丹、霜の劒はしのぐとも、北朝の烈風をいかでか防ぐ力あらん。今見し如く紅牡丹の散りたるは平家に屬し、時行が殘黨滅亡に疑ひなし。

とまれかくまれ足利方にとりては吉き祥なり。」と、心の愁へも打忘れて、いとよろこばしげにいひけるが、吾妻は涙さしぐみて、「妾が實の名は小蝶といふ。二ツの蝶は夫婦も同然、郎と竝びて百歲を花に宿りて過さめと、心の願ひも遂げられず、女蝶の方は飼猫に、とられて非命に死すといふ、我が身のうへの不祥ならん。昨夜もまうせしごとく、堂左衞門二十日を限りて根引せんといふ由なれば、妾は此の牡丹の花の散る時節の、はやくいたらんを愁ふるなり。いよ〳〵彼が方へ根引の相談きはまるときは、活き存ふる心にあらず。豫て牽牛織女の絕えぬ契りを羨みて、比翼連理と誓ひし事も、其の時は胡蝶の夢とおぼしめせ。」といひさして、餘吾郎が膝に顏をおしあてて、聲もをしまず泣きければ、餘吾郎は背を撫で捺りていたはりぬ。「扨前程より外の方に立ちたる歌占の女は、花壇の方には目もやらで、頭をかたぶけ、今聞きし笛の音は尋常ならず、女のはける足駄にてつくれる笛には、秋の鹿かならずよると聞く。それは鹿笛これも美人の吹きすさむ笛の音いろのいぶかしさよ。」とうちひとりごちてぞ居たりける。かかるをりしも餘吾郎が奴僕、汗もしとゞに息もつぎあへず、庭づたひにいそがはしく來りければ、歌占の女は、庭木のしげりたる裏にかくれ入りぬ。かの僕は庭上に跪き、餘吾郎に對ひていはく、「御旅宿に大變事出で來候ゆゑ、おん迎へに參り候。とく〳〵おん歸り候へかし。」といへば、餘吾郎はいぶかしみ、「そはいかなる變事ぞ。」とたづぬれば、僕曰く、「此にては申しがたき

事にて候、いざとく〳〵。」と急がすにぞ、餘吾郎はなほ心ならず、いそがはしく身支度して僕と共に歸りけり。あとには吾妻が何事やと、胸をいたむる物案じ、吐息して居たりしが、彼の歌占の女は木陰を出でて又柴折戸のもとに立寄り、聲たかやかにいひけるは、「夫れ歌は天地ひらけし始めより、陰陽の二神天のちまたにゆきあひの、小夜の手枕むすび定めし世をまなびて、今にたえざる妙道なり。夫婦の相生緣むすび、待人の來る來ざる、伊勢の濱荻名をかへて、浪花の事のよしあしも、くはしく判じて進らすべし。占とはせ給へや、歌占とはせ給へや。」といひければ、吾妻はこれを聞き、よき折に歌占ひ、爰に呼び入れとふべしと、掌を打ちならして女童をよび、かう〳〵せよといひつくれば、答への聲も長露地の飛石づたひに彼方にゆき、かの女をともなひければ、吾妻は出でて向ひ合ひ、「歌占をひきまうすべし。」といへば、「安き事心得はべり。一番に手にあたりたらん短冊の歌を讀み候へ、くはしく考へてまゐらすべし。」と、いひつゝ弓をさしいだせば、吾妻は心に神を念じ、をしへの如く短冊をとりあげみれば、

鶯のかひこのうちの時鳥しやが父に似てしやが父に似ず

といふ歌なり。女しばらく考へていはく、「おん身は幼くて實の父を失ひ、養父に育てられ給ふならずや。」といへば、吾妻いはく、「誠によくあひぬ、猶委しく判じてたび候へ。」といふ。女又いはく、「鶯の子は子なりけり時鳥の、鳴く音かなしき宿殃にて、度々難儀はあるべけれど、鶯にあうといふ字音あり、あうは逢ふの訓に近く、又來る春の幸ひに逢ふといふ占なり。賴もしく思し候へ。」といふにぞ、吾妻は少し愁へをはぶき、「あな嬉しや苦しかるまじく候か。」といひて喜びぬ。かくて彼の女吾妻が傍におきたる笛を見て目をはなたず、「卒爾ながら。」といひつゝ乞ひとりて打眺め、「これは濡髮といふ笛にはあらずや。」といへば、吾妻は訝り、「いかにしてこれを見知り給ふや。」とたづぬるに、女いはく、「我いかでか是れを見たがふべき、おん身は伊勢國の樂人、二見太夫是次といひし人の娘なるべし、かくいふ我はおん身の姉なるわ、其の證を見すべし。」とて、懷より笛の筥をとり出して見せけるに、濡髮といふ金字あり、こなたの笛ををさめ見るに、間に髮を容れず、符を合はせたる如き箱なれば、吾妻は且おどろき且よろこび、「さては姉うへにておはしけるか。かねて母御のものがたりに、姉うへありとは聞きしかど、おん身と妾とわづかに年三つちがひし兄弟にて、幼きときわかれ〳〵になりたれば、少しもおん顏をおぼえ侍らず、今日はからずも此の笛が證となりてめぐり逢ひしは、父うへの導き給ふにうたがひなし。さりながら愧かしき此の姿。」と泣く〳〵いへば、姉は涙をおしかくし、いな〳〵少しも恥づべきことにあらず、養父の急難を救ふために身を賣りしといふ事は、風のたよりに聞きしかど、いづくと所もさだかならねば、なつかしくはおもひながら、尋ぬべき便もなかり

つ。まづはやく聞きたきは母人のおん事、恙なくおはすや否や。」といへば、「養父も母御も思ひがけなく今は御出世あそばしぬ。それにつきては物語るべき事さまゞあり、爰は人目も端近なれば、まづこなたへ。」といざなひて、奥の一間に入りにけり。時に箕腹蟻右衛門、沙土七といふ僕をつれて、樓上をくだり、此の所に出で來りて、四邊を見まはし、聲をひそめていひけるは、「此も端近なれども、あたりに人なきこそ幸ひなれ。我汝が心底を見とゞけしゆゑ、密事を語りて聞かすぞかし。我かねて隱謀あるにより、執權職山咲莊司に何がな罪をおはせて失はんと思ふ折節、餘吾郎が上京を幸ひ、彼をそゝのかして此の曲中に誘ひ、放埒者にせばやと計りしが、彼は原聰明くて、思慮の淺からぬ者なれば計も空しからめと思ひの外、吾妻が艶色に迷ひて心を亂し、許多の黄金を費し、父の代參して高野山に納むる金までも、殘りなくもちる盡せし樣子なれば、當分鎌倉に歸る事能ふべからず。これによりて我且づ彼よりさきに鎌倉に歸り、彼が在京の中の放埒をくはしく主君にきこえあげて讒言をもちるなば、おもくは切腹かろくてあはう拂ひは必定なり。しかるときは其の罪を父莊司にもおよぼさしめて、親子ともにうしなふべく思ふなり。我宿望をとげなば、汝にも祿あまた與へて、よき武士に取立て得さすべし、喜ばしからずや。主用も已にとゝのひ、今夜が曲中の餘波なれば、阿曾比共を呼び來りて、汝も共に一杯をかたぶけ前祝ひせよ。」といひければ、沙土七は小踊りしてよろこび、勝手の方へ走り去きぬ。蟻右衛門は樂しけに、臂枕して寢そべり、膝の頭を打つて拍手をとり、一月にはつらき小倉山其の名はかくれざりけり。」と、曲舞々の音頭を諷ひつゝ、寛々として居たる折しも、旅裝束したる武士庭づたひに來るをみれば、是れ乃ち梅ヶ谷郡領の家臣袴田紺九郎なり。蟻右衛門はかくと見るよりいそがはしく身を起してたち向ひ、「氣づかはしや紺九郎主、何等の事ありて上京せられしぞ。」といへば、紺九郎は息もつぎあへず、「火急の事を告げん爲、夜を日につぎて上京し、和主の旅宿をたづねつるに、此所におはすと聞きてこれまで來れり。爰は端近にて密事を語りがたし、しかるべき所に案内したまへ、とく〳〵。」といそがすれば、蟻右衛門は益氣づかひ、奥まりたる小座敷に連れ去きて、「はやく樣子を聞かし給へ。」といふ。紺九郎聲をひそめていはく、「和主と我とかねて心を合はせ、蛇ヶ谷の老女の味方につき、且づ月影ヶ谷と梅ヶ谷の兩家を亡ぼし、其の勢ひに乘じて蟄懐の旗を飄し、南朝の天威を假り奉りて北朝をかたぶけ、平家再興の時を得て、我が輩も一國の主となり、歡樂をきはむべしと企てたる隱謀の密書を、山咲莊司に奪ひとられて隱謀あらはれ、莊司君命をうけ、上京して和主を捕へ鎌倉にひくとて、旅の用意をすると聞く。こはいかにすべきと驚く間もなく、我が主人にも告げたるにや、我が宿所に捕人をむけられし故、危き所を斬り拔け、辛うじて逃げ上りぬ、和主もとく〳〵逃支度したまへ。」といへば、蟻右衛門は忽ち面色青草の色に變じ、

心あわててものだにいはざりしが、しばしありていふやう、「隱謀露顯のうへは片時も當地に足を留め難し。一旦兩人わかれ〳〵に身を隱して、時節をうかゞふにしかじ、再會の所はかやう〳〵。」と耳につきていひければ、紺九郎は打點頭きて出で去きぬ。蟻右衞門は沙土七を呼びいだして有增を語り聞かせ、「汝もしばらく身をかくせ。」といひて持合はせたる金を路用に與へ、主從わかれて思ひ〳〵に出で去きぬ。かくて時刻もやゝうつりて此の日も已に暮れけるが、煙花の習はしとて、晝よりもなほ賑はしく、二階座敷奥座敷、間毎々々に酒宴を設け、或は彈き或は諷ひ、笑ふあれば耳語くあり、己がさま〴〵興じけるが、唯青貝の座敷のみは人けもなく、燈火もたてざりけり。かくて初夜過ぐる比庭さきの萩垣をおし破りて、しのび入りたる白髮の老女、緣に上りてひし〳〵と歩みゆき、闇にも光る梟の、眼をくばる廣座敷の違棚に載せありし、吾妻が手箱に探り當りて、彼の笛を奪ひ取り、懷におし入れて退き出でんとしたる折しも、吾妻はみづから手燭をとり、姉を導きて此のところに出で來り、老女を見つけてあやしみつゝ、手燭の光に顏を見て、「ヤ、そなたはいつぞや餘吾郎ぎみに雇はれて來つる婆々ならずや。」といへど老女は見むきもせず、ものをもいはず去かんとするを、歌占の女弓をもて押しもどせば、老女はこれをふり拂ひて、又踏み出すを歌占は、弓を斜に取りなほして、やらじとさゝふる卽座の枉、しばらく挑みあらそひぬ。時に怪しいかな老女が懷にかくしたる笛、おのづから音を發しければ。吾妻は驚き、「扨こそ曲者、其の懷こそ怪しけれ。」といひつゝ、手燭かざしつくれば、老女は手ばやく打落す。二人は探る、暗まぎれに、行方もしれずなりにけり。

是れ乃ち鎌倉、蛇ヶ谷の老女なり、味方を招き軍用金を集むるため、諸國の靈場をめぐる旅の女に身を扮し、しばらく當地に足をとゞめしが、此の夜笛を奪ひとりて又他國に赴きけるとなん。

## 七　木枯の果てはありけり記念の竹刀

扨も其のとき餘吾郎は僕の迎へ心ならざれば、道を急ぎて旅宿にかへり見てけるに、一昨日紀の國より歸りしといふ南方十字兵衞、腹十文字に搔切りて朱に染りて伏し居たり。餘吾郎はこれを見るより、こはそもいかにとあわてまどひ、抱き起して見るに、誠に見事なる自殺にて、已に息絶え身上は氷の如くに冷えかたまりければ、唯あきれて物だにいはず。良ありてやう〳〵心をしづめ、こは何ゆゑにかくなりしやといぶかり、傍邊をみれば自筆の書置あり。いそがはしくひらき見るに、其の文にいはく、

君僕を當地に殘しおかれ、先だちて紀州高野山に赴かせ給ひ、僕は御石塔成就の日を待ちて、後より參るべしと命じおかれ候處、御留主のうち、旅宿のつれ〴〵に、ふと五條坂の遊君にしたし

み候て、勿體なくも御先祖御追善のために御携へあそばされ、僕に預けおかせられたる常住金をつかひ捨て、今に至りて先非を悔い自殺仕候。やう〳〵殘金百五十兩御座候。此の金子を石塔料に遊ばされ、乍憚御父君へよろしくきこえあげさせられ、僕が死骸御かた付け被下候はば、生々世々難有儀に奉存候。恐惶頓首

永和元年十月某日

餘吾郎君

南方十字兵衛

とかきたり。餘吾郎これを讀み終りて頻りに涙を落し、「さては我が放埒に金子を殘らずつかひ捨てたる事を知り、我が罪をおのれが身におひて切腹し、のち〳〵までも馬鹿者不忠者といはれんをいとはず、我をかこひて死したる忠志、たとへいふべきものだになし。戰場の打死も、後代に美名をのこさめと思へばこそ命もをしまざれ、汙名をいとはず忠死せし者は古今に稀なり。不忠者となりて死したる心底をはかり思へば、腸もちぎるゝこゝちすなり。今將思ひあはすれば、前程富士屋の庭の胡蝶のありさま不祥なり、歌占の歌に、

北は黄に南は青く東白西くれなゐにそめいろの山

といひて南方は青きにかたどる。此をもつて考ふれば、淺葱色の蝶猫にかまれたるは、此の南方十字兵衛が非命に死すべき前表にてありしものを、唯冬の蝶の珍らしとのみ思ひしは凡慮の拙き所なり。彼を思ひ是をおもふに、我傾國の色に迷ひ、祖父追福の金を失ふのみならず、あたら忠臣を殺せしこと、不孝といひ不仁といひ、我が身の重き事ばかりを知るべうもあらず。今後悔すれども更にかひなし」といひつゝ、むなしき骸に取りつきて、悲歎の涙にむせかへり、生ける人に物いふ如く、「嗚呼面目もなき我が放埒ゆるしてくれよ、十字兵衛。こゝろざしは過分なれど、汝になき罪をおはせ、いかでかながらへ居らるべき、我も今自殺して汝が死路をしたひ、主從ともに死出三途を伴ひ、又の世は汝が臣と生まれて、此の恩を報ゆべし。」といひて、書置にそへたる百五十兩の金をとりあげ、「さるにても此の金はいかにしてとゝのへ、石塔料に殘しおきくれけるや。」と此の不審はれず、なほ四邊を顧みるに、十字兵衛が常に身を離さざる刀に、乍憚此の刀は餘吾郎君へ記念に差上げ奉り候とかきたる紙札をつけおきぬ。餘吾郎これを見て、誠に是れは前年、相模次郎時行信州苫形にて亡びたる刻、此の十字兵衛月日のおん旗を奪ひて、我が君判官に差上げたる拔擢の功によりて、我が君より賜はりたる朝烏といふ名劍にて、陪臣の身に稀なる譽なりとて、當時羨む者おほかりしと聞く。我は其の時幼年にて、思へば夢の一昔、幸ひなるかな我今此の刀にて切腹せば、主君のおん手打になると同然にて、聊か罪を贖ふ便ともなるべしと心を決し、兩肌を押脫ぎて、彼の刀を拔き放しけるに、これ眞の

刀にあらず、竹にて造りたる刀にて、十字兵衛が自筆の文字あり、これを讀むに、

拙者此の度の切腹犬死に相成不申樣
御短氣御愼み遊ばされ可被下候

とかきつけたり。「扨は此の刀の身を賣りて百五十兩の金とゝへくれたるに疑ひなし。此の竹刀のかきつけといひ、かくまで深く我が身の事を思ひくれける心底の過分さよ。」といひて又死骸にとりつき泣きけるが、「いかに思ひ返しても活きては居られず。」とひとりごち、再び我が差料の刀を拔きて、ほとほと腹につきたてんとしたる折しも、「やれはやまり給ふな。」と聲をかけて次の間より走り出で、餘吾郎が手に取りつきて止めたるは、莊司が僕路平といひて、此の度鎌倉より飛脚に來りし者なり。餘吾郎は手を止め、「汝は何用にて上京せしぞ。」と尋ぬるに、路平は手をつき頭をさげ、恭しくいひけるは、「拙者は昨日京著仕り候、おん母君連夜おん夢見あしき故に、君の御旅中を殊の外氣づかひ給ひて拙者に命ぜられ、御安否をとひ奉らんため飛脚に參り候なり。君只今御自殺遊ばされ候ては、十字兵衛は犬死になり候。彼御短氣をとめ犬死にならざる樣にと、其の竹刀に書き殘せしは此の事に候へば、彼が忠死をおん憐み候はば、おん身を全うあそばされ、よき時節をもつて十字兵衛がおん身にかはりて相果てし汙名を雪ぎ、南方の家を恙なく相續仕るやうに、よく〳〵御賢慮をめぐらされ下されかし。昨夜十字兵衛ひそかに拙者を近づけて申せしは、其方上京せしこそ幸ひなれ、おん供の若黨奴僕おほけれども、口さがなければ我が心腹をあかしがたし。その方は新參なれども見處あれば、我が思ふ處を一通りいひ置くあひだ、我が自殺の後餘吾郎君もし面目なきなどおほしめして、卒爾のおんふるまひもあらば、我になりかはり此の理を聞えあげてとゞめ奉れ。』といひ殘し候仔細を、今十字兵衛になりかはりて、具にきこえあげ候べければ、十字兵衛が直に申し上ぐる事と思召されて、一通りおん聞きくだされ、おん自殺をおんとゞまりくだされかし。扨十字兵衛まうし候は、我が餘吾郎君五條坂へおん通ひある事を露ばかりもしらず、先に紀の國へ去くべしとある命にしたがひ、いまだ若年のおん方を手放して、遊所おほき都の地に長く逗留させまうせしは、我が一生の誤り、今悔めどもせんすべなし。我已に高野山に逗留して相待ち申すといへども、御登山なければ、こはいかなるゆゑに御遲滯と氣づかはしく思ひ、急ぎ歸りて一昨日京著し、若黨奴僕等に聞けば、五條坂に連留し給ひておん歸りなきよし、くはしくとへば常住金石塔料ともに、殘らずおんつかひ捨ての樣子なれば、こはけしからざる事、我おん側につきそひ居らば、いかやうにも諫言を申しあげて、さある御不行跡はさせまうすまじきに、しなしたり殘念とおもへどかへらず。こはいかにすべきとおもひ煩ふなかばへ、昨日石工來り、おん石塔殘らず成就せしゆゑに、代金をまうし受けたく候といふ。旅中なれ

ば金をとゝのへ償ふべき手段もなく、情なやおん國元にて少しもあしきおん行跡はなかりしが、畢竟傾國の色に心を亂し給ひての事ならめ。尋常の諫めにては御本心にはかへり給ふまじと思案をきはめたれば、我が一命をさしあげ奉りておん諫め申すなり。又朝烏の刀は身にもかへ難き物なれども時の用には是非なければ、これを賣代なして金子百五十兩とゝのへおきぬ。これを百兩石塔の價に遣はされ、殘る金にて石塔を高野山へ上せ給ひ、せめて父君の御願望のなかばを遂げられ、一日もはやく鎌倉におん歸りありて、我が書置をもつておん身の臺りを晴らされ、必ず〳〵我が切腹をおん悔みなきやうにまうし上ぐべし。父君のおん目がねにて、餘吾郎君の守りにつきそひ來る我なれば、いづれの道にも切腹せざればまうし譯たちがたし。おなじ死する道ならば、おん身にかはり其の罪を引きうけて死すべしと、已に覺悟をきはめたり。是れおん父君をあざむくに似たれども、其の罪は冥途よりおん詫を申すべく思ふなり。此の度の放佚無慙を御後悔あそばされ、此の後は阿曾比ぐるひは勿論、すべてあしきおん行跡をかたくおん慎みあるやうに、我にかはりてよく〳〵きこえあげくれよ。」といひ殘し、兎角君のおん事のみ苦に仕り、國に殘せし妻子や孫の事なども心に懸り、あと〳〵の事なども定めて氣遣はしく思ひ候はんが、それ等の事は一言もいひ殘さざる心のうちを御推量あそばされ候へかし。さばかり厚き十字兵衛が忠心も、今御自殺遊ばしては水の泡と相成候。此の處をよく〳〵御分別遊ばされ下されかし。」と、委しく物語りて悲歎の涙せきあへず。餘吾郎もこれを聞きて、益〻歎きに迫りけるが、しばしありていひけるは、「十字兵衛がいひ殘したる詞といひ、此の竹刀の書置といひ、死ぬも死なれぬ義理なれば、生害はとゞまるべし。さりながらそれにしても、十字兵衛に常住金をつかはれ、石塔ばかり高野山に建てたりといひて、おめ〳〵國へは歸りがたき理なれば、我はしばらく身を隱し、せめて朝烏の刀を買ひもどして、十字兵衛が家名を立つる便とすべし。汝は十字兵衛が此の書置を携へて鎌倉に歸り、我は面目なきとて京都より直に行方しれずなりしと、父母に告げてくれよ。」といひ含め、さて十字兵衛が亡骸は病死の體にして鳥邊野に葬り、かの金を用ゐて石工に價を償ひ石塔に書銘をそへて高野山に送り遣はし、此の度召し連れたる若黨奴僕等は此の所より直に暇を遣はし、路平一人を鎌倉に歸らせ、旅宿をあけ渡し、「十字兵衛が忠義の魂をこめたる此の竹刀は、我が一生の守にすべし。」と、餘吾郎これを腰に帶びて此の處を立退き、洛外の菜畠村といふ處の小家を借り、昨日に變る浪々の憂身となり、手づから煮燒の業をなして、しばらく月日を送りけり。かくて路平は鎌倉に歸り、主人莊司夫婦の面前に出でて十字兵衛が書置をいだし、かやう〳〵と告げたりけるに、莊司夫婦はこれを聞き、「十字兵衛が忠死とは露しらず、彼日來の老實に似ず不忠のいたり、言語にたえたる行跡なり。」とて怒り強く、頓に十字兵衛が妻子を召し呼び、右の始末をいひ聞か

せて、書置を見せければ、十字兵衞が妻眞弓これをみて悄れはて、兒子南餘兵衞と共に且驚き且歎きけれども、莊司の怒りつよければ少しの宥免もなく、其の家財を殘らず取上げ、妻子を啞方拂にぞしたりける。十字兵衞が妻眞弓といふは、夫に年四つ五つまさりて半白の老女なり。兒子南餘兵衞といふは前つ年妻を失ひ、窗太郎といひて今年五歳の男子あり。かくて餘兵衞窗太郎を背おひ母の手をひきて、年ひさしく住み馴れたる鎌倉を立退き、涙に袖もほしあへず、賴む木陰も雨漏るこゝちして、立ちよるべき所だになければ、眞弓はなほうち歎き、夫十字兵衞どの日來ものがたき氣質にて、いさかも邪みたる心を持たず、行ひの正しき人なるに、今更年にも恥ぢず、阿曾比ぐるひに主人の金を遣ひ捨て給ひし事、妻子の前も恥ぢ給はずや。よも本心にはあるべからず、物に狂ひやし給ひけん。自殺したまふとも、汙名は世上に隱れなく、彼が類は武士の風上にも置くまじき者などと、死後までも辱められ給ふ所に心つき給はずや。家名を汙すのみならず、子や孫まで不忠者の子共等と、一生人に指さされ、忌み嫌はれんを不便とは思さずや、悔めしの十字兵衞どの、情なき夫や。」と、涙にむせびつゝかきくどき、主人の罪を身にかづきて、忠義の爲に死せしとは、夢にもしらぬぞ哀れなる。餘兵衞も歎きは盡きざれども、はてしあるべき事ならねば、母をなぐさめつゝつひに鎌倉を出で去きぬ。扨僕路平はいかなる所存やありけん、直に暇を願ひて行方しれずなりにけり。

## 八　我が雪とおもへば輕し身受の千金

餘吾郎旅宿よりむかひ來りて歸りしより後は、吾妻が許に音信をせざれば、吾妻はいと氣づかはしく思ひ、文かき人を雇ひて旅宿に遣はし、音信を聞きけるに、使歸りていへるは、「餘吾郎ぬし旅宿を明けわたして國にも歸り給はず、いづちへ行き給ひけん行方しれずと申す。」といひければ、吾妻はこれを聞くとひとしく、胸つぶれて露現もなく、あきれまどひつゝ、「さてはおほく黃金を費し給ふゆゑにしかなり給ひしにや、さりとてもかう〳〵と打ちあかして語り給はぬこそ悔めしけれ。」と、或は恨み或は悲しみ、ものも咽にとほらず夜もねられず、月日を過すべきこゝちもなけれど、いかに結べる露の命、強面消えも失せなで焦れ物を思ふのみなり。かくて日を送りけるに、鮒尾賀堂左衞門富士屋に來りて、「吾妻が身の代金とゝのひつれば、いよ〳〵身受すべし。」といふにぞ、富士屋のあるじ吾妻をよびて、かう〳〵といひ聞かせ、「堂左衞門ぬしの方へゆけ。」といふに、吾妻は答へだにせず、只泣きてうけがはざればあるじはいとはらたち、花車の女にいへるは、「吾妻身受のことを肯はぬは我がまの至りなり、彼が恋に背くを捨ておきては、外々の阿曾比等にあしき癖つきて、我が活業の大きなる妨げとなれば、打呵みてうけがはせよ。」といへば、花車の女、「心え候。」といひて吾妻にむかひ、

或はゆる〳〵理を說ききかせ、或は強くいひこらせど、餘吾郎ならでは夫にせまじと豫て心に誓ひをれば、いかにいひてもうけひかず。花車の女ももてあまして、かう〳〵とあるじに告ぐるに、あるじは大きに怒り、「いでさらば辛き目見すべしとて、吾妻をとらへて上著の衣をぬがせ、纔かに肌著一つにして、しごき帶にて高手小手に縛り、強く打擲きければ、吾妻は聲かるゝまでに泣き叫ぶを、庭に引きおろして、遙かに隔ちたる假山のほとりの松の木に繫ぎおきぬ。かばかりの名妓をかく情なくあつかふも、利をのみ貪る煙花のむじんなる人心なるべし。此の夜堂左衞門此の樓上に、舞妓歌姬をあまたつどへて酒醼し、笑ひどよめき席上ゆすりみちて興じけり。これは堂左衞門吾妻に辛き目を見せ、此方のたのしげなるを聞かせて靡かすべき心なるべけれど、そは趣をしらざる愚わざにて、吾妻に嫌はるゝも宜なり。此の時は已にこれ霜月にて寒氣殊に嚴く、空のけしき烈しう風吹きあれて、いみじう降りくだる雪、粉々揚々として柳絮の飛ぶにひとしく、鵝毛を散らすが如く、見るうちに高く積りて、一面に玉を敷くかとうたがはれ、假山泉水、庭の木草、洲濱形、葦手形、立石、蒔石、瀧落し、架垣石燈籠のたぐひ、庭上の好景、前栽の莊嚴、すべてみな白妙に埋れて、心くるしう遣水もいといたうむせびて、池の水もえもいはずすごきに、吾妻は松の木につながれて、薄綿の肌著一重なれば、寒氣肌にとほり身上いらゝぎ、手足凍えてたへがたさに、身をもだゆれば、松のこずゑの雪さとこぼれかゝりて身に積りぬ。彼方の樓上には舞妓のたち舞ふ影明障子にうつり、歌妓のうたふ聲も聞えぬ。

けふは越路の人の月、あすはいづくの人の花、扨もうたての沙婆世界、おもうてたびね白絲の、昔がましぢやなか〳〵に、染めてしんくの絲のもつれの物思ひ。

と、うたふも我が身の上と思へば、いと〻悲しく泣きよわりて、「あなくるしやたへがたや。おもふ岸にはそはすまじ、おもはぬ方に花咲けとは、身のうき草の譯しらぬ、情なき心ぞかし　いかに妾を憎むとも、雪責とはあまりぞや。かくまで苦痛をさせんよりは、一思ひに殺してよ。」とくどきたてて泣き叫べと、彼方の樓上の騷ぎにまぎれてきこえざれば、誰ひとり哀れと思ふ者だになし。雪はますます降りまさり、吹雪に打たれて撲地倒れ、たふれては起きあがり、涙と血と相和して瀧の如くに流しッ、、氷の地獄八寒のくるしみ忽ち身をとぢて、紅蓮の衆生に異ならず、鬢きれて顏にみだれかゝりたる黑髮も、雪積りて白髮のごとく、なましき身も氷りすくみて倒れ伏し、息もたゆげに喚きてぞ居たりける。かくて時刻もうつりッ、、小夜もやうやく更けわたりて、座敷々々の人語もやみ、雪も降りやみたるに、庭ずゑの竹林さや〳〵と鳴りてつもれる雪散り亂れ、怪しげなる者つといでたり。吾妻は此の時やう〳〵頭をあげ、雪あかりにこれを見るに、覆面頭巾廣袖の衣服手甲股引まで、雪に

まがふる白裝束、忍びの者と見えたるが、雪踏み分けて歩み來つ、小脇に抱へたる千兩箱に、吾妻身受金と書きたる札をつけたるを、彼方の座敷の牀の間にするおきて、身を轉し此方に歩み來りて、吾妻が背後に立ちまはり、氷なす刀をすらりと抜き放しければ、吾妻は驚き括られながら飛び退きけるが、よく〳〵思へばかかる呵責をうけんより、死ぬにしかじと思ふにぞ、覺悟をきはめて身を投げつけ、襟さしのべて、「いざ殺せ〳〵。」といふ。案にたがひて曲者は吾妻がいましめをきり拂ひ、物をもいはず背におひて、もとの所よりくゞりいで、玉塵を踏みちらし雪煙を蹴立てて、いづくともなく走り去く。吾妻は夢の裏になほ夢を見るこゝちして、此の者に負はれゆきぬ。思ふに千兩箱を携へてしのび入り、人を盗みて逃げ去きしは、世にめづらしき盗人なり。是れかならずいはれあるべし。

雙蝶記卷之三　終

# 雙蝶記一名霧籬物語　卷之四

江戸　山東庵京傳　編

## 九　藁屑に花を見捨てし胡蝶の狂亂

それは扨おき餘吾郎は、洛外の栄畠村といふ處に、隙あらはなる葦の屋の憂節滋き栖をもとめて、獨りいぶせくくらせしが、夜の雪いみじう降り、くづれたる壁のひまをもる寒風肌を斬るがごとくなれば、臥しながら目もあはず。夜終來し方行末のことなどおもひつゞけて夜をあかし、烏のなき渡る比起きあがり、火打とりて火を打ち、圍爐裏に柴を燒きてあたり居たるに、外の方に人のうめく聲きこえければ、いぶかしみッ、氷りつきたる戸を辛うじて引きあけ見るに、雪は降り止みたれど滿地にたかくつもりて、一面の白妙となり、氷柱は劍を逆に植ゑなみたるやうにて、見るにさへ身上いらちぎぬ。門首の雪をかき分けつゝ竹の編戸をおしひらき外の方を見るに、赤きひた鹿子の小袖を著て黑髪を亂したる女、身を半ば雪にうづみ、うつぶしに伏してうめき居たり。いかなる人にやとますま

すいぶかりッ、立寄りて引起し見るに、是れ乃ち吾妻なれば、こは思ひかけずとうち驚き、急ぎまどひて身上の雪を打ちはらひ、氷りすくみて息もたえ〳〵なるを抱きて裏に入り、醒藥をのませ燒火に身をあたゝめなどしければ、漸う人ごゝろつきて目をひらき、餘吾郎を見て、「こはそも夢か。」といひさしてとりすがり、且づうれし涙にむせびけり。餘吾郎は、吾妻が背中をさすりていたはりッ、「いかなる故にて彼處には居つるぞ。」と尋ぬれば、吾妻は涙をおしのごひ、雪責になりたる事の始めより、怪しき者しのび入りて身の代の金千兩を殘しおき、背におひて五條坂より此のところまで走せ來り、すておきて行方しれずなりし終りまで詳に物語りければ、餘吾郎はこれを聞きて眉を顰め、「そはこゝろ得がたき事かな、そなたの身の代を償ひながら、何ゆゑに奪ふがごとくせしや。又千兩といふ大金をいだし、そなたを奪ひて我が門にすておきしも不審なり。そも且づ何人の仕業なるや、我は少しも心當りなし。そなたはいかに。」といふ。吾妻も不審はれず、「妾も更に心當り侍らず、唯夢とのみおもはるゝなり。さりながら身の代を償ひて妾が難儀を救ひ出し、處もおほかるべきに、おん身の住みたまふ此の門首にすておきてゆきしは、妾をおん身にそはせ給はる深き情の志ある人の仕業なるべし。とまれかくまれ身の代の金償はれたる我が身なれば、おん身と夫婦になるとも妨げなし。今改めて妻となしたまはれかし。」といふ。餘吾郎いはく、「これまでのそなたの深切過分には思へども、いはれありてそなたを妻になしがたし。これまでの薄き緣とあきらめて、五條坂に歸りくれよ、かならず必ずつれなき者となおもひそ。」といへば、吾妻はつと膝を進めて急がはしくいふやう、「さては前に誓ひ給ひし詞はみな虛りにてはべりしか、此の際に至りてしかのたまふは、さだめて外にいひかはし給ふ女ある故なるべし。さる事のはべらばなどてとくにはのたまはぬぞ、悔めしや情なや。」と息卷きつゝいひて、餘吾郎が胸板をとらへ、左右にふり動かして泣き叫ぶにぞ、餘吾郎はほと〳〵もてあまし、「謂れありといふはさる類のことにあらず。」といへば、「しからば其の謂れはいかに。」と問ひ詰められ、あけていはれぬ餘吾郎が胸の裏の苦しさは、何といはまの百合の花、さしうつぶきて詞なし。吾妻は餘吾郎が體を見て、いよ〳〵心變りせしに疑ひなしと思ふにぞ、ます〳〵恨み泣き悲しみけるが、とても五條坂に歸りて堂左衞門が方へゆくべき心なければ、此にて死ぬにしかじと覺悟を極め、餘吾郎が傍にありける一腰をとりて拔き放し、吭につきたてんとしてよく〳〵見れば、是れ竹の刀にて、

拙者此の度の切腹犬死に相成不申樣
御短氣御愼み遊ばされ可被下候

と書付けてあればいぶかしみ、おほえず猶豫ひけるが、餘吾郎其の手を捉へていはく、「自害とまでお

もひ詰めたる誠心の默止し難ければ、口外しがたき事なれどもうちあかして聞かすなり。そなたと夫婦になられぬといふいはれは、原其の竹刀より起るなり。斯樣々々。」と彼の常住金石塔料の金を使ひ果したるにより、南方十字兵衞我が身にかはり罪をかづきて切腹したる事、旅宿を立退きて此の處に栖を求めしまでの始め終り、枝葉も殘らず物語り、鎌倉月影ヶ谷判官の家臣なる事も此のとき始めて語りければ、吾妻はこれを聞きて、「扨は妾が養父とおなじ君に仕ふるおん方にて坐せしか。」とうち驚き、我が身の上の事もつばらに語りければ、餘吾郎も、彼は原同家中背元澀右衞門が養女にて、動之助と姉弟なる事を始めて知り、「緣あれば千里を隔てても逢ひ易く、緣なければ面を對しても見え難しといふ常言もうべなり。」と感嘆す。吾妻ふたゝびいひけるは、「十字兵衞どのとやらん、さばかり忠義の人なるを非命に失ひしは、皆妾が身より起りたる事なれば、つれそはれぬと宣ふも實に理なり。さりながら今更妾が心の誓ひを破り、他に嫁すべき心なし、此の身をいかにすべき。」といひさして聲を放ち身を悶えつゝ泣き叫びければ、餘吾郎も其の心根を不便に思ひて涙さしぐみ、「いな〳〵十字兵衞を失ひしはそなたの身より起りしとはいひながら、畢竟は我が放埒なるゆゑなり。そなたは養父の急難を救ふために身を賣りしとなれば、一旦孝の道も立ちぬ。我はそれにはひきかへて、不孝不仁の罪深し。千字兵衞が此の竹刀の書きおきをむなしくせまじと思ふばかりに、かくながらへて居るぞかし。さりながら同家中背元氏の女と聞く上は、そなたの身をあやまたしては猶さらに義理たたねば、十字兵衞が靈魂に詫言し此の竹刀を媒人にして妻となし、朝烏の刀の行方を尋ね買ひもどして、鎌倉に歸參を願ひ、十字兵衞が家を立て、彼が靈魂を慰すべきなり。」といへば、吾妻はこれを聞き、蘇生りたるこゝちして喜ぶ事かぎりなし。ときに餘吾郎立上りて佛壇の扉を開く。裏を見れば刃譽義劍信士、俗名南方十字兵衞、永和元年十月某日と、書付けたる白木の位牌をすゑて香花を手向け、懇に祭る體なり。吾妻はこれにむかひて念佛をとなへ、とかく涙はとゞまらず。餘吾郎は手向の水を汲みかへて合掌し、「南無幽靈頓證佛果菩提、南無阿彌陀佛あみだ佛。」ととなへッ、廻向に時を移しぬ。此の下には物語るべき事なし。かくて吾妻は餘吾郎が妻となり、わびしきくらしをいとはず、羅綺の重衣にたへざりし昔にかはりて、木曾の麻衣あさましく、身はやつせども川竹の、憂さはもぬけの秋の蟬、聲の時雨を慰めつ、手繰引結ひ前垂の、姿を今の水仕業、心汙さぬ身ばれには、鍋の數なき庭竈、阿彌陀佛の誓ひにも、すくふにたらぬ白粥の、煙も細き竹火箸、流しの水の飛鳥川、菜刀を硎ぐとにかくに、米淅桶の底拔けて、あるに效なき吹竹の、飢ゑに堪へざる節もあれど、翠の帳紅の、針の席を敷きかへて、破屏風に古夜著を、鴛鴦の衾とむつましく、物たらぬをいぶせくも、思はで日をおくりけるが、昔調べたる琴の音も、松風の時雨とかはり、鉢敲き寒念佛の聲もやゝ氷りて、世の

人のすさまじき物にいふなる師走の月もかたぶき、胸敲き、星佛賣の交如ふ街上に年木積む車の音さへいそがはしげにて、年浪のよどまぬ水には柵もなく、寒梅の花のかをりを暦の奥に卷き納めて、已に此の年も暮れにけり。明くれば永和二年の春なり。餘吾郎始めのほどは十字兵衛が殘しおきたる金の餘りにて朝夕の煙を立てしが、坐して食らへば山も崩れ、坐して飲めば海も乾くの理なれば、今は殘りなく用ゐ盡し、これより後はいかにして、日をおくるべき、何にまれ活業をはじめずはと思ふうちに、程なく彌生の比となり、やゝ夏に近ければ、時の物とて夫婦ともに、はんじ物の團扇の繪をかきて纔かの價を取りぬ。此の家のめぐりはすべて畠なるが、時しも菜の花の盛りにて、朝夕黄金の色は目に見れども、おのが身には一錢のたくはへもなく、やう〳〵其の日々を送るのみなり。さて十字兵衛が命日にあたる日、餘吾郎手づから菜の花を折り、此の花の色に似て、金色の佛に成れかしと思ひッ、これを佛壇に供ず。吾妻は手向の水を茶椀に汲みて蓮ぶとて取りおとしけるに、物にあたりて二ッに破れければ、「いつになきあやまちせしことの氣がゝりさよ、妾が汲みたる手向の水、冥途におはす十字兵衛どのの心にかなはぬ故にか。原我が身より起りて非命に死したる人なれば、さも理なり。」と、涙さしぐみつゝいへば、餘吾郎は打笑ひ、「さ許りの過はいつせんも計られず、氣にかくるは愚癡なり。」といふにぞ、「さもあらんか。」といひて、再び別の器に汲みかへてぞ手向けける。

かくて餘吾郎は十字兵衛が墓參りすとて出で去く。吾妻は夫のかきさしおきたる團扇の繪をかく。さて時刻やゝ移りけるに、餘吾郎鳥邊野より歸りて裏に入らんとせしに、家の傍の竹藪の陰より武士に仕ふる奴僕と思しき者出で來りて、窗の下に彷徨みければ、餘吾郎はいぶかりッ、裏に入らずしてこれを窺ひ居る。とはしらざるや彼の者は窗の下にて咳きすれば、吾妻は繪をかきさして立ち、窗より顔をさし出して何にかあらんたがひに聳き、或は點頭き、或は笑ひなどして彼の者はかへり、吾妻は再び繪をかきてぞ居たりける。餘吾郎は此の體を見て益いぶかりけるが、さあらぬ顔して裏に入れば吾妻は出でむかひ、「思ひしよりはおん歸りの早かりし。」などいひて常に異る事なく、「晝飯とゝのへてまゐらすべし。」といひて庖厨に入りぬ。餘吾郎は手を叉き物思ひ顔して居けるに、しばらくありて外の方に案内を乞ふ者あり。餘吾郎立出でて編戸をひらき見るに、金鐔白柄の兩刀を帶び衣服もなみならず、富みたる武士の浪人と思しき打扮ちなれば、何人にやと思ひしに、編笠とりたる顔を見れば、五條坂にて見知りたる鮒尾賀堂左衛門にぞありける、しかれども見知りたるのみにて初對面なれば、それともいはず、「何等の用ありておはせしぞ。」といふ。堂左衛門いはく、「委しき事はゆるやかに語るべし、免し候へ。」といひつゝ遠慮もなく打通りて座につき、「某今日和主の宅を訪ねて來つるは別事にあらず、和主に賣るべき物ありて來つるなり。」とて錦の袋に入れたる白鞘の刀を出し、「これ

をとくと見候へ。」といふ。餘吾郎これを取りしぶ〳〵抜きて見るに、思ひかけず是れ十字兵衛が賣代なせし朝鳥の刀なり。もし僻目にやと打ちかへし〳〵つら〳〵見るに、其の紋星の行なるが如く、其の光波の溢るゝが如く、水には蛟龍を斷り、陸には犀革を剸るべき金鐵の精おのづから現はれて、疑ふべうもあらねば打驚き、此の刀は如何にしておん身の手に入りしや。」といふ。堂左衛門いはく、「頃日刀劍を商ふ者のもとより償ひ得たり、是れ和主の買ひ得ざればなり難き刀ならずや。」「いかにもさあり、おのれ求めまく思ふなり。價はいかほどにや。」と急がはしくいへば、堂左衛門うち笑みて、「價は則ち金千兩なり。」といふにぞ、餘吾郎はあきれて詞もなかりしが、しばしありていひけるは、「おのれ見給ふごとく貧しき身なるに、殊更千兩といふ大金をいかでかとゝのふる事あたふべきや、其の價の半ばを減じ給はらば、古郷へまうし遣はして金をとゝのへ買ひとるべし。それも急にはなりがたければ、暫く日をのべ給はれかし。」といふ。堂左衛門いはく、「たとひ萬金にかへても此の刀なくては、和主古郷に歸ることなりがたからん。素より千兩の内一錢にても不足しては賣りがたし。もし金をとのふる事なりがたくは、其の價に當るべき物にかへて賣るべきなり。得と思案せられよ。」といふ。餘吾郎いはく、「かかる貧家にはいかで千兩にかふべき物あらんや。」堂左衛門いはく、「いなあり、而も活きたる寶なり。其の寶といふは別の物にはあらず、今は和主の妻となりし富士屋の吾妻なり。吾妻に離縁狀をそへて某に渡さば、卽座に此の刀を與ふべし。」といふ。餘吾郎は當惑して暫し答へもせざりければ、堂左衛門は彼の刀を袋に入れ、「我あながちにこれを賣らんと思ふにもあらず、和主が歸參の便りとなるべき刀なれば、情を以てかくはいふなり。得心なくばそれまでなり。暇申す。」といひて立出でんとす。さき程より庖厨の口に立ちて樣子を聞き居たる吾妻、忙はしく走り出でて堂左衛門を引止め、「ひさ〳〵にてまみえまゐらす嬉しさよ。今のたまひしこと彼處にて殘らず聞きはべりぬ、妾夫をすゝめて其の刀を買はすべければ、今一時まちてよ。」といふ。堂左衛門頭をふりて曰く、「餘吾郎が體を見るに得心せざる樣子なり、我しひて賣るべきにあらず、かくいひ出しては片時もまちがたし、他人に賣るにしかじ。」といひて又立上るを、吾妻はなほひきとゞめ、「何事も皆妾が胸にあるぞかし、是れを見給へ。」とて二枚の團扇を取りてさしいだせば、堂左衛門取り上げ見て、「此の團扇の繪は童もよく知りたるはんじ物なり。別に又意ありや。」吾妻いはく、「今一時待ち給はばおん身斧琴を菊べし、若し又夫得心せざる時は、鎌輪ぬといふ妾が心のはんじ物、合點ゆき候か。」と目くはししつゝ心ありげにいへば、堂左衛門其の意を悟れる樣子にて打點頭き、「然らば一時は猶豫すべし、我此の村末の酒店に待ち、黄昏の比を限りに來べければ、それまでに黑白を分ちおくべし。」と、詞をつがへて歸りけり。此の時傍の竹藪の裏より以前の奴僕顔を出し、此方の樣子を窺ひ居る。吾妻は餘吾郎が

側により、「おん身ものをもいはで何を思案し給ふぞや、とく〳〵離別の證書を書きて妾に暇たびね。」といふ。餘五郎いはく、「汝しかいふは、彼の刀を買はしめて、我を鎌倉に歸參さすべき心なるべけれど、いかほど彼の刀がほしきとて、一旦妻にせし汝を人手に渡して、我が武士道の立つべきや。殊さら同家中背元氏の娘なれば、我たとひ鎌倉に歸參するとも、澀右衛門殿に對しかう〳〵と何の顏ありて語らるべきや。さりとて刀を買ひ戻さざれば十字兵衛が家たたず、そのゆゑに我は唯前程より、胸を割かるゝ許りに苦しく思ふなり。」といふ。吾妻いはく、「いな〳〵刀は買ふとも買はぬとも、そはおん身の心に任せたまへ。妾はそれに管らず、實は堂左衛門主にそひたく思ふ故なり。」といふにぞ、餘吾郎は唯惘れて吾妻が顏をうちまもり居けるが、忽ち面色かはりまくり手していはく、「最前よりの樣子いぶかしく思ひつるに、さては汝が心は變りしよな。」吾妻いはく、「のたまふまでも候はず、いかにも心變りしなり。そのゆゑはよく察しても見給へかし、我が身五條坂にありし時は、綾錦を身にまとひ、口には美食に飽きたる身が、おん身にそひしより貧しきくらしをなし、去年の冬もとき衣の單にて寒夜を過し、馴れぬ手鍋の水仕業、春も越路に歸らざる、此のあかゞりをよく見給へ、辛苦にほそる我が姿、苦井にのぞむ水鏡も、昔の影はなきぞかし。彼につけ是をおもふに、かくたのみがひなきおん身を慕ひ、何不足なき堂左衛門ぬしを嫌ひしは、妾が一生の誤り、今後悔するゆゑに、いとまをとり彼の人に連添ひて、偕老の末までもたのしみをともにせんと思ふなり。とく〳〵離別の證書をかきてよ。」とて、硯と紙をつき出せば、餘吾郎は怒りの眦ひきあげつゝ、「汝これまでの實心に打つて變りし其の詞、五條坂にて誓ひし言も反古にする心にや。返答せよ。」といらだてば、吾妻は打笑ひッツ、遊女の詞に詐り多く薄情なるは常のならひなり、いつまでも實ありとおほし給ふは愚かなり。我を恨むは理ならず、おん身の愚かよりとあきらめて、去狀をとく書きてよ。」と、いと憎さげにいひければ、餘吾郎は大いに怒り、「聞けば聞くほど畜生にも劣りし女、今は見るも穢らはし。」とて、前程彼が取落して破りたる茶椀を取りあげ、「これ是れを見よ。もとは全き此の茶椀も、一旦破るれば繼ぐことあたはず、手向の水を覆せしも、夫婦離別の前表にて、覆水再び器にもどらず。暦手の此の茶椀の、破れし片しは三行半、是れが則ち去狀がはり、是れ持ちて何方へなりと出で去け。」と、吾妻が顏に投げつけたり。最前より始終の樣子を窺ひ居たる彼の僕、此の時舌を吐き微笑して、猶竹藪に隱れ入りぬ。折しも撞き出す晩の鐘、胸にこたふる黃昏時、約せし時刻と堂左衛門、戸なし駕籠を雇ひて來りければ、吾妻はいとうれしげに出でむかへ、「餘吾郎どのも得心にて、妾にいとまたびたれば、とくとく連れて。」といそがする。餘五郎は堂左衛門に打對ひ、「心の腐りし不貞の女、緣を斷つて遣はすなれば、約束のごとく刀を渡せ。」と氣をせけど、堂左衛門はおちつきて、「しからば離緣狀と此の刀を

左右に取りかふべし。」といふにぞ、餘吾郎はいそがはしく行燈に火を點し、去狀かきて渡しければ、堂左衞門も餘吾郎に刀を渡し、「これでさらりと埒あきぬ。やよ餘吾郎いふまでもなけれども、是れから吾妻に指さす事もならざるぞ。此方の女房いざ給へ。」といひて、吾妻が手をとれば、餘吾郎は拳を握り齒嚙みして、怒りの涙はら〳〵と、落すを吾妻は顧みて打笑ひ、「未練な男。」と嘲りつゝ、懷紙を投げつけて戸なし駕籠に乘りうつれば、堂左衞門は立寄りて駕籠の垂をはたと下し、「いそげ〳〵。」と下知をなし、駕籠を飛ばして走り去きぬ。餘吾郎はなほ怒りに堪へざりしが、「嗚呼よく〳〵思ひめぐらせば、不貞の女を追ひいだし、はからず此の刀の手に入りしは、却りて我が運強き處なるべし。」とひとりごちたる折しもあれ、竹藪の裏よりふたゝび又彼の僕をどり出で、「其の刀を。」といひさして手をかけたるを、早足を飛ばして蹴倒せば、起上りて一腰を拔き放し、頼額二ツと斬りつけたり。餘吾郎は彼の刀の鞘ながら丁とうけとめ、又斬りつくるを打ちはらふ、拍子に鞘は飛び散りて、拔躬の鋩先彼の僕が鼻の頭に閃めきければ、敵しがたくや思ひけん、早足を出して逃げ去きぬ。餘吾郎は持ちたる拔躬を一眼見て、こは〳〵いかにと驚きつゝ、燈火にさしつけてよく〳〵見れば、先刻見たる朝烏の刀にあらぬ僞物なれば、尻居に倒れて只惘然たるばかりなり。しばしありて吐息をなし、「さては我を誑かんと僞物を拵へ、眞の刀をすりかへて渡せしか、我今怒りに迫りてあらためざりしは不念なり。これをおもへば吾妻が心の變りしは一朝一夕の事にあらず、今まで眞心と思はせしも、我を惑はす計策ならん。先刻今の奴僕と密越に囁きしも、堂左衞門が內通を致せしに疑ひなし。しかる時はいまだ枕はかはさずとも、其の心は姦通なり。はじめは嫌ひし堂左衞門と心を合はせ、我を誑き僞の刀を與へたる人畜の淫婦、いで追ひ去きて堂左衞門もろともに四段となし、せめて此の憤りをはらすべし。」と、裙端折りてかけ出でしが、「いな〳〵我韋駄天の足ありとも、よほど時刻のびたる上に、行きたる方角もしれざれば、追ひ去くべきあてもなし。おもひまはせばまはすほど、彼が如き人畜の女としらず、遊女のならひの虛言を誠と思ひ、不實の締にかゝりしは皆是れ我が誤りなり。何面目に存ふべき、穢らはしき此の刀。」と、僞の刀を投げ捨てて、佛壇の下戸棚あけて取りいだす一腰を拔き放し、腹かき出してほと〳〵突きたてんとせしが、是れ乃ち十字兵衞が遺物の竹の刀なれば、我ながら狼狽へしと心つきて、これを見れば、

拙者此の度の切腹犬死に相成不申樣
御短氣御愼み遊ばされ可被下候

と書付けあれば、氣の張弓も弦きれてがつくりし、嗚呼十字兵衞が忠義の魂を籠めおきたる此の竹刀、死したる後の後までも、不言して自ら、我を諫むる此の書置、たとひいかほど忍びがたき事あ

りとも、我が命をまつたうせざれば、此の書置に對し顔なしとおもひなほして、竹刀をおし戴き、自殺を止まり、十字兵衛が位牌にむかひ合掌して、我が誤りを詫びにけり。かかる時しも二ッの蝶々窗より裏に飛び入りて、燈火をしたひ行燈のめぐりを飛びしが、二ッの蝶もろともに、油皿におち入りぬ。餘吾郎これを見ていはく、「爾雅翼を閲るに、菜の花蝶に化すといへり。蝶又菜種の油火をしたひて遂におのが身を焦すに至る。是れいはゆる、爾に出づる者は爾に反る理なり。是れを姦夫堂左衛門、淫婦吾妻に比する時は、爾我を誑く我又爾を誑くべし。めぐる因果の丸行燈、豈其の報いなからんや。彼我に僞の刀を與へたれば、我又僞りの狂人となりて彼等が行方をたづね、眞の刀を取りもどして、我が本意を遂ぐべし。」とひとりごちて、十字兵衛が位牌と竹刀を懐にかくし入れ、自ら髪をかきさばき、手向けし菜種の花を把り、うちかたけて狂ひ出づれば、眞晝の如き夕月夜に、里の童がこれを見つけて背後につき、「氣ちがひよ泡齋よ。」といひ囃す。餘吾郎は扇を開きて蝶の如くにひらめかし、「これ是れを見よ童等、蝶は菜種の花に狂ふ、吾妻は我を狂はする。踊人が見たくば北嵯峨へ去きて見よ。北嵯峨の踊は花笠をしやんと著て、踊る振がおもしろき。」と、現なきこと云ひて、菜畠を踏みちらしッ、狂ひ去きぬ。

## 十　白露や無分別なる性命の質物

爰に又洛外北岩倉に幻竹右衛門といふ武士の浪人ありけり。さだまれる活業はなしと雖も何不足なき住居の樣子、見越の松も世にすねた、丸木造りの門構へ、庭の植籠亭座敷、苔の賞美の手水鉢、水草のしげる池水も、清むか濁るかよそ目にはしれぬ主の心なり。比は卯月のをはりなるが、此の家に仕ふる兩箇の奴僕、石燈籠に火を燃し、手水鉢の水汲みかへなどして、一ッ所に集ひ寄り、一箇の僕いひけるは、「其方はいかにおもふぞ。世にめづらしきは此の池の四季咲の燕子花、毎月上十五日は其の花枯れ凋み、下十五日はあれあの如く花咲きて、勢ひよし。それにひきかへお旦那は、上十五日紫燕の花の凋む時は常の如く健やかにおはすなれど、下十五日紫燕の花咲く時は瘧の病をわづらひ給ひて、外出もならず病牀に籠り居給ふ。これも又稀有な病にあらずや。」と、いへば此方の奴僕が云く、「否それよりも猶めづらしきといふは、我等が傍輩彼の新參の露助が事、彼は近頃まで妻もろともに此の村末に住みしが、痴にてものいはねばはかぐしき活業もなく、貧しきくらしをして居たるが、何にかあらん急に金の入る事ありて、其の金なくては命にもかゝはる事と、夫婦が歎くをお旦那が聞きつけ給ひ、露助が首を五十兩の質物に取り給ひ、定めの月がきれらばたとひ首をきらうとも、お旦

那の心まかせになさるべき約束なるよし。其の極めの月も今月が限りにて、今日は則ち晦日なれば、月がきれたらいかにあらんと、女房がそれを苦にして、昨日お旦那へ日延べの願ひに來りしが、いかさま我々が置く質物とちがひ、いかにしても流すことのならざる質物、人の首を質に取るとは世にめづらしき事ならずや。」と口囀るはなべて奴僕の癖なるべし。かかる折しも障子の裏に嗽きの音たてつつ、主人の聲していひけるは、「あな叫聒しき奴僕ども、夜に入るまで何口たゝきてひまいるぞ。とくとく下家へ退け。」といふも彼方の障子ごし、かりそめに呵るにも烈しき言は主人の氣質。奴僕どもは打驚き、いらへの聲も口の裏、下家の方へ退きぬ。かくて時刻もやゝ移り亥の刻の土圭ひゞけば、亭座敷の明障子を左右に開き、此の家の主人竹右衛門、痩せ衰へたる姿にて、左結びの鉢巻も、病に惱む籠り居に、吳郡の綾の衾、夏の風すら厭ふにや、後を圍ふ金屏も、四邊耀く一間の裏、錦の小夜著をうち懸けて、病牀ながら机に向ひ、歌書くりかへす傍に、かしこまりたる奴僕の露助、頭に燃す蠟燭の、流るゝ熱さ窮屈さ、實に燭涙の泣顔を皺めてこらへ居たりけり。竹右衛門書を讀みさして露助が面を見やり、「いかに露助苦しきか堪へがたきか、少しにても身動きすると蠟燭が倒るゝぞ。」と、いへば露助恨めしげにて、物いひたさも痙の悲しさ、指を以て掌に、「たとひ晝夜睡らずとも、仕へ進らす心底なれど、拙者が頭を燭臺にし給ふは、あまりとや情なし。」と書きて、口に指さし仕方すれば、竹右衛門はこれを讀みて白眼みつけ、「情なしとは何證言、證書の文言を、汝早く忘れしか。」と、いひつゝ傍の手箱を探りて一通を取出し、「今更にあらためて讀み聞かすにはおよばねども、忘れしならば再び聞け。」とて、これを讀む。其の文左の如し。

質物證文之事

一拙者之活首一箇

右貴殿方へ質入仕り金五十兩借用申す所明白なり尤も五箇月を限り受戻し可申候若し定めの月きれ候はば拙者之首御取被成候とも違背申す間敷候仍而證書如件

北岩倉村
借人露助印
相文妻關兒印

永和元年十一月某日

幻竹右衛門殿　參

竹右衛門これを讀みをはりていはく、「此の通りの文言なれば、受戻さぬうちは汝が首は我が物なり。

殊に此の月が其のさだめの五月目、今日は乃ち晦日にて、今一時過ぎ子の刻に至ればはや明日の分なれば、質は流れる。燈臺にするはおろか、我が心まかせにたとひ首を斬るも違背はなるまじ。我が心に背かばゆるさじ。」と呵りつゝ、再び机に打向ひ、餘念なく書に見とれて居たる折しも、一陣の風颯とおろし來て、庭木の梢を颼々と吹きならし、池に盛りの紫燕の花、ゆら〳〵と動くとひとしく、花の裏より一道の陰火閃々と燃え出でて此方へ飛び來りしが、忽ち一羽の子規と化して机の上に羽振きし、二聲三聲ものかなしげに鳴きにけり。竹右衛門いそがはしく露助にむかひ、「たとひ何が出ようとも、かならず此方をふりむくな。見るな〳〵。」と、いふ間にすつくり背後の方に、綠の髪をふり亂し色青ざめたる女の幽靈、髣髴とあらはれ出で、竹右衛門を外背にかけてさも怨めしげなる顏色なり。さしも強氣の竹右衛門忽ちわな〳〵く瘧病、胸をおさへて苦しむ體、露助はあな怪しやと思ひつゝ、彼方を見んとふりむけば、竹右衛門いひけるは、「又此方をむくか、汝が首は我が物なれば、汝が自由に動かす事はなり難きぞ。むくな見るなと前程より、制すを汝は聞かぬか。」と呵られて、向くもむかれぬつくりつけ、猪首になりて坐し居たり。扨竹右衛門は幽靈に打向ひ、「悵望を滅して成佛せよとすゝむるに、まだ迷うて出でをるか、立去れ退け。」とよばはりッ、刀を抜きて斬拂へば、幽靈は消え失せて、時鳥は明障子に飛びつき、口より血を吐き出して障子の紙に、おとゝこひしといふ假字を書きつけたり。露助はしのびかね、我を忘れてふりむく拍子に、頭の蠟燭撲地おち、時鳥は又再び一團の隱火となりて飛び去りぬ。此の時土圭のひゞくを聞けば已に是れ子の刻なり。竹右衛門は落ちたる蠟燭のいまだ消えざるを取り、手燭に立てて机にする置き、露助が襟首つかみて膝もと近く引きよせて聲をあらゝげ、「やをれ惡き奴かな、五十兩の金なくては、一命に管るといふ危急を救ひ遣はしたる恩を忘れ、證書の文言にさへ違ひて、我が詞を背く横道者。」と詈りつゝ、病に屈せぬ強氣の主人、手速く用意の繩を把りて、露助を高手小手にくゝし上げ、緣より下へ蹋落しければ、露助は外背ひきあげ怒れる體、いはねど顏に見はれたり。竹右衛門はなほ白眼みつけ、「質物に繩をかくるは世間の習ひと知らざるや。今すでに子の刻の土圭ひゞけば、汝が首の質物ははや流れぬ。我曾て錺し見んと思ふ新躬の刀あり、幸ひ汝が首を打放して刀の斬味を試むべし。やよ奴僕等土壇をつけ。」とよばはれば、ハッと答へて奴僕等、土俵を持ち出でて、露助が前に積み重ね、緣さきに燭臺を立てならべて下家をさして入るあとは、晦日も月と耀けり。此の時外の方密やかに、しのび足にて旅乘物を舁き來り、門外にする置きて從者は殘らず歸りけり。是れ何人かしれ難し。扨竹右衛門は白鞘の刀を携へ、庭下駄はきてしづ〳〵と庭におり立ち、露助が側近く寄り、「此の刀を錺すには究竟なる汝が骨組、よし〳〵。」と打點頭き、手水鉢の水を柄杓に汲みとりて刀に灑げば、露助はわるびたるけしきも見せず、座をし

め直して覺悟の體、刀はいかなる斬物か知らねども、病みほうけたる手の裏で、我が骨きれるかおほつかなしと、口にいはねど目顔にて、それと悟らす嘲り笑ひ。惡さも惡しと竹右衞門、已に刀に手をかくる、ほと〳〵危き折しもあれ、「やよ暫しまちてよ。」と、云ひつゝ跳けこむ露助が妻の於關、藁苞を袖にかくし、夫をかこひて竹右衞門に打ちむかひ、「昨日も參りてきこえ上け、妾が身を賣りて金を給はんとのおん心にてありけるか。さあらばそれと始めより、など得心はさせ給はぬぞ。さりながら活首を質入の證書を出せしうへは、今更悟みてかへらぬこと。是非錺さねばならぬとならば、妾が身を斬り刻み、夫の命をたすけてよ、慈悲ぞ情ぞこれ申し。」と、掌を合はせてうちなげけど、竹右衞門は聞き入れず、「女はためしの用にたたぬ、妨げすな退いて居よ。」と、鞘にてこなたへ突き退けて、又露助に立ちむかへば、「いないかに宣ふとも夫は妾が殺させぬ。」と、右にとりつき左に縋り、踢ても踏みてもこりずまに、夫をかこふ袖屏風、立ちつ屈みつ青柳の、風にもまるゝみだれ髪、よその見る目も不便なり。露助はこれを見て、「かかる慈悲なき竹右衞門、いかにいふとも聞き入れまじ、益なき詞を費すな。」と、いふを目顔で悟らす癡、「とく〳〵斬れ。」とこれも目顔で覺悟の體。「こゝろえッ。」とて竹右衞門、又立ちかゝるを、於關はなほも隔つる拍子に竹右衞門が左の手頭を見て驚き、「ヤァ此の小指がきれてある。」といふを聞きて露助は、「何小指がきれてあるか。」と、我を忘れて物いへば、竹右衞門はこれを聞き、「扨は汝はいつはりの癡なりしか、我を誑く大膽者、觀念せよ。」と刀を拔き、首落さんと斬りつくる。露助はやく身をかはし、一聲さけびて力をきはめ、いましめの繩ふつと斷り、土俵を把りて受けとめけるが、刀はきれもの土俵を斜に切りおとし、土は地上に散亂す。時に不思議や許多の蛙聲ふりたてて鳴きにけり。竹右衞門はいそがはしく刀を納めてためらへば、露助は顧みて、「竹右衞門何故に猶豫する、とく〳〵斬れ。」とえり髮かきあげ身をすりよすれば、竹右衞門は刀を袖におしかくし、しばし頭をかたぶけて、

斬りたくもあり斬りたくもなし

といふ誹諧の句をつくりて吟ずれば、思ひもよらず表にする忽たる乘物の裏に聲ありて、

盜人を捕へて見れば我が子なり

と聲たかやかに吟ずれば、竹右衞門は眉を顰め、「俵といふ字を二つに斬れば、表に人といふ文字、今表に人ありて、我が句に附句の當意卽妙、何人にやゆかしさよ。」と、訝しみつゝいひければ、猶乘物に聲ありて、「不審はうべなりそれへ通りて對面すべし。」と、いひつゝ乘物の戸をさと開きて立出でしは、五十歳許りの老女にて、女なれども兩刀を帶びしは武家の行儀にや、摺箔の袷の衣に唐錦の帶い

や正しく、首桶を小脇に抱へてしづ〳〵と打通れば、竹右衞門は一眼見るより大いに驚き、「こは母人に候はずや、思ひかけざるおん入來、いかにして我が栖をしろしめし候や。」となほ訝り、席を拂ひて上座に通らすれば、老女は怒りの聲震はし、「我を母といはるゝすら穢らはしさよ。」と、他の事はいはぬさきよりはら〳〵と怒りの涙を落しけり。露助はせきにせきたる面色にて、妻於關に睃眼しすればこゝろえて、かくし持ちたる藁苞の裏より兩刀を取出し、一腰は夫に渡し、一腰はおのれ小脇にかいこみて、夫婦もろとも竹右衞門が右左に立ちならび、そり打ちかけて且づ露助いひけるは、「夫れ土は金鐵の精を育す、ゆゑに名劍土中に入れば、其の精天に徹るといへり。傳へ聞く蛙鳴丸といふ名劍、鐵精を育する土を斬るときは、迫りて蛙の聲を發するよし、汝今土俵を斬りし刀こそ、蛙鳴丸に疑ひなし。其の刀を所持する汝は、去んぬる年五月下旬、鎌倉月影ヶ谷の下館の後門にて、都といふ白拍子を手にかけ逃れ去りし曲者に疑ひなし。其の時我其の處に行きかゝり、前なる流れをせきとめたる土俵をとり、汝が刀を受けとめしに、今の如く土を斬り、忽ち蛙の聲を發す。扨は傳へ聞く蛙鳴丸なるべしと推量せしが、其の夜の樣子は汝が心に覺えあらん。」といへは、於關も其の尾につきていひけるは、「しかのみならず都が死骸をあらため見れば、口のうちに小指をふくむ、今汝が左の手頭を見るに小指なし。彼といひ是といひ、都を害せしは汝なること明白なり。」露助又いひけるは、「かくいふ我は都が爲に弟なり。前程の怪しみもまさしく姉の亡靈にて、時烏血を吐き明障子におとゝこひしと書きたるも、姉の怨魂冥途の烏となり、汝を打たしめんと我を此に導きたるに疑ひなし、蛙鳴丸を持する者こそ姉の敵なれとおもひ、其の時螢の光にてほのかに見たる汝が面體、もしやそれかとおもひしゆゑ、いつはりて痴となり、五十兩の金の入用ありといひて試みつるに、我が活首を質物にとらんといふもいぶかしければ、其の詞にしたがひて金を借りしは、此の家に入りこみてなほ實否をたゞせしうへ、汝が首を此方へ受取り姉の仇を報いん爲なり。素より入用なき金なれば封の儘此にあり、此の金を戻すうへは、露ばかりも恩はなし。」と、いつひゝ懷より金の包を取出して、竹右衞門が前におき、「日來尋ねし姉の敵かくの如く明白なれば、いざ立合ひて勝負を決せよ。」といひつゝ、刀の目釘をしめし、於關もろとも詰め寄せたり。時に彼の老女夫婦に向ひ、「やよしばし待ていふことあり。さては其方たちは都が所緣の者なるか、勝負を急ぐはうべなれど、此の方にも別に又詮議すべき事あれば、暫しの間ひかへて居よ。」ととゞめ置き、懷中より印籠を取出して、竹右衞門が目前に出し、汝此の品におぼえあらん。去年都が殺されし同日同夜、下館の軍用金千兩をうばひ取りし其の盜賊、一重の塀を切りやぶりて出でたる樣子、我其の處へ行きかゝり、拾ひ取りたる此の印籠、沃地に遠山の蒔繪したるは、かねて汝が所持の品。しかのみならず人をして聞かしめしに、汝千兩にて五條坂の遊君

を身受せしといふ噂、彼といひ是といひ、彼の金の盗賊は汝なる事明白なり。それを都に見咎められて手にかけたるに疑ひなし。我君より、『かの金の盗賊ならびに都を害せし者を詮議せよ。』と、夫莊司どのに命ぜられたる其の役めを妾に申しかへ、夫にかはりて鎌倉を旅立ち、汝が行方を探りもとめ、漸う此の栖に今日尋ね當りしも、人手にかけず此の母が、手づから汝が首を打ちて、父御の恥をすゝがばやと、それゆゑに此の首桶、現在うみの此の母が、此の役めをわざ〳〵望みて我が子の首を打つために、鎌倉よりはる〴〵と、尋ねて來つる心の裏、どのやうにあらうとおもふぞ。斬りたくもありて斬りたくもなしといふ、難句に附けたる我が一句、盗人を捕へて見れば我が子なりと、我が思ひより自然と出でたる十七文字。此の母は盗みせよとは產みつけぬぞ、渴しても盗泉の水を飲まず、熱すれども惡木の陰に息まずといふ教戒を、知らぬ汝にあらざれども、必ず天魔の見入りしならん。あな惡や、不忠不孝な奴。」と詈りつゝ、老いの手弱き腕にて、襟首とりて捻ぢ倒し、扇を把つて打擲しつつ、怒りの涙悔み泣き、身を悶えてぞ倒れける。露助は猶詰め寄せて、「姉都を殺せしはいかなる恨みありてかと解せざりしに、老母の今の物語を聞きて合點ゆきぬ。積み重ねたる罪科も、此方の恨みは姉の仇、いざ立ちむかへいざ〳〵。」と、夫婦もろ共はげしき言。老女はふたゝび聲かけて、「やよ待てしばし、汝が口より盗賊なりと白狀を聞きたるうへにて、其方等に仇打の勝負をばさすべきが、首は妾が受けとらねば、主人より賜はりたる此の首桶の納まりつかず此の方の役めがすまぬ、いざ兒子白狀せよ、いかに〳〵。」と詞の責具、竹右衛門は最前より唯手を拱き、頭を低れもの言はずして居たりしが、やう〳〵と顏をあげ、「母人さまお聞きあれ、夫婦の者も我がいふ事を心をしづめてよく聞け。」と座をあらため威儀を啟ひいひけるは、「我本心をあかさずして夫婦の者に打たればやと思ひしが、母人のおん疑ひをはらす爲、餘儀なく實を語るなり。若殿玉兎君、白拍子都が艶色に迷ひ給ひて、放佚無慙のおん行跡、親人を始め館中の老臣かはる〴〵詞を盡し理をきはめて諫言を奉れど、おん聞き入れなく、惡行益つのり給ひ、お家の滅亡あやふしと、諸臣みな薄氷を履む如くおもはるゝ由うけたまはり、我浪人の身を幸ひとし、西施を吳湖に沉め、楊貴妃を馬嵬に殺せし例にならひ、主君放埒の病根を絶つべしとおもひつき、罪なき者を手にかくるは情なく、殺すにしのびずといへども、お家の滅亡大勢の歎きにはかへられずと心を決し、去年の五月鎌倉にくだり、下館のめぐりを徘徊し、折から續く五月雨も、しばし晴間に棟の蔭、身をひそめて居たる所に、黑裝束のしのびの者、館の塀を切り破りて出でしゆゑ、曲者まてと呼びとめしに、小柄の小刀手裏劍に打ちつけて、跡をくらませ逃げ去りぬ。ほどなくかの都乘物にて出で來しゆゑ、從者を追ひ散らし、都に對してもの言はねど、心の裏におもひけるは、後日に汝が所緣をたづね、此の身を打たれて修羅の苦患を救ふべしと誓ひをな

して、止めの刀をつらぬきしが、彼苦痛に堪へざりしや、我が小指を食ひ切りぬ。時しも燕子花の盛りにて、都が血しほ流れにしたゝり、燕子花のゆかりの色を紅に染めかへしが、都が怨魂燕子花にとゞまりしにや、彼の花の裏より一團の陰花燃え出で、都が胸もとより一羽の時鳥とび出でて物かなしげに鳴き去りぬ。其の時行きちがひたる旅人は、我が推量にたがはず露助汝にてありけるか。我都を手にかけし後、此の庭の四季咲きの燕子花、毎月上十五日は花枯れ凋み、下十五日は花咲きて、我又上十五日は常の如くなれども、下十五日は瘧病を患ひ、夜な〳〵都が亡靈來りて我を惱ます故、寢食共にならずして、かくの如く痩せ衰へ、活きながら餓鬼道の苦しみをうくるなり　彼罪なくして刃にかゝり死したれば、うかまぬもうべと思ひ、一日もはやく彼が所縁の者に打たれて恨みをはらさせ成佛をさせばやと、所縁の者を尋ぬるうち、露助汝が面體都が面ざしに似たる故、もしや都が血すぢの者かと心を付けしに、金なくては命にかゝはる事ありとて、夫婦が歎くといふ事を聞きおよび、それに就いて實否を探り試みばやとおもひつき、活首を質入れせば、金をかしつかはさんと、わざと難題をいひかけしに、速かにしかすべしといひし故、さてこそ一物ありと知り、無分別なる置き所、露といふ字の露助が露の命の質物も、我は風雅のためしもの、わざと情なくあしらひて、燈臺となし辱めて、側近く使ひしも、怒りを起させ其の實を探らん爲なり。又新弱の刀と僞りて蛙鳴丸の奇特を見せしも、汝に我を疑はせ、汝が素性をしらん爲にせしことなり　今日時いたりて恨みをとゞめし燕子花の、所縁の色の汝等が素性を知るも、正に是れ都がみちびく所ならん。昔輕の大臣遣唐使に渡りしに、支那の人ものいはぬ藥を飲ましめて瘂となし、身を彩畫頭に燈臺を戴かしめて火を燃し、これを名づけて燈臺鬼といふ。其の子弼の宰相、支那に往きて父を尋ぬといへども、姿變りたれば面を竝べて知らざりけり。燈臺鬼涙を流しッ、、指頭を食ひ切り血を出して詩を書く、これによりて其の父なる事を知れりといふ。汝瘂となりて我をあざむく、我汝を燈臺となす。時鳥血を吐きおとゝ戀といふ文字を書きて、姉の靈なる事をしらしむ、都て是れ輕の大臣燈臺鬼の昔語によく似たり。汝さばかり身を苦しめて、姉の敵を打たんとおもふは下郎に似ざる悌心義心、感ずるにあまりあり。母御なう、くはしき謂れはかくの通り、其の夜母人にゆきあひしとは露しらず、我幼年の時より持ちておん見しりある此の印籠、其の所に落ちありしゆゑに、軍用金を奪ひしも拙者が業ならんと御疑ひは無理ならず、拙者が詞露許りも虛言ならぬ證據と申すは、此の小柄の小刀に候。」とてさし出しぬ。

## 十一　紫の蛛もありけり池邊の盜人

當時老母小柄の小刀をうけとり、つら〳〵見ていひけるは、「是れはこれ放駒の色繪の彫物、細工の

妙よのつねならず、其の盜賊が此の小刀を手裏劍に打ちしとな。さいふ事もあるまじきにはあらざれども、さほど忠義をおもふものが、千兩といふ大金を出し、五條坂の阿曾比吾妻とやらんを受出せしはいかなるゆゑぞ、奪はれし軍用金の千兩と、阿曾比を身請の千兩と、符合するに疑ひあり、汝浪人の身を以て千兩といふ大金をいかにして貯へしぞ、又汝十六年以前剃髮の望みの由書置を殘して出奔したる身をもちて、今に剃髮もせず、活業もなき浪人に似合はず、なみ〳〵ならぬ家宅の結構、衣服調度に美麗を盡す、これ以て訝しし、これにも返答ありや。」といへば、「其の御不審は實にうべなり。遊君吾妻を身受せしには謂れあり、元來拙者が初一念をついでに語りて聞かせはべらん。おのれ十六年以前出奔しつる意趣ど申すは、豫て母人のおん詞に、『我原嬖女の時汝を產みたれば、汝は總領なれども妾腹なり、餘吾郎は弟なれども本妻の產み給ひし子なり。我は本妻の遺言によりて後妻となる、其の恩甚だ深し。必ず餘吾郎を龜畧にする事なかれ。』とのたまひし事もあり。原父うへは養子にて、餘吾郎が實母は山唉の家の娘なれば、實に家の血すぢといふは餘吾郎なり。これによりておのれ父うへにまうし、家督は餘吾郎に讓り給ひ、拙者は別家させ給はれと願ひけれども、『總領をおき次男に家を續がすべき理やある、これ順義にあらず。』とのたまひてうけひき給はざりし故、やむことを得ず出奔せしは、餘吾郎に家督をとらせたきゆゑに候。しろしめす如く拙者幼年より歌學を好み候ゆゑ、家を出でて後なほ螢雪の功を積みて古今傳受を相續し、歌學を敎へて世を過す手著とし、貴人富家にも弟子多し、それゆゑよろづに不足なし。しかるに餘吾郎五條坂の吾妻といふ阿曾比に相馴れて、つひに行方しれずなりつる由、然る時は我が存念も水の泡、家を續ぐべき子なくては、出奔したる我までも、かへりて不孝になる道理なれば、且づ餘吾郎が行方を尋ねばやと、五條坂に到りて聞きしに、其の在所を知る者ありてをしへ候。吾妻は餘吾郎を慕ひてあるじの長の意に背き、雪責にせられて命も危しと聞きし故、若し吾妻餘吾郎が爲にあらぬ死をなしては、餘吾郎が罪を增す道理と存じ、おのれ怪しげなる姿に打扮ちて、富士屋の後園に忍び入り、身の代千兩を殘しおき、吾妻を奪ひ出し、餘吾郎が栖の門外に捨ておきて歸り、翌日又五條坂に到り、彼の長に對面し、吾妻が年季の證書を取戻しぬ。表向より彼を身受いたしては、餘吾郎が放埒なほ世に廣く聞え、歸參の妨げになるべしと、それを厭ひてしか計らひ候なり。其の身の代の千兩も、一富家に古今傳授を致しつかはしたる謝物の金なり。彼を身受の證書にも、拙者が本名をあらはして、餘吾郎が名をかくし候故、今五條坂の小歌にも、吾妻うけだす山唉餘字兵衞とうたふと聞く。唯此のうへは餘吾郎に一功を立てさせて、歸參をさせて、父上のおん心をやすむるが願ひにて候へば、母人さま此の儀を願ひ奉る。」と、心底を委しく物語りければ、母は感涙をおとしつゝ、「今は疑ひはれしぞや、義理ある子の餘吾郎に家を續がせたく

思ふは我も又かねての願ひ、いはずして母子ともに、心の合ひしも不思議なり。」と、心とけたる物語を聞きて驚く露助が、遙か下りて手をつかへ、「扨はあなたは餘吾郎さまのおん兄君にて候か。」といへば竹右衞門うち點頭き、「いかにもさなり。幻竹右衞門といふは後の變名、實の名は山咲餘字兵衞、これにおはすは我が實母淀瀨どのと申すなり。長物語に時刻うつりぬ、いざ夫婦もろとも我を打ちて都に手向けよ。とく〳〵打て。」と覺悟の體。露助は頭を低れ、「今のおん物語を承れば、姉都を手に懸け給ひしは、もと忠義ゆゑになされし事に候へば、恨むべき理なし。殊更主人に刃向ふ劍のあるべきや。」といへば、餘字兵衞いぶかしみ、「何といふ我をさして今更に主人といふは何故ぞ。汝かりに我が奴僕となりつれども、それは原仇を報いんための計畧なれば、我は主人に似て主人にあらず。」露助いはく、「其の御不審は理なり、拙者去秋姉の敵を尋ぬるため鎌倉に下り、おん父山咲莊司さまの僕となり、名を路平と申せしが、鎌倉にて其の敵しれざれば、おんいとまを乞ひ受け、うへ見ればおよばぬ事のおほかれば、雨といふ字の笠を著て、露助と名をあらため、此の村末にうつり住みぬ。去年十月それなる御母君の命せにより、餘吾郎君の御安否を聞くため、京都へ飛脚に參りしも、侍女衆の取次にて、拙者は新參といひ奴僕の身なれば、おん母君のおん顏を見奉りし事もなく、拙者が面は猶更におん見知りあるべからず。纔かの間に候へども、おん父君に仕へたる拙者なれば、餘字兵衞さまも則ち御主人、しらぬ事とて最前よりの無禮の儀を、ひとへに免し給はれ。」と、身を轉してぬかつけば、餘字兵衞は打驚き、「扨はしかありけるか。父に仕へし者ならば、我を打てともいひ難し。さりながら所緣の者に打たるべしと、都に誓ひし言を遂げねば、彼恨みをはらすまじ、いかにすべき。」と思案の體、於關は竦々すゝみ出で、「唯今の其の小柄、妾に一目見せてよ。」と、いひつゝこれを乞ひ取りてつら〳〵見さだめ、いと驚きたるおもゝちにて、「こは是れ放駒の色繪の彫物、裏に二見の二字を鐫る。是れは妾が目おぼえある物にて、兄鰊松が所持の小柄に疑ひなし。扨は彼の千兩の賊は妾が兄にて侍りしか。」といひて、虹のやうなる息をつき、面目なげにうつむけば、露助もうち驚き、「何といふ其の小柄は汝が兄の所持の物とや。とく其の跡を物がたれ。」といそがすれば、於關いはく、「今まで連添ふおん身にも妾が素性を語らざれば知りたまはじ。妾が父は伊勢國の樂人にて、二見太夫是次といひし者、母は於破矢と申せしが、母十五歲の時男子を產み幼名を鰊松といふ。其の後連きて女子二人を產む、其の一人は妾にて、今一人は則ち妾が妹幼名を小蝶といふ。二人ともに幼き時わかれ別れに他家へ去き、兄のみ家にありしが、兄は身持あしく、勘當をうけて、行方しれず其の後父は亡人の數に入り、母は妹の小蝶を連子にして、鎌倉小動の駕籠の塵兵衞といふ人に再緣したる由、七年以前其塵兵衞といふ人、旅人の忘れし金をあづかりおきたるに、其の夜盜人に其の金を奪はれて言說な

く、其の急難を救ふために、妹小蝶は手越の里に身を賣り、後に五條坂へ賣りかへられ候よし、彼の富士屋の吾妻といふは則ち妹の小蝶なり。去年おん身鎌倉に奉公の留主の間、朝夕の手著にこまり、歌占をなりはひとし五條坂にゆきて、はからず妹吾妻にあひ、委しき事を聞きはべりぬ。兄の行方は今にしれざれども、此の小柄は父の祕藏せし物にて、父存生の時兄に讓りしと聞けば、兄ならで持つべき物にあらず、故に彼の盜賊は兄に極まり候。」と語りければ、露助はこれを聞き、「今あらためて汝にいとまをつかはす、夫婦の緣はこれまでなり、其の故は賊人の妹を妻に持ちては、盜泉の水を共に飲み、白波の立田の山に共に入りて、同じかざしの名を汙すをはづればなり、必ず我を恨むな。」といへば、於關は涙を流し、「爾のたまふは無理ならず、惡人を兄に持ちしが我が身のあしき宿世なれば、いかでかおん身を恨むべき。」といひ終りて、一腰を拔き放ち、ほと〳〵自害と見えにけり。前程より門外に彷徨みて樣子を窺ふ一箇の武士、「やよ早まるな、暫しまて。」と聲かけて走り入り、於關が自害の手をとゞむ。於關はいぶかり此の人の顏をつら〳〵見て、「仄かに見覺えある顏なり。」といへば、うち點頭き、「さぞあらん今更名告るも面目なし」といひもはてず刀を拔きて、腹かき出し突立つれば、皆々、「こはそもいかにといひて驚きぬ。彼の武士はいと苦しげに息をつき、「餘宇兵衞どの御親子は更なり、露助にも對面するは今がはじめ。拙者は則ちこれなる女の兄、前の名は二見鰊松、今の名は酎尾賀堂左衞門と申す者、我富士屋の吾妻に執心深く、今餘吾郎が妻となりしを嫉くおもひ、朝烏の刀を買ひ取り、これを媒鳥となして吾妻をなづけ、餘吾郎を誑き、僞りの刀を與へて去狀を取り、吾妻を嫌し出して我が隱家に連れかへりしに、吾妻が我に靡きたる體をなせしは、刀を手に入れんための計にて、我に油斷をさせ、眞の朝烏と去狀を奪ひて逃げ出でし故、ます〳〵嫉く怒りにせまり、餘吾郎もろとも打捨てんと、彼所へ急ぐ道すがら、此の處を過りしに、こゝに吾妻が噂あれば、何事にやと彷徨みて委細を聞くうち、妹於關が自害の樣子を見るに忍びずとゞめしが、これにつきて我が身の懺悔おん聞きあれ、我志あしきゆゑに、父の勘當を受け、其の後漸々に零落して遂に野ぶせり乞食となり、鎌倉を徘徊せしが、小動の駕籠の塵兵衞といふ者、旅人の忘れし財布の金をあらため居たるを、垣のひまより窺ひ見て、其の夜塵兵衞が家にしのび入り、其の金を奪ひ出でんとせしが、十四歲ばかりなる娘の寢顏のうつくしさにしばらく見とれ、頻りに嬋媛の心を動かし殘り多く逃げ出でしが、彼の奪ひたる金七十兩にて衣服腰刀をとゝのへ、都にのぼりてしばらく彼の地を徘徊せしうち、偶五條坂に到り、阿曾比等のゆきかひを見物せしに、其のうちにかの塵兵衞が娘あり、前に比ぶればなほ十分の美色をませり。其の名を聞けば富士屋の吾妻といふ、彼阿曾比となれば我が望みをとぐるに安しと、喜ばしく思ひて富士屋に到り、吾妻を揚げてまみえんことを望み、度々かきくどくといへ

ども、彼我をいみ嫌ひて一夜の枕もゆるさざれば、ます〳〵心をなやまし、何にまれ金おほからでは
と悪念増長して、再び又鎌倉に下り、月影ヶ谷の軍用金千兩を奪ひ取りし盗賊、其の放駒の小柄のぬ
しは則ち是れ拙者なり。其の後我吾妻がために金銀を瓦石の如くすれども兎角靡かざれば、寧ろかれ
が身を贖ひ出すにしかじとおもひ、かの千金を用ゐんとおもひしに、雪の夜行方しれずなりぬ。今門
外にありて此の妹が物語るを聞けば、かの塵兵衛が娘は我が妹の小蝶にて、我かの金を奪ひし故に、
其の金のかはりに身を賣りて、吾妻といふ阿曾比となりし物語。夫れとは知らず我は又其の金を吾妻
が爲につかひ捨てしも、皆是れ悪の報いならん。しかのみならず塵兵衛を、現在母の後夫としらず、
母にも面を合はさざれば、彼所に居るとは露おもはず、妹小蝶は幼き時他へつかはしおきたるゆゑ、
素よりたがひに顔を見しらず。しらぬ事とはいひながら、同胞の妹を戀慕ひ、種々梟悪をなせし事、
豈天罰をまぬかるべき。かれ我をいみ嫌ひ、一夜の枕もゆるさざりしは、今おもへばせめて我が幸ひ
にて、畜生道におちいる事は脱れたり。めぐる因果は小車の不孝の罪の火の車、それに引きかへ二人
の妹は、孝もあり貞もあり、彼等にはぢて年來の悪念を、今一時に轉して、善に到りし此の自殺、
みづからそれと名告りて出で、懺悔に罪を滅して死ねば、せめて未來は助かりなん。」と、云ひ終りて
於關に對ひ、「これ妹今更めて兄弟の縁を斷りしぞ、これ露助、於關は我と兄弟ならねば、おなじかざ
しの名は汙さじ、もとの如くに連添ひくれよ。又別にいふ事あり、奪ひたるかの千兩の半ばは其の儘
船岡村の我が隱家に殘しあり、和主とりてかのおん館に返しくれよ。たのむ〳〵。」と云ひ殘して、刀
に手を懸けきり〻〻と引きまはせば、於關は苦痛を見るに堪へず、悲歎の涙にむせかへる。さすが
強氣の堂左衛門、刀を投げ捨てかの土壇に這ひ寄りて、みづから我が襟髪をかきあげつ〻、「いざ〳〵
餘宇兵衛どの軍用金の盗賊を成敗して、おん身のあかりを立て給へ。」といへば、餘宇兵衛目をしばた
たき、「都が爲に打たるべしとおもひし我は打たれがたき義理出で來り、圖らずして懐に入る窮鳥を
手にかくるも、私ならぬ世の掟はせんすべなし。南無阿彌陀佛。」と聲もろともに首打ちおとせば、
於關は軀にとりつきて、聲を放ちて泣きさけぶ、老母淀瀬も露助も、暗かに落涙したりけり。かくて
餘宇兵衛堂左衛門が首を取上げ露助に對ひ、「我此の首を受けをさめたれば、汝が首の質物は其の儘返
し遣はすなり。」とて、質物の證書を投げ與へ、「前程返せし此の五十兩の金は、堂左衛門がとむらひ料
につかはす。」とて、金の包を於關に與へ、さて堂左衛門が首に彼の小柄の小刀をさしつらぬき、首桶
に載せて母の前にさし出し、「いざ軍用金の盗賊の首おん受取り下さるべし。」といへば、老母はうち點
頭き、此の首を受けとれば、我がうけたまはる役目もすみ、彼の篠をつく五月雨に、汝が著たる濡衣
も、今ぬぎ捨ててあきらかなり。」とて喜べば、餘宇兵衛また露助に對ひ、「我曾て剃髪の望みありとい

へども、都が爲に打たるべき心ありし故にいまだこれを遂げず、今汝が刀にて我が髻をきり、せめて都が恨みをはらさん。母人さま家督の儀は餘吾郎に續がしめたまひ、拙者には剃髪をおん免し給はるやうに、父うへに願ひてよ。」といひつゝ、露助が刀にて髻をきりはらひ、「今より祖父の法名淨閑の一字をとりて、山咲窗閑と名を更め、神祇釋教戀無常を、狂言綺語にとりなして誹諧の連歌といふ一派をひらき、讃佛乘の因となして、都が菩提のためにすべし。」といひ終りて、片手に手燭片手には斬りたる髻を握りつゝ、庭下駄を踏みならして飛石づたひに池に臨み、手燭をあげて水鏡に面をうつし、「嗚呼病になやみて我ながら、見たがふばかりに衰へたり。

窗閑が姿を見ればかきつばた。」

と口すさみけるが、再び又一陣の風おろし來て、庭木の梢を吹きならし、池水皺して愁ふがごとく、忽ち燕紫の花搖動して、一道の炎火閃々と燃え上りければ、手燭を撲地取りおとし、又ふるひ出す瘧病に、身上わなゝき足輭ぎて、うち倭僜くを踏みとめつゝ、吐く息さへも苦しげにて、炎火に對ひ、

「のまんとすれど夏の澤水。」

と高らかに脇句を吟じ、「恨みをはらして成佛せよ、南無阿彌陀佛。」と唱へつゝ、手に持ちたる髻を池水に投げ入るれば、又燕子花ゆら〳〵と動きて花の裏より紫雲を生じ、靉靆として空にたなびき、一羽の時鳥飛び出でて、一聲鳴きつゝ光を放ちて西の空に飛び去りぬ。此の時窗閑が胸中忽ち朗かになりて病は頓に癒えたりけり。是れ都が怨靈窗閑が一句の妙に感伏し、恨みをはらして得脫し、成佛したるに疑ひなしと、露助於關愁への中に喜びを交へたり。鬼神の心をも感ぜしむるといへるはかかる類なるべし。窗閑又母にむかひ、「おん聞き及びも候べし、主君判官の御祕藏に、二振の劍あり、其の一振は小烏になずらへて、朝烏と名づけ給ふ、これ日中の踆烏にかたどりて陽の太刀なり。今一振は此の蛙鳴丸にて、これ月中の蟾蜍にかたどりて陰の太刀なり。おのれ少年の時主君より拜領の劍なれども、かく姿をかへて隱者となれば用ゐるべき所なし、これを餘吾郎に遣はされ下されかし。」といひて差出せば、母は益〻感歎す。かかる折しも門外に、「おん迎へ候。」とよばはりて、淀瀨が從者等提灯把りて來りければ、老母は首桶と蛙鳴丸を携へて立上り、「我は一旦旅宿に歸る、さらば〳〵。」と別れを告げ、しづ〳〵と歩み出でて、乘物にうつりければ、窗閑露助於關もともに門おくりす。此の時露助南方十字兵衛が忠死の事を語らざるは、これを語れば十字兵衛がこゝろざしを失ふ理あればなるべし。さらぬだに短夜なれば、はや曉に近かるべし、夜の明けぬ間と窗閑は、露助於關に下知をなし、空櫃を假の棺となして、堂左衛門が軀ををさめさせ、ねびれたる二人の僕をよび醒して擔はしむれば、露助夫婦は左右にそひ、鳥邊野さして出で去きぬ。窗閑は其の跡を見おくりつゝ、

袖白妙の卯の花の、雪の夜もしら〳〵と、あくる東雲の朝紫の杜若の花も悟りの心ひらけて、すはや今こそ草木國土〳〵、悉皆成佛の御法を得てこそ、失せにけれ。

と謠曲杜若の切を謠ひつゝ歎息して一間の裏に入りにけり。時に又池のあたり縹々と音しけるが、燕子花のしげりあひたる裏より、衣服は更なり、覆面頭巾、丸縫の帶、手覆、裏脚に至るまで、都て一樣の紫に打扮ちたる忍びの曲者あらはれ出でて、四邊をうかゞひ拔足しつゝ、亭座敷に上りゆきて、彼處にありし朱塗の手箱を奪ひ取り、身を轉して出でんとする。窗閑は奥の間より出で來り、これを見つけて呼び戻せば、曲者は刀を拔きて斬りつけたり。窗閑は身をひねりて、手ばやく刀を打落し、朱塗の箱をとり戻して、腕ねぢ上げつゝ唯一言、「紫の朱をうばふをにくむ。」といひて引据ゑける時、たちまち烏鳴きて夜はほの〴〵と明けわたりぬ。此の曲者の謂れ、ならびに彼の箱の裏なるはいかなる物といふ事、六の卷にしるして詳かなり。

雙蝶記卷之四　終



# 雙蝶記一名霧籬物語　卷之五

江戸　山東庵京傳編

## 十二　窗錢のうき世をはなす主人の合力

扨も南方十字兵衞が兒子南餘兵衞は、母眞弓一子窗太郎もろともに、前の年鎌倉を啞方拂ひになりて彼の鄕を立退き、身をよする陰だになければ、一所不住に伶俜ひけるが、母いひけるは、「夫十字兵衞どの不忠をなし給ふ上に、自己刃を以て非命に死し給ひぬれば、冥途の苦患もさぞかしとおもひやらるゝなり。故に今より思ひたち、西國順禮してせめて夫の罪障を消滅し、佛果を得給ふよすがにもと思ふなれど、我老いて足弱ければ、遠國の歩行かなはず、これをいかにせん。」と打歎きいふ。南餘兵衞は元來孝心深き者なれば、母の望みを遂げしめんとおもひ、「そはよきおぼし立ちに候、いかにもしておん供いたし候べし。」といひて頓にうけがひ、少しの貯へを出して親子三人著すべき禪衣小笠手覆裏脚のたぐひの旅の具をとゝのへて、あらかじめ其の支度をなし、二箇の賣をつくり、前に母後に

子を乘らしめ、總擔を以てこれを荷ひ、長き旅路に出で立ちけるが、少しの路銀も早くつかひ盡しければ、道すがら往來の旅人に一錢二錢の情を乞ひて、其の日〳〵を送りゆきぬ。されば南餘兵衛うたひもなれぬ順禮歌をうたふに、おのづから諸曲の節のまじれるも理なり。母はかれたる聲の齒をもりてうたへば、窗太郎は、「順禮に御法施。」と、舌も廻らぬかたことの聲いと哀れにて、辨へのなき幼子の父親に荷はれながら、柄杓打ちふる片手業に風車廻しつゝ遊ぶ體を、見る人毎に涙を落し、情をかけぬはなかりけり。かく物を乞ひッ、行く旅なれば道も捗らず、木の實をひろひて飢ゑをしのぎ、流れを掬して渴をたすけ、野原の露に袖を片敷き、木の下草にひれ臥して夜をあかすなど、悲しき事の數々は、いひつくされぬ旅なれども、御佛の擁護やありけん、恙なく日數をかさねて、三十二箇所の靈場をめぐり、第三十三番目、美濃の谷汲に到りて滿願し、それより又都の方へのぼりゆきぬ。俊成卿の歌に、「よろづ代に千代をかさねて八幡山君をまもらん名にこそありけれ。」と詠ぜられし八幡山は、京を去ること四里餘にして、卽ち山城國の南界なり。當時男山護國寺の本尊、白檀の藥師佛開帳あるによりて參詣の人羣集し、綿々絡繹として往來しばらくも絶えず、いと賑はひけるにぞ、是れに乘じて利を得んと思ふ者、此處彼處に假家をつくり、酒肴饅飩可漏子を商ふ家あり、砂糖饅頭齋饅頭餅菓子を賣る家あり、心太賣の店には水機關に巧みを盡し、花賣の軒には青柳の絲をなびかす、山崎の小櫃の繪も深草燒の彩色にけおされ、糰餅の螺の形も編笠燒に像を奪はる。賣卜は蓍を撰り、藥賣は長劒を撫す。宇多天皇に十一代の後胤伊東が嫡子とうたふ曲舞女あれば、蜑の燒く藻の夕煙と歌ふ琵琶法師あり。福廣聖の辻談義、妙高尼の針供養、鐘鑄の勸進、高足駄の行者、綾織、八から鉦のたぐひさへ、おのが樣々集まり立てり。幻戯、刀玉、緣竿のたぐひの奇妙の術を施すものは更なり、一寸法師の蟷螂舞、輕業の骨なし骨あり、伊勢國より活捕りてゐて來つる鬼女、親の因果の子に報いつる蟹滿寺の蛇女、猿の俳優、犬の脫籠、賴政が射て落しつる鵺、廣有が箭にかけつる怪鳥のたぐひは更に奇らしとせず、若狹の八百比丘尼が嘗め殘しつる人魚、朝比奈の三郎が捕へ來つる閻魔鳥など、見もおよばぬ鳥獸、聞きもつたへぬ跨人、あやしとあやしきものを見する假家、所せきまで立ちならびて、縹の幟野交の幕、片々として風にひるがへり、楊弓の音辻打の、太鼓にまじる嗔吶の笛かまびすくきこえて、諸人の耳目をおどろかしむ。かかるなかに薦簾掛け、假家つくりて、外の方に怪しき獸の形をゑがきたる招牌をかゝげ出したるあり。片膚ぬぎたる男戸口に立ち、扇をひらきて往來の人をさしまねきつゝ、聲たかやかによばひいへるは、「これ此の招牌を見たまへ、そもこれは雷獸といふものにて、雷につきてありく獸なり。これは安房國二山の雷狩に活捕り得たるなり、これ見給へ家土產によき話柄ぞ。招牌に露許りもいつはりあらば錢取り候まじ、見給ひて後おこしね。」と、聲

かるゝばかり詈れば、見物の諸人蟻のごとくに集ひ蜂のごとくに羣りて、假家の裏に入り、こちおしあちおしひしめきあひぬ。かくて日も西にかたぶきければ、參詣の諸人足をはやめておのがさまゞ〳〵家路を急ぎて歸り去きけるが、忽ち寂寞として跡に殘れる物は、早瓜の皮の蜘手の形したる、魚の骨の野ざらしめきたる、懷紙の屑、紙縒の塵、破れたる屬の類のみなり、前程より彼の假家の邊に物乞ひ居たる勸進聖、あたりに人なきを見て彼方をさしまねきければ、笠ふかく著たる煎物賣、荷を擔ひてこゝに來る。彼の勸進聖頭髮をかくせし頭巾をとれば、是れ乃ち箕腹蟻右衛門なり。煎物賣笠をとれば、是れ乃ち袴田紺九郎なり。さて蟻右衛門四邊を見まはし聲をひそめていへるは、「おのれ鎌倉より貯へ來つる路用の金を五條坂につかひ果し、おもひかけず俄に浪々の身となりつれば、他國へ立退くべき路銀なく、せんすべもなければかく姿を扮し、物乞をしていたづらに日を送るなり。」といふ。紺九郎いへるは、「おのれも左の如く貯へなきゆゑに、かく煎物賣となりてさまよふなり、かくては陰謀をくはだてつるかひもなし。かの蛇ヶ谷の老女今しか〳〵の所にかくれ住むよし、且つ路用の金を得る良計を施して彼所に去き、老女に從ひて宿望を遂ぐるにしかじ。」と、兩人語り居たる處に、蟻右衛門が奴僕沙土七いそがはしく來り、兩人にむかひていへるは、「去年五條坂にて再會の所はかやう〳〵とのたまひしゆゑ、彼所にありて數月待ち侘び候へども、音信だにしたまはざるゆゑ、やむ事を得ずふたゝびのぼりて、所々を徘徊し、おん兩所のおん行方をたづね侘び候。他のことはおきて且つはやく聞えあぐべきは、山咲莊司頃日上京して、おん兩處を捕へんとしのび〳〵にたづね候よし、御油斷あるべからず。」といふ。蟻右衛門これを聞きて打驚き、「然らば此の地にも長居はならず。」といひて當惑の體なり。紺九郎いはく、「莊司京都に逗留して居るとならば、我々兩人不意をおそひて打ちとるべし。」といふ。蟻右衛門頭をふりていはく、「いな〳〵彼は雙びなき劒術の達人なれば、容易に手を下すは危し、だまし打ちにするにしくべからず。」といふ。沙土七又いへるは、「山咲餘吾郎狂氣して此の邊を狂ひありき候よし、庄司を打つおぼしめしあらば彼をも打ち給へ、生けおき候ては狂人といへども後日の害げなるべし。」と、未だいひもをはらざるに、「氣ちがひよ泡齋よ」と、童等のいひ囃す聲聞えければ、沙土七彼所を顧みて、「彼は正しく餘吾郎に候はん。」といふ。蟻右衛門曰く、「然らば汝面を匿し、暗かに彼を打ち捨てよ。」といふを耳につきて耳語きければ、沙土七は打ちうなづく。蟻右衛門は紺九郎を伴ひ、つひに此の處を立去りぬ。沙土七は頰かぶりして面をかくし、裙端折りて帶に高くかいはさみ、刀の目釘をくひしめし、假家の陰に身をよせて待ち居たり。さて餘吾郎は堂左衛門が善心になりて腹きりしことは露しらず、彼が行方をたづぬるために僞狂人となり、髮振り亂し竹の枝を打ちかたげて、足もしどろに狂ひ來る。後につきたる童ども日々に言ひ詈りて打笑へば立留

まり、「童等何笑ふ、物狂ひがをかしいとや。うたてやな、春にそだつも花さそふ、菜種の因を蝶しらず、菜種は蝶の果をしらず、藻に住む蟲のわれからと、狂ふ袂に風の葉の、亂れて露のおきもせず、寐もせで結ぶ夢心。」と、現なき事いひて泣きつ笑ひつ伏しまろぶ。童どもも立去りて、折よしとや思ひけん、沙土七は物陰よりあらはれ出でて、唯一打と斬りつくれば、餘吾郎はむくと起きて身をかはし、「聞きやいな。うはの空なる風だにも、松に音するならひあり。」といひつゝ扇を閃かして、又きりつくるを拂ひのけ、「眞葛ヶ原の露の世に、身をうらみてやあけくれん。」と、いひつゝあしらふ扇の手練。こなたは汗もしとゝにて、祕術をつくせど手にあはず、頭をのぞめば身を沉め、裙を拂へば飛び上る、ひらめく劍は雲の電光。餘吾郎が身のはたらきは、波上の燕子に異ならず。狂ひめぐりかけめぐり、一ッ所をいく度も、ゆきては歸りかへりては、又行く雲の旗手より、折からおとす青嵐に、梢木の葉もはら〳〵〳〵、淀の川音さら〳〵〳〵、雲の端袖もひら〳〵と、かなたへなびきこなたへなびき、狂人走れば不狂人も、打ちもらさじと早足をいだし、あとをしたひて追ひ去きぬ。時は五月の半ばなれど、送梅雨も降らずよくつゞきて、天氣快晴なりしが、此の日は夕方より雨を催す雲起りければ、道行く人も家路を急ぎ、往來絶えたる八幡堤に、編笠深く著たる武士、一僕具して歩み來り、辻に立てたる石地藏の陰に立ちやすらひて僕を近づけ、何にかあらん耳語きければ、僕は手をおし揉みつゝ、「仰せの如く今朝ほど計らひ候」といふ。かの武士は、「よし〳〵」といひて打ちうなづき、又何やらん耳につきて耳語き、懐より金財布を取出し渡しけるに、僕はこれを受取りてうちうなづけば、かの武士はもと來し道へ歸りゆく。僕はあとに留まりて金財布を掌にのせ、おもみを試みて獨言にいへるは、「さて石瓦とちがひ金のおもみは別なる物ぞ。五十兩といふ金をしもべの我にあづけ給ふも、我が正直をしり給ふ故ならめ。人は日來が大事なり。」と、益なきことを呟く折しも、沙土七は餘五郎を見失ひ、こゝのくま彼處のくまに目をくばりつゝ、此處まで尋ね來しが、かのしもべが獨言をいふを聞きて暗かに喜び、稻村の陰に立ちかくれ、なほ樣子を窺ふ折しも、暮六ッの鐘喧々と耳に近く響きければ、かのしもべはこゝろづき、財布を懐におし入れて、足ばやに走り去かんとしたる處に、沙土七つと出でてゆくさきに立ちふさがり、物だにいはず彼のしもべか懐に手を差入れ、財布を摑みて引出せば、彼のしもべは沙土七が腕をとらへて財布をもぎ取り、「膽のふとき盜人め、我が命よりなほ大切な此の財布、汝にとられてすむべきか。妨げせば一打にすぞ、其處退きて通すまじきや。」と、一腰の柄に手をかけ、臂をおしはりて罵れば、沙土七は胡盧ひ、「毒蛇の見いれし其の財布、とく〳〵渡せ」とよばはりて、又財布を奪ひ取り、逃げ去く足にとりつきて引戻し、取返さんと捻ぢ合ひしが、沙土七が一身の貪慾手頭に凝り集まりしにか、打てど擲けど財布を放さず、互に雙袒おし

脱ぎて髻を掴み合ひ、或は倒れ或は起き、上に重なり下に敷かれ、汗もしとゝに息もつきあへず、力を盡して揉み合ひぬ。かくありける時男山の見せ物師等、錢箱木戸札太鼓噴吶のたぐひの見せ物の具を携へて歸り道、丸木を以て作りたる圈の裏に彼の雷獸をいれ、これをさし荷ひにして來りしが、はや黄昏のほの闇き裏に、組みつほぐれつ爭ふ此方の二人に撲地つき當りぬ。此方の二人は暗き裏に見せ物師等をたがひに相人と思ひ違へて、或は蹋倒し踏み倒しければ、見せ物師等は、「こは狼藉者よ醉狂人よ。」といひて瞝てまどひ、ぬけつ潛りつ身を避けんとす。彼の僕は忙はしきうちに、見せ物師等を盜人の加勢ならめとなほおもひたがへて、一腰を拔き放して打振りける。其の刀の光暗き裏にひらめきければ、見せ物師等はこれを見て膽を消し、雷獸の圈を其の儘地上に捨て置きてぞ逃け去きける。沙土七も刀を拔き、刃さきもしどろの探り打、空にひらめく電の、光をしるべに打込む刀、丁丁しとと打ち合ひしが、勝負つかねば刀を投げ捨て、猶財布を引きあひて、取りつとられつ爭ふ時しも、電光いそがはしくひらめきて、雷聲虺々と鳴りいだしけるが、彼の雷獸雷氣にもよほされて忽ち勢ひ猛くなり、繫ぎたる鐵の鎖をひき切りつ。さしも堅固につくりたる丸木の圈を、めり〳〵と押破りて躍り出で、總身の毛を逆立て鼻を吹きいからし牙を咬みならし、眼中より光を放ちて狂ひめぐりければ、二人の者は大きに驚き身を避けつゝ、なほ財布を爭ふはずみに、財布の紐雷獸の首にひき掛りければ、二人の者はこれをとらめと、怖るゝ追ひめぐりける時雷聲漸く近く鳴りて、空より一むらの黑雲まひ下り益暗くなりてあやめも分たざりしが、雷獸は此の雲に飛びのぼり、首に財布を引掛けたる儘にて、矢を射る如くに天上してけり。かの僕も沙土七も電の光に就きて空を見あげ、これを慕ひて追ひ行かんにも、翼なければせん術なく、唯惘然として立ち居たりしが、兩人一度に尻居に倒れて、大息つきてぞ居たりける。夫れ孝は百行の先めなり、孝天に至る時は風雨時に順ひ、五日に風吹き十日に雨降る、孝地に至る時は萬物化盛し、草木もよく花咲き實のり、五穀豐饒なり、孝人に至る時は其の家に衆の福ひ來りて、貧人も忽ち福者となる、古今の例すくなからず。されば孝行の德の尊きこと譬ふべき物なし。孝なる人は天の憐みを蒙りていみじき福ひをうけたもち、孝ならざる人は天の憎みをうけて、恐ろしき災ひにあふこと影と響の如し。原孝の字をつくるに老の字のかたへを省きて子の字を添へたり、是れ老いたる父母の傍に子ありてよくつかふるを孝とするの謂れなり。老いたる父母をもちたる人、此の字の形にならはずんばあるべからず。さる程に南餘兵衞は、西國順禮をなし終りて母の願望を遂げしめ、それより山城國にいたり、狐川を左にとり、河内へ越ゆる拔道の村末に、人の住みあらしたる古家を借り、母子三人しばらく此に月日を送りぬ。其の家のさまは二階づくりにて、奥の間もありながら、軒端かたぶき壁くづれ、骨あらはにうちよろぼひ、窗には

蘿葛はひまとひ、庭には葎生ひ茂り、板敷も朽ち簀子も破れ、牀の下より草生ひ出でなどしていぶせさはいはんかたなし。素より一錢の貯へもなくなすべき活業もなければ、童の翫び物にするいろいろの笛、牧童の横笛、盲法師の一節截、喇叭噴吶笙の笛のたぐひさへ手細工につくりてこれを賣りありき、鹿笛にかなしき秋をおもひ、鶯笛にわびしき春を迎へ、僅かなる價を取りて母を養ひ子を育つれば、夜の衣薄くして曉の霜冷まじく、朝氣の煙絶え〳〵にて常に飢ゑがちなり。素より孝心深きものなれば、父十字兵衛が非命に死せしを今に悲しみ、鳥邊野の葬所にしば〳〵詣でて是れを祭ること懇なり。母はいろ〳〵の辛苦のつもりける故にや、聾となりて大聲にいふことすら聞えず。餘兵衛はこれを歎き、ます〳〵孝順につかへて心をもちゐる事切なり。貧しきなかにも母には味よき食をすゝめ、己と子は麤食を食らふ。しかるもなほ足らざる時は、おのれは飢ゑをしのびて食せざる日もおほかるなり。されど母には食したるけしきを見せて其の心を安からしむ。用ゐるべき錢ある時は魚肉あるひは味よき餅菓子のたぐひを求めて母にすゝめ、其の喜びの色を見てたのしめり。子の窗太郎は未だ五歳にてわきまへなければ、共にこれを食はめといひて泣くを、餘兵衛呵りこらして食はしめず、母の十分に食するを喜びぬ。おのれは常に襤褸のみを著て臥し、母には衾をあつうして臥さしめ、なほ寒からん事をおもひて母の熟睡をうかゞひ、おのれが一重を脱ぎてこれをおほふ。



母睡りを醒して餘兵衛が臥したる方を見やり、彼が薄著をかなしみて、我に著せたる彼の襤褸を又餘兵衛におほひ、孫はおのれ抱き、衾をおほく孫に著せておのれは寒さをいとはず。餘兵衛目醒むればまた一重を母にゆづる、一夜のうちに親子一重の襤褸をゆづりあふこと度々なり。母の慈と子の孝とおほむねかくのごとし、これ等はすべて此の前の事ぞかし。かくて五月のなかばに至りけるが、餘兵衛益困窮して、米屋薪屋古手屋などに債おほくいでき、彼の輩それを嚴しくはたりければ、さまざまに詞をつくして云ひ延べ、母にしらせまじと心を遣ひぬ。餘兵衛熟おもひけるは、頃日母の容體を見るに、痩せかじけ日にまさりて衰へ給ふ樣子なり。我貧しき中にも母には折々魚肉をすゝめ、食の乏しからざる樣に心をつけまゐらするに、漸々に衰へたまふはいぶかしき事なり、試みずばあるべからずとおもひ、一日あざらけき魚をもとめて手づから丁寧に調じ、あらたに飯を煮てかの魚肉をそへ、母の前にそなへおき、「拙者は物賣に出で候へば、ゆるゝかにこれをめしあがり候へかし。」といふ事を、指をもて掌に書きて見せければ、母はいと喜べる樣にてうち點頭きぬ。餘兵衛は直に商ひに出づる體をなして立出で、家の傍なる竹林のうちにかくれ入りて、裏の樣子を覗ひ居たり。母はかくありとは露しらず、孫の窗太郎を側近くよせていふやう、「いつもの如く汝此の魚を食せよ、父の歸らざるうちにとく〳〵。」といひつゝ箸を把りて彼の魚の肉をむしり、「咽に骨をたつるな。」といひて食

はしめければ、窗太郎はいと嬉しけに舌打して食らふ。眞弓は其のけしきを見て胸ふさがりけるが、しばしありて涙の目をおさへ、「あな不便や、餘兵衞我に孝なる故に、いとほしき子の食を減じて我には食を飽かしむ、故に汝は飢ゑがちにて、僅かの魚肉を食はしむるも、餓鬼に百味の飲食を與へたらん樣に喜べり。我爭でか是れを獨り食するに忍ぶべきや、若し父が歸りてとはば、魚は此の祖母がのこらず食ひぬるといへ、必ず汝が食ひしといふべからず。」といひて皆窗太郎に食はしめ、己は一箸だに食はず。「荒屋は晝も豹啣のおほきうるささよ。」といひつゝ團扇を把りて窗太郎をあふぎやりぬ。餘兵衞は壁のくづれたる所より暗かに此の體を見て落涙し、扨は母人孫を深くいつくしみ給ひ、我がまゝらす食を我家にあらざる時は皆窗太郎に與へ給ひ、みづからは飢ゑをしのびて食し給はざる故に、日にまさりて痩せ衰へ給ふなるべしと思ひて、且驚き且歎きけるが、早く黄昏の比となり、雲の間より電光ひらめきて、遠く雷の聲響き、やがて雨降り來べく思はれければ、やをら竹林の裏を出で、外の方より歸り來つる體をなして裏に入り、母の前にぬかづきて、「今日しも錢おほく得て歸り候、これを見給へ。」といふを仕方にして見せつゝ、懷より錢の袋を把出して見せければ、母は喜び、「思ひしよりも歸りのはやかりしぞ。前程の魚いつよりもなほ美味にて、おほえず食を過せしなり　我今日は何かにまぎれていまだ看經をせず、我はこれをすべければ、汝はしばらく休息せよ。」と云ひて、念珠を袖くゝみにつまぐりつゝ、燈火を把りて奥の一間に入りにけり。餘兵衞は門首の戸を引きよせ、引窗の戸を立てなどして雨の降るべき用意をなし、方燈を取出して、火打の石火電光も壁の破れを漏る風に、硫黄の花を消されじと、心の闇の袖屏風、寒冷させじと子を思ふ、親の心をしらぬ子の、まろび寐したる窗太郎、食に飽きてやすやゝと、こゝろよげに睡りつゝ、餘兵衞は獨手を叉きて、心の裏におもひけるは、母人孫をいつくしみの切なるゆゑに、おん身の衰へを顧み給はず、かくて日を過し給はば、餓死したまはん事必定なり。高祿を給はりし昔の身ならば、いかほどにも孝養を盡すべきにくちをしさよ。母人の心ゆくほどに窗太郎を養はんにも、粮不足なればせんすべなし。唐土の孝子は親を養ふ其のために、子を埋めんとしたるもあり。我が運命盡きずもし天日の光を見ることありて、ふたゝび妻妾を娶らば子は又も得らるべし、母は再び得る事あたはざれば、寧ろ窗太郎を失ひて一口を減じ、且母の錐を去る絆をとくにしかじ。然れども子を捨つるは世の制禁なればすべからず、今夜ひそかに刺し殺し、母には他にあづけつかはせしともいひて當座をつくろふべしと心をさだめ、壁に掛けおきたる刀を把りて立ちむかひけるが、かくとはしらぬ窗太郎が寐顔の愛らしさに氣おくれし、餘りにいとほしくていづくに刀を立つべしとも覺えず、目もくれ心もきえはてて、前後不覺に泣き伏しぬ。折しも奥には母眞弓が看經の聲鉦の音も、細き火陰に燒き捨てし、蚊遣の煙も鳥部野の、

むなしき空を見る端かとおもひつゝむせかへりて、しばし歎きに沉みしが、さてしもあるべきことならねばとおもひなほして、すでに刀を拔かんとしたるに、いかにしてか拔けざりけり。心つきてよく見れば、此の刀を壁に掛けおきたる時、窗太郎が守を入れし巾著に、迷子の札をくゝり付けたるを打懸けおきしが、其の紐刀の鐔にまとひつき、留となりて拔けざるなり。餘兵衞これをつら〳〵見て、又氣をくじくときしもあれ、虺々と鳴神のひゞきも遙か遠里に、迷子をよぶ鉦太鼓、いとゞ哀れをそへにけり。「嗚呼人の親の心は闇もいとはずして、子をたづぬる者もあり、宿世のあしき因果にて、貧しき身にはなりさがれど、子には怪我だにさせまじと、これ此のごとく守巾著つけさせしが、親の手にかけ殺す子に、劒難除は何事ぞ、冥途に迷はす幼子に、迷子札も無益なり。幼くて死す者は罪科もあるまじと思へども、父母養育の大恩を、おくらで親に先立つゆゑ、不孝の罪の重しときく、定業すらさありといふ。況んや刃にかけられて、非業に死なば窗太郎、佐比の河原に迷ひ去き、砂を集めて塔を積み、嘸な呵責に苦しまん。我は一生貧しくとも、彼をばよく生立てて、老後の力亡き後は、親の棺を舁かさめと、思ひ思うて育てし子を、我が手にかけて身を屠り、何れ流れは順なる水をさかしまに、手向くべしとは思ひきや。親子は一世の緣と聞けば、もう來世でも逢はれぬ我が子、永劫顏の見をさめ。」と、寐顏をつら〳〵打ちまもり、恩愛深き悲しみに、身を刻まるゝ思ひして、落す涙は五月雨の筧にあまる如くなり。餘兵衞は元來丈夫にて、男魂失はざる者なれども、かく女々しき繰言いふは、子をおもふ心の切なる故と、更に哀れ深かりけり。奥の間には母眞弓、聾のかなしさは、こなたの物音歎きもしらず、看經の鉦打ちをさめ、心の裏におもひけるは、餘兵衞錢袋に小石を入れ折々我に見せて、我がこゝろをやすからしむ。とくよりこれを悟れども、さあらぬけしきにもてなすは、我又彼が心を安からしむべくおもへばなり。彼がありさまを見るに、貧苦にいたみ痩せ衰へて、年若けれども氣力なく、ほと〳〵命もあやふげなり。しかのみならず孫までも飢ゑがちなれば、よく育つべうも覺えがたし。此の母が身は年老いて、殘れる雪の日影待つ間の命なれば、何をしむべき、我一口を減じ、彼が絆を斷ちて辛苦を省き、生ひさきある子や孫の命に替り、冥途に到りて十字兵衞どのの死路をたづね、露ばかりも苦患をすくひまゐらすにしくべからずと覺悟をきはめ、かねて亡き後の經帷子にとをさめおきたる禪衣を取出し、剃刀ともに携へて、餘兵衞に知られじ曉られじと拔足するも聾の、おのが耳には聞えねど、外へはもる、簀子の上、折から降り來る大雨の音にまぎれて忍びつゝ、彼方の二階にのぼりゆきぬ。かかる時しも笠の下に覆面し、蓑打著たる一箇の武士、此の家に近く歩み來る、その跡より顆かぶりに面をかくしたる曲者、刀を拔きそばめて著き來り、こなたの武士をだまし打にせんとおもふさまなるが、電光れば身を隱し、暗くなれば又あらはれ出で

て打たんとねらひ、隱れつ出でつ度々すれども、かの武士はこれを知らざる樣子にて、いとあやふくぞ見えにける。餘兵衞は泣きしづみて居たりしが、母の看經の聲やみければ、見つけられては妨げと思ひつゝ、やがて心を取りなほし、畢竟母の身がはりに殺す子なれば歎くべき事にあらずとおもひきり、恩愛の絆となりし守巾著の紐をひききり、刀をすらりと拔き放して、ほと〳〵刺し殺さんとしたる時、蟲がしらすか窗太郎、「あなや。」と寤えて目を醒し、起上りて泣き出し、「婆々さまは何處におはす。婆々さまと寐々すべし、婆々さまなうー。」と叫びつゝ、奥の方へゆかんとするを、心つよくも引戻し、おもひをさせじとおもふにぞ、泣きさけぶ子を引きよせつゝ、手拭とりて目口をふさぎ、引窗の繩たぐりよせて腰に結ひつけ、放し打ちにとおもひしが、獠者にとらはれし、猿の子繫ぎし如くにて、目もあてられぬ姿なり。「あなかはいやそちが腰に結ひつけしは、菩提のために讀誦する經卷の紐とおもへ。南無阿彌陀佛。」ととなへつゝ、振上ぐる刀の下にまはる子の其の姿は、北音盲に異ならざれば、平日の遊びをおもひ出して、鬼わたしの鬼よりもなほおそろしき我が仕業と、思へば又も刀の手さきたゆみけり。彼方の二階の暗き裏には母眞弓、禪衣を身におほひ、口には念佛手には念珠、剃刀を把上げて、吭をきらんとおしあてたり。此方の餘兵衞もおもひきり、「南無阿彌陀佛。」といふ聲もろとも、又振上ぐる刀のひかり、あはやとひらめく電の、目を射るばかりに家内を照らし、忽ち一聲霹靂、絹裂くごとくに鳴り響きて、頭の上に落つるかと、思ふばかりにきびしければ、餘兵衞が刀の手の裏もおほえずくるひて、窗太郎が身にはあたらず、腰に結びし窗の引繩すつぱときり、ぐわらぐわら〳〵と開く戸の、裏に降り籠む雨とともに、小判の山吹散亂して、井手の嵐とうたがへり。彼方の二階に覺悟の母も、電鳴におどろきて、おほえず刃物を取落し、うつぶしにぞ伏したりける。此の雷一團の火炎となりて、彼の武士を打たんと狙ふ曲者の頭上に落ち、身體碎け死してけり。餘兵衞是れをば露しらず、小判の降りしをいぶかりてあふぎ見るに、引窗に這ひかゝりたる蔦葛に財布かゝりて、其の裏より亂れ落ちたる金なりけり。折しも人のおとなひして、「扨もきびしき雷よ。必定此の邊に落ちつらん、命びろひをせし事よ。和主の臍は恙なきか。」と呟きつゝ、門の戸をひきあけてつと提灯を差出せしは、米屋薪屋古手屋の輩なり。餘兵衞は拔躬を背後に匿して、いそがはしくいひけるは、「こは聞き分けなき人々よ、すでに昨日おん身等の許にゆき、此の月の晦日までといひ延べておきつるに、夜中の遠慮もなき事か。」と恨みいへば、此方は口を等しうして、「いな〳〵我が輩は貸をはたる爲には來ず、帳を消しに來つるなり。米薪古手の價のこらず受取りかくの如し。」と、いひつゝ、矢立の筆把りて帳を消し、受取の書付を差出せば、餘兵衞は益いぶかしみ、「此方より其の價を償ひたる覺えもなきに、受取りしとはいかなる故ぞ。」とたづぬれば、三人の者いひけるは、「扨はお

ん身はしらざるか、今朝奴僕とおほしき人我々が許に來り、『南餘兵衞が債はいかほどあるぞ。』と問はるゝ故、帳を出して見せつれば、殘らず拂うて歸られたり。何にまれよき仕送りを持ちたるおん身、日來見くだしたる我々も我を折りぬ。これよりのちは氣づかはずいか程も貸しまゐらせん。米薪は更にもいはず、古手なりと新しき衣なりと、澤山買ひて給はれかし。幸ひに雨もやみぬ、傘の供して罷りなん。」と、慾に囀る宿鳥、翼すぼめて歸りけり。餘兵衞は頭を傾けて、「かれといひこれといひ、かへすがゝも訝しさよ。」と、ひとりごちたる時しもあれ、外の方に聲ありて、「不審におもふは理なり、戔あけよ謂れを語りて聞かすべし。」と戸をあけさせて、彼の武士蓑笠ぬぎ捨て覆面をかなぐりて靜々と打通る。餘兵衞此の人を見るに、是れ則ち主人山咲莊司雪森なれば、こはそもいかにと驚きつつ刀を納めて禮をなし、席を拂ひて上座に迎ふれば、莊司はしづかに座をさだめ、「且つはやく兒子が繩を。」といひけるにぞ、餘兵衞はいと面目なけに窗太郎が腰に殘りし繩をとき、目口におほひし手拭を取りすつれば、莊司は又財布をとらせ、亂れし金を集めさせ、燈火を取りよせて數をあらため財布を見て眉を顰め、いと不審なる體なりしが、彼の僕の男沙土七を高手小手にくゝりあげて引立てつゝ走り來り、「お旦那これにおはしますか。先刻八幡堤にて拙者におん渡しありし金財布を、此の者が奪ひとらんといたせしゆゑ、奪はれじと爭ふ折しも、黃昏の暗まぎれに、見せ物師等にや候はん、雷獸を入れたる圈を荷ひて來り候が、刀の光にやおそれけん、彼の圈を捨て置きて逃げ去きたる其の後にて、彼の獸雷氣にもよほされて忽ち勢ひ猛くなり、圈を破りてをどり出で、狂ひめぐれる其のはずみに、金財布の紐雷獸の首に掛り、其の儘天上いたせしゆゑ、取戻さんにも翼はなし、せんすべなさにせめて拙者が分疏の證にと、此の者を拂へ顯かぶりをかなぐりてよく〳〵見候へば、豈はからんや此の者は是れ箕腹蟻右衞門が僕沙土七に候ゆゑ、繩打ちて引立てまゐり候。金財布を失ひしは拙者が過り、一言の分說も候はず。」といひてうち萎れ、あやまりいりたる體なりけり。莊司はこれを聞くと等しく、掌を撲的打ち、「其れにて我が不審はれぬ。夢平かならず愁ふるべからず、其の財布は此にあり。金の數も五十兩一枚も不足なし。」といへば、夢平はこれを見て、一旦天上致したる其の財布がいかにして此にあるやといぶかりぬ。莊司又夢平に向ひ、「其の沙土七には詮議おほし、彼所の松に繫ぎおき、汝守りて逃げざるやうに心をつけよ。」といひて遠ざけ、餘兵衞にむかひていひけるは、「汝が父十字兵衞は從來老實なる者にて、阿曾比などに心をうばはれ、不義の金をつかひ捨つべき者にあらざる故、去ぬる年自殺せし始末を疑はしくおもひ、我腹心の者を暗かに都にのぼせ、五條坂に遣はして樣子を聞かせしに、果して我が推量に違はず、兒子餘吾郎富士屋の吾妻といふ阿曾比の爲に、祠堂金石塔料を遣ひ捨てたる罪を、十字兵衞おのれが身に引受けて切腹し、我が君より賜はりたる朝烏の刀

をさへ賣代なして、石塔料にしたるよし明白に知れたるなり。これによりて我餘吾郎が行方を尋ね、手打にもすべく思ひぬれども、さある時は十字兵衛は犬死になる道理なれば、胸をさすりて捨ておきぬ。これすこしも兒子をかばふにあらず、唯十字兵衛が志を失ふにしのびざればなり。汝等母子をも速かに歸參させ、原のごとく家を立てつかはしたくおもひぬれども、是れ又さあるときは餘吾郎が罪を現はさざればなりがたく、あらはす時は十字兵衛が心にたがふ。これをいかんともすべからざれば我心にもあらで金を泥に捨て玉を淵に沉めおきぬ。しかるに此の度君命をかうぶり、箕腹蟻右衛門袴田紺九郎兩人を捕へんために上京せしこそ幸ひなれば、此の僕夢平にまうしつけて汝が住家をたづねさせしに、貧しげなる樣子と聞き、暗かに汝を救はんため、先刻八幡堤にて、夢平に此の財布の金五十兩を渡し、汝に與へよと申しつけしに、今聞けば雷獸のために此の金を失ひつるよし。落つる所もおほかるべきに、此の家のうへに落ちたるは、正しく是れ皇天汝が孝を憐み給ひて、あらたに此の金を授け給ひしに疑ひなし。孝人に至るときは衆福來るといへるはかかるたぐひなるべし。今朝米屋古手屋の者等に、汝が債を償はせしは、我夢平にまうしつけてさせつるなり。母を養はん爲に子を殺さんとおもひつめたる、汝が孝心感ずるにあまりあり、皇天の憐み給ふも理なり。此の金を以て心の儘に母を養ひ、汝が心を安くすべし。」といひて彼の五十兩を財布に納めて與へければ、餘兵衛は是れをおし戴ぎ、「扨は亡父は忠義のために死し候か。」といひて喜びつゝ、主人莊司の慈悲深き志を感歎して、落涙袖をしぼりけり。時に隔ての障子を開きて母眞弓ゐざり出で、莊司に向ひ恭しく禮をおこなひていひけるは、「ひさ〳〵にて健やかにおはす御容體を拜しよろこびにたへ侍らず。夫十字兵衛不忠をなして自殺致し候と、今までも恨み居り候に、今彼處にておん物語をうけたまはり候へば、しかにはあらぬ忠死のよし、さありてこそと喜ばしくおもひはんべり。われ〳〵をおん憐みふかく、債を償ひ給はるのみならず、許多の金を賜はる事、何をもてか此の大恩に報い候べき。」といひて頻りに涙を落しければ、餘兵衛は驚き、「母人は耳が聞え候か」といふにぞ、母も心つきて、「げにも〳〵。」といひてうち驚き、「今は何をか包むべき、我汝が貧窮を見るにしのびず、一口を減じて貧苦をすくはんとおもひ、二階にのぼりて自害せんとしたるに、今の雷鳴心の臟を貫くやうにおぼえしが、扨は雷の響きに病根を打破りて、我聾のなほりしか。」といひて、我が身ながら不思議におもへば、餘兵衛は聞きて益〻驚き、「そは危かりしことよ。拙者も又母人の爲に窗太郎を殺して一口を減じ候はんと存じ、すでに打たんと振上げたる刀の手の裏、雷鳴ゆゑに自然と狂ひ、打損じ候。」といへば、母又いへるは、「經帷子と思ひて著たる順禮の禪衣には、觀音の御影もあり、今の雷鳴我が自害をとゞめ、汝が刀を狂はせしも、雲雷鼓掣電、刀尋段々壞の經文に違はず、日來信ずる菩薩の擁護にうたがひなし。」

といひて、ひたすら歡喜してけり。窗太郎は辨へなく、眞弓が側に立寄りて、「祖母さまねぶたいねかしてよ。」と、膝に上りて抱きつけば、「やよ窗太郎、御主人さまのおん側なるぞ、お禮をせぬか不禮な奴。」と、口には呵れど心には、此の祖母ゆゑに父の手にかゝらんとせし危さよ、不便の孫やとおもひつゝ抱きしめて、とかく涙はとゞまらず。時にまた夢平いそがはしく來りていはく、「沙土七めはおほせの通り彼處の松に繋ぎおき候が、此處の竹林ぎはに雷死とおぼしき死骸あり。よく〳〵見候へば、ほのかに見知りたる者のやうにおぼえ候。」といふ莊司はこれを聞くとひとしくつと立上り、餘兵衞にともしびを把らしめて、外の方に出で來り、かの死骸を點檢するに、身體くだけ燒け爛れたりといへども、袴田紺九郎に疑ひなし。扨は我があとをつけ來り、だまし打ちにせんとしたるを、今の雷に打たれて死したるならん、惶るべし〳〵。」といひつゝ、舊の所に歸りて坐し、また餘兵衞母子に對ひていはく、「汝等兩人母は慈悲あり子は孝あり。今の迅雷母の自害をとゞめ、子の刀の手を狂はしめて、孫の命を救ひ給ふ、すべて是れ天の憐みをかうぶりし所なり。其れにかはりて紺九郎が、雷に打たれて死したるは、彼が不忠を天の罰し給ふ所に疑ひなし。彼といひこれといひ、天の賞罰正しきことかくの如し、善惡報應因果覿面の天理、彰々として毫釐もたがはざるを見よ。孝の天を感ぜしめたる例勝げて計ふべからず、惡人の雷死せし例も又鮮なからず。家貧しうして孝子顯はる、世亂れて忠臣を識るといふ、王良が言宜なるかな、汝我が祿を受けたる昔の身ならば、其の孝も顯はれまじ。」といひて感嘆轉やまざりしが、又いはく、「我汝をはやく歸參させたく思へども、一旦追ひ拂ひたる者なれば、私のはからひにてなしがたし。是れ我が苦しき所なり、何とぞ一ッの功を立てよ、其の功といふはかくのごとく筒樣なり。」と、餘兵衞が耳につきて何事か聟きければ、餘兵衞は點頭きつゝ、「畏みうけたまはり候。」と答へけり。かくて莊司は別れを告げて門外に立ちいでける時、雨過ぎ雲散りて一輪の明月皎々とかゞやき、恰も白日の如くなり、此の折しも餘吾郎吾妻と共に、此の家をたづね來り、餘吾郎且づ父莊司にむかひ禮をおこなひて曰く、「我不忠不孝にして、尊顏を拜すさへ面目なし。分說は切腹より外なしと存ぜしかど、十字兵衞が賣代なせし朝烏の刀を買ひもどし、これなる餘兵衞に返し與へて、彼が家を立つる便にもとおもふばかりに今までながらへ候なり。しかるに此の吾妻、鮒尾賀堂左衞門といふ者を欺き、かの刀を取りもどし候てこゝにあり。われ吾妻が心をしらず、僞狂人となりて堂左衞門が行方をたづねさせ候に、先刻はからず途中にて吾妻に行きあひ、彼が本心を聞き、かつ露助にもあひ、堂左衞門が善心になりて切腹したる事、および兄餘字兵衞どの拙者を憐みたまふ事を委しく聞き候へば、いよ〳〵罪おもき者は拙者なり。露助と申すは卽ち僕路平がことに候、いざいざ餘兵衞これを受取れ。」といひて、朝烏の刀に十字兵衞が位牌をそへて渡しければ、餘兵衞はこれを

おし戴きてをさめけり。餘吾郎又父に向ひ、「十字兵衛が遺しおき候此の竹の刀にて唯今切腹つかまつるが、せめて拙者が分説に候なり。いざ餘兵衛介錯頼む。」といひもはてず、竹刀を抜き放して腹に突立てんとしたりければ、餘兵衛は慌ておし止む。吾妻も其の手にとりつきて涙を落し、「いひ分なきはおん身ばかりか、十字兵衛どのを失ひし其の原を尋ぬれば、妾が身より事おこれば、餘兵衛どの親子の衆に合はすべき顔なし。殊更さきほど途中にて露助が語るを聞けば、堂左衛門は妾が同胞の兄なるよし。彼といひ是とまうし、妾こそ死なねばならず、皆さまいとまたび候へ。」といひつゝ竹刀を捶ぎ取りて、おのれが吭につきたてんとするを、餘吾郎またおし止め、「いな〳〵我から先へ死なねばならず。」といひて、互にとめつとめられつ死をあらそひしが、莊司は態と聲あらゝかに二人を呵り、彼の竹刀をとりあげて、餘吾郎が目さきにさしつけ、「これ、是れを見よ、

拙者此の度の切腹犬死に相成不申様
御短氣御慎み遊ばされ可被下候

かくの如くしるしたるは、十字兵衛汝が性質をよく知りて、死したる後まで諫言を加へんと、忠義の魂を籠め殘したる書置にあらざるや。」といひさして、暗かに落涙したりけるが、又いひけるは、「憎しと思ふ汝なれども、是れまで其の儘さしおきしは、十字兵衛がか許り切なる志を失ふまじとおもへばなり。しかるに汝今自殺する時は、此の書置の如く十字兵衛は犬死なり。しかのみならず昨夜淀瀨我が旅宿をたづね來りて物語るを聞けば、兄餘宇兵衛汝を家督にしたき願ひにて、すでに剃髪したる由。さあるときは猶更に汝死しては餘宇兵衛が志を悖くのみならず、家相續を斷つ理なり。若し又強ひて死なんとならば、七生までの勘當なるぞ。吾妻事は同家中背元澀右衛門の養女にて、原孝のために身を賣りたる由なれば、餘吾郎とは格別なり。汝も今死しては始めの孝を失ひて、かへりて養父に不孝となる。これをよく〳〵わきまへよ、餘吾郎汝今死なんとおもふ一命をたもち、こゝろざしをあらためて一功を立てよ。其の功を立つる仔細は其に餘兵衛にいひふくめおきつれば、彼と心を合はせて互に功を立てよ、しかる時は十字兵衛も冥途におきてよろこぶべし、一功立ちたる其の時は歸參をさせ、あらためて吾妻を妻女に致すべし。いかに〳〵。」といひければ、眞弓餘兵衛等も傍よりしうつぶきて詞なし。莊司又餘兵衛に向ひ、「十字兵衛一旦餘吾郎が爲に賣代なしたる其の朝烏の刀、再び汝が手にもどりしも、反哺の孝ある汝が德の、天に通ぜしゆゑなるべし、かへす〴〵も譽なり。汝笛をつくることをよくするよし、號笛といふは俗にいふ叫子の笛なり。これ軍器の一ッなれども、尋常の叫子の笛は深山幽谷の濕地に於て、これを吹けばよく音を出さず、汝が工夫を以て濕地といへ、

どもよく音を出す叫子の笛を作るべし。後日かならず用ゐる時あらん。」といふ。かかる時しも傍邊の竹林をおし分けて、箕腹蟻右衛門もあらはれ出で、ものをもいはず刀を抜きて莊司を目がけ唯一打と斬りつけたり。莊司は速く身をひねり、早足を飛ばして地上に蹋仆し、のけさまに倒れたるを足下にふみつけ、「やをれだまし打とは卑怯至極、君命をかうぶり、汝と紺九郎が行方をたづぬるため上京せしに、兩人ともみづから來りて身を失ふ、皆是れ天罰のしからしむるところなり。汝紺九郎と心を合はせ、月影ヶ谷梅ヶ谷の兩家を亡ぼさんと隱謀を企てたる事、密書によりて分明なり。殊更汝餘吾郎をすゝめて遊里にいざなひしより事起りて、十字兵衛自殺したれば、十字兵衛が爲にも讎敵なり、彼が魂を籠め殘したる此の竹刀は竹槍同然、主君を弑し奉らんと事を企みし大罪人を戮するには幸ひの刑具なり。不忠の報いを思ひしれ」と叫はりつゝ、力を極めて竹刀を吭につらぬきければ、蟻右衛門は一聲さけび手足をもがき苦しむ體、側に見る目もこゝろよくこそ思はれけれ。かくて莊司竹刀を引抜きければ、蟻右衛門は息絶えたり。餘兵衛はこゝろえ手拭をとりて刀の血を清むれば、莊司は刀を鞘にをさめ、「やよ餘吾郎、此の竹刀は汝が一生の守となして、短慮功をなさずといふ常言を忘るゝな。」といひて與へければ、餘吾郎はおし戴きてぞ帶びたりける。莊司又いひけるは、「時刻うつれば我は旅宿に歸るべし。餘兵衛は此の蟻右衛門と紺九郎が首を打ち、後より旅宿に持參せよ。沙土七は彼等兩人が隱惡の證人なれば、生捕の儘鎌倉に牽て歸らん。夢平は其の繩つきを引立てて我が供せよ。」と命じッ、立出づれば、餘吾郎吾妻眞弓餘兵衛もろともに門送りして、莊司が背後を伏し拜み、感激の涙に袖をぞしぼりける。

かくて莊司は蟻右衛門紺九郎が首級を携へ、妻淀瀨は堂左衛門が首級を携へ、夢平に沙土七を率かせて鎌倉にかへり、主君判官の面前に出でて、莊司まづかの兩人の首級を實檢にそなふ。淀瀨は堂左衛門が首級を出して軍用金の賊なることを告げ、かつ餘字兵衛が都を殺せし謂れをくはしく聞えあぐれば、判官は其の志を感賞あり、紺九郎を打ちとりたる事を梅ヶ谷につたへ、沙土七を誅戮す。これ等の事をくはしくいはんはくだ〳〵しければ、たゞおほむねをしるすのみ、莊司が餘五郎南餘兵衛等二人の者に功を立てよといへるは何等の功にや、後々の卷を讀み得てしらん。

## 十三　きられたる夢はまことか茂林の闇打

それは扨おき爰に又、一段の事の端を惹き出せり。是れいかなる事ぞなれば、月影ヶ谷判官の息女今年十五歳に至り給ふが、頃日病の牀に臥し給ひ、一切ものもめさざりければ、祿をたまはる醫師は更なり、世にすぐれたる良醫をめして治術を盡させ給ふといへども、露ばかりも驗なく漸勞れ給ひ、

面痩せ身ほそりて日に異におもくなりまさり給ふにぞ、父母の君は更なり、傅きの人々も愁へ悲しむことかぎりなく、「病み給ふおん容體、うたがふらくは物怪の所爲にはあらずや、もし然らばいかなる良藥も驗あるべからず、此の上は兎角神佛の冥助をねがふにしくべからず。」とて、有驗の高僧に悃祈を盡させ、諸社に幣帛を奉りて丹精をこらし給ひ、母君は侍女等をかはるゞ〳〵鶴ヶ岡の御社に日參させ給ひけるが、一日一個の侍女かの御社に參詣し、祈念をはりて下向の折ふし、庭きよめの宮奴等瑞籬の下に集ひて物語するを聞けば、「巨福路坂に太麻の現女といふあり、寄弦口寄の上手にて、佛敎にも通達し、難病奇疾物怪の祟りなど、其のもとをあきらむる事鏡に物の影をうつすが如く、實に活ける神佛ともいひつべし。」と噂するを、彼の侍女聞きつけて、これは此の社のおほん神辻占に託して告げ給ふならめと喜びつゝ、道を急ぎて館に歸り、おん母君に斯樣々々と聞えければ、母君もいと喜び給ひて判官に告げきこえ、「其の現女とく呼び迎へよ。」とおほせて巨福路坂へ使を立て給ひけるに、太麻の現女召しに應じてやがて館に參りければ、姫の病架に近く呼び入れ給ひ、判官夫婦對面ありて後、寄弦を乞ひ給ふにぞ、現女つゝしみて且づ神保を唱へ、梓の弓を打鳴らして冥道をおどろかし、目を閉ぢて無心になりけるに、あな思ひよらずや、去んぬる延文四年信濃國苦形にて亡びたる、相模次郎時行の怨靈梓の弓にひかれ出でて現女につき、判官に對していひけるは、「我南帝の敕免をかうぶりて鬱懷の旗を飄し、北朝を傾けて累年の憤積をはらさばやと、思ひ立ちぬるかひもなく、運命つたなくして汝がために亡ぼされ、股肱耳目と賴みつる、大佛九郎貞直さへ知具麻川に入水して、底の水屑と成り果てぬれば、生き殘りたる味方の者も、忽ち心變りして皆足利に降參し、今は我が輩の亡き跡をとふ者だになければ、無緣の鬼となり修羅の眷屬となりて嗔恚を含む心止む時なく、永劫惡趣をまぬかるゝ事能はざれば、其の恨みを散ぜんため、當家に祟りをなし、先づ汝が娘を取殺して無間地獄にいざなひ去き、共に呵責をうけしめ、おひ〳〵汝等をも取殺して、遂に當家を絶やすべくおもふなり。とくよりしか思ひぬれども、苦形落城の刻、汝が手に入りたる日月のおん旗當家にひめありしゆゑ、是れにおそれて近づく事あたはず、むなしく年月を過せしが、近比かのおん旗を鶴ヶ岡の神庫にをさめし故に、時を得て祟りをなすことを得たり。見よ〳〵娘は更なり汝等夫婦嫡子玉兎之助を始め一族郎等にいたるまで、皆取殺し、無間地獄に墮して怨みをはらさんずるぞ。」といふ。其の姿は見えずといへども、怒れる聲は其の人に向ひて聞くが如くにて、おそろしなどもいふべからず。母君を始め此の座にありし人々これを聞きて大いに驚きけるが、判官は半ばは信じ半ばはうたがひつつ、現女に向ひ怨靈の仔細をいひて詰り問ひ給へば、現女はこれを聞き、「妾先づ試むべき事あり。」とて洗米をとりよせ、梓の弓を載する小櫃めきたるものの上に蒔き散ちして、みづから姫の枕上に持ち

行き、「此の洗米を手づから拾ひ取りてめし給へ。」といふ。姫は侍女等に扶け起されてかの器に向ひ、洗米をつまみ取りてくはんとし給ひけるに、あな怪し彼の米粒忽ち蛭に化して蠢きければ、姫はこれを見てうち戰き、「あなや。」と叫びて伏したまへば、母君を始めかしづきの侍女等も、身の毛そばたちておそれあひぬ。さて姫を介抱して藥などまゐらせけるに、漸蘇生ることを得たまへり。時に覡女いひけるは、「怨靈姫を無間地獄にいざなはんといへる言たがふべからず。其の故は無間地獄に墮つる者は、此の世にある中より食物蛭に化して食する事能はずといへり、今現に此のしるしあり疑ふべからず、つや〳〵物をめさざるも理なり。」といふ。判官は眼前にかかる奇怪を見給ひて疑ひを決し、「此の怨靈を靜めんにはいかにしてよからめ。」と重ねて問ひ給へば、覡女いはく、「怨靈日月のおん旗を怖るとなれば、これをしばらく借り受け給ひて、姫の病架に立て置き、僧衆を請じて大般若經を讀ましめ給はば、惡靈得脫して退き、姫かならず快驗あるべし。其の故は帝釋と修羅と須彌の中央にて合戰を致す時、帝釋軍に勝てば修羅小身を現はして蓮絲の孔の裏に隱れ、修羅又勝つ時は須彌の頂に坐して、手に日月を握り足に大海を蹈むといへり。時行の靈修羅の眷屬になりしとなれば、日月のおん旗を怖るゝは王威を怖るゝのみならず、此の理にもよるべきなり。爾のみならず修羅三十三天の上に責め上りて、帝釋の居所を追ひ落し、慾界の衆生を悉く我が有になさんとする時、諸天善神善法堂に集まり給ひて般若經を講じ給ふ。此の時虛空より輪寶下りて劒戟を雨らし、修羅の軍をすゞに割き切るといへり。されば時行の靈をしづめ給はんには、般若眞讀の功力にしくべからず。」といへば、判官はこれを感聞し給ひ、傍の人に仰せて謝物をとらせ給へば、覡女は恭しくこれを受納めて暇を乞ひ、私宅にぞ歸りける。かくて判官は俄に觜元邏右衞門を召し呼び給ひ、「先達て鶴ヶ岡に奉納せし日月の旗を暫く借り受け來るべし。」と仰せければ、邏右衞門はこれをうけたまはり、急ぎ鶴ヶ岡に參詣し、先づ幣帛を進め、神樂を奏して神慮を慰し、神司に告げて彼の御旗を借り受け、みづから是れを携へて歸路に臨む時、早く夜闌にぞ至りける。此の夜は雨雲月をかくしていと暗かりけるが、邏右衞門は許多の供人に前後をまもらして極樂寺の切通を過ぎける時、茂林の裏より黑き裝束したる曲者兩人あらはれ出で、前後の提灯を斬りおとし、刀を電光の如くに閃かすれば、供人等は臆してたゞちに逃げ去くもあり、刀を拔きて戰ふもありしが、防ぎかねて皆散り〳〵に逃げ去りぬ。邏右衞門は懷の御旗を大事と守護すれば戰ひを好まずといへども、彼の曲者等順風の落葉急水の游魚の如くに走りかゝりて、鎹を揃へつゝ斬りつくれば、止む事を得ず拔き合はせて打ち合ひぬ。其の刃音は梢をならす松風に響きあひて、いとものすごき林木原、あたりに近き禪院の、鉦鼓の音のひまひまに、鳴きまじる宿鳥の聲も、更けわたる夜の暗がりに、刃さきもしどろの探り打ち、刀の光息づか

ひを心あてに戰へば、或は石の地藏に斬りつけて火花を散らし、或は同士打をして血煙を立て、しばらく時をぞうつしける。澀右衞門は曾て劍法に達しければ、ねらひよりてはしとと打ち、身をかはしては丁と斬り、二人の曲者にあまた手をおはせけるにぞ、曲者等は敵しがたくや思ひけん、早足を出して逃げ去きぬ。此の時やう〳〵雲散れ月あらはれてあきらかなり。澀右衞門は彼等を打ちもらしたるをくちをしく思ひつゝ、一息つきたる折しもあれ、茂林の裏に弦音高く颯とひゞき、一すぢの箭飛び來りて、澀右衞門が胸さかを篦深に射たれば、さしも強氣の澀右衞門もたまりかね、ひところ呀と叫びて後へに噇と打倒れ、箭疵の鮮血懐に流れ入りて御旗を汙しければ、御旗は忽ち懐を放れ出で て空中にひらめきぬ。かかる時しも茂林の裏より、兜頭巾に錦の野袴、金拵への腰刀のきらめくを帶びたる曲者、二所籐の弓を携へて歩み出で、空中にひらめく御旗を手早く把りて懐に押入れつゝ、莞爾と笑ふ不敵のありさま、唯者とは見えざりけり。時に澀右衞門は息吹きかへして刀を杖に起き上り、懐を探り見て御旗のなきに仰天し、がつくりよわりて又倒れぬ。曲者はうなづきつゝ、澀右衞門をのけさまに踢返して彼が刀を拾ひ取り、とゞめの刃一ゑぐり、老鶯の音を止めて、衣脱ぐ蛇の昇天を、望むきざしの其の骨柄、折から撞き出す三更の、鐘のひゞきともろ共に、行方もしれずなりにけり。扨此の邊の里人等、澀右衞門が死骸を見つけて騒ぎ立ち、たゞちに月影ヶ谷の館に注進しければ、山吹莊司雪森點檢の役目をかうぶり、僕夢平に提灯もたせて此の所に來り、澀右衞門が不慮の横死を悲しみつゝ、胸に立ちたる箭を抜き取り、箭の根を見ていぶかり居たる所に、はやく人の告げけるにや、澀右衞門が妻於破矢兒子動之助とともに夢路をたどるこゝちして走り來つ、空しき骸にとりつきて、前後不覺に號き哭び現心もなき體なり。莊司も共に落涙し、「和主等の愁傷さぞあらん、あたら忠義の武士を、惜しむべし悲しむべし。」といひて、暫し歎きに沉みしが、やゝありていひけるは、「餘の物に心をかけず、御旗ばかりを奪ひ去きたる曲者は、竝々の盜賊ならず、察する所南朝に心をよする輩ならん。」といひければ、動之助涙をはらひ、「君父の讎には共に天を戴かずと承れば、早く敵の行方をたづね、おん旗をとりかへし、首とりて亡父の靈に手向けたく候へば、此のよしを主君にきこえ上げ給ひて、復讎をおん免し給はるやうにおんとりなし下されかし。」と、母もろともに願ひければ、莊司いはく、「父母の讎に居ること、苦に寢ね干を枕とし仕へずといふ語もあれば、其のねがひもつともなり。早速主君にきこえあげておん暇をたまはるやうにとりなすべし。さりながら敵はなみ〳〵の者にはあるまじければ、必ずかろくおもふことなかれ、いさみ立つ若鷹は、かへりてあやまつ事おほきぞかし。偷起烏に心をつけ、力草を放つことなかれ、自らよくこれを思量せよ。」とこまやかに教訓すれば、「其のおん詞こそ我が爲の鎧腹卷擘手臑楯、忠といふ字を兜となし、孝といふ字を

戟となし、たとひ敵鐵城に籠り石門に隱るゝとも、一念の誠を以て尋ね出し、首ひつ提げて立歸らん。」と、勢ひこめていひけるにぞ、母は喜び莊司もうれしみ、「いさましし〳〵、必ず其の猛き心をたゆますな。」といひつゝ夢平を顧みて睃眼すれば、夢平は其の意を悟り、一腰を抜く手も見せず、動之助に斬りつくれば、心えたりと四寸の開き、下をはらへばひらりと飛びて腕首つかみ、「コリヤ夢平何をするぞ。」「イヤサ若し敵がまづかうせば。」「かう押へて。」「處をひらいてかう斬りかけなば。」「まづ此のやうに。」と扇のあしらひ、夢平が刀をはつしと打ち落せば、莊司は空虛を見すまして、かの矢の根を抜きとりつ、手裏劍にうちつくれば、かへ草履にて丁とうけとめ、「此の手の裏では復讎のおん願ひは叶ふまじきや。」「ヲ、天晴見事其の矢の根こそ敵を探る手懸りなれ、それを證據に尋ぬべし。親父の死骸は勝手次第にとりおかれよ、我は一刻も早く館に歸りて、復讎の願ひを出し遣はすべし。」といひ殘し、夢平を具して立歸れば、母の於破矢も雪森が深き情を感歎し、動之助ともろ共に、空しき骸を抱き起せば、疵口より激る血のにほひ鼻を襲ひて腥く、身上は冷えて色變り、諸行無常の青嵐に、溢れてもろき蔦の花、寂滅爲樂の短夜に、碎けて消えし苔の露、目もあてられぬありさまなれば、又も歎きに沉みしが、森の烏飛びわたりて鳴く聲し、曉近くぞなりにける。嗚呼此の澀右衛門初め駕籠の塵兵衛といひしときは貧苦にたへず、後に祿を賜はりて漸く心を安んずといへども、今又此の災ひにかゝりて非命に死す。正しく是れ父五大院左衛門宗繁が惡惡其の子に報ふ所なるべし。常言に一分の惡をなせば十分の惡報ありといへるも宜なり。豈怖れざらんや。

# 雙蝶記卷之五　終

# 雙蝶記一名霧籬物語　卷之六

江戸　山東庵京傳編

## 十四　蟋蟀枕も牀も野宿の妖怪

さるほどに菊元動之助は復讎の願ひかなひて、俄に行裝をとゝのへ吉日をえらび、一僕も具せず唯獨り、みづから包を背負ひ鎌倉を發足し、思ふ旨やありけん武者修行といひなし、越中國をこゝろざして出で去きぬ。さて越中國立山の連山に蛭牙山といふ廣大なる山あり。根は地角に盤り、頂は天心に接はり、遠く觀れば雲痕を磨斷し、近く看れば月魄を平呑し、深嶺幽谷の裏常に雲霧を籠めて晴る時なし。山口には鳥獸多く栖む故に、獵者等も多しといへども半山より奥は人跡たえて、其の奥をきはめ知る者なかりけり。比しも秋のはじめつかた、廻國の修行者とおほしく、笈を負ひ錫杖をつき、鉦を打ちならしてかの蛭牙山の半山に登り、行き暮れて宿すべき所なければ、野宿すべきかいかにせんと思ひわづらひつゝ、彼方此方を見渡すに、はるかむかうの茂林の裏に、一つの社見えければ大きによろこび、草のかたぶくばかりの徑路をもとめ、萩紫薇女郎花のたぐひの草ども生ひのびて、露滋き裏をおし分けつゝ其の處に去きて見るに、あはれにさみしうあれまどひて、人も住まざる古社なり。笈をおろして裏に入りこまやかに見るに、神前とおほしき處は奥深くしていと暗く、蝙蝠など飛びさわぎ、祭祀の具も見えず、いかなる神にかわきまへがたし。軒端かたぶき朽目に苔蒸して垣衣生ひ茂り、月も時雨も漏るべきさまなり。蔀は崩れて鳥の巣をいとなむ處となり、羣籬は破れて蜘の絲をむすぶ便りとなれり。牀には落葉敷きかさね、塵うづ高く積りて獸の足跡おほし。高欄瑞籬みな朽ちて棘の裏に倒れたり。めぐりには幾年をふるともしれぬ松杉のたぐひ深く立籠め、枝葉茂りて社の上に打ちおほひ、物すさまじさいはんかたなし。修行者は野宿するにはましならめとおもひつゝ、社の片隅に笈を置き、油紙帳を取出して敷物とし、暫く休息しけるが、松吹く風谷の水音、耳近くひゞくひまくに聞ゆる梟の聲のかれくなる、いろくに鳴く蟲の音の哀れなる、凄涼寂寞として人めづらしげに豹嘲さへ身うちを螫すにぞ、目もあはねば睡りもつかず、しばらくありてむかうの方をはるかに見やれば、毬ほどなる火の光六ツ七ツ亂れ飛ぶ。狐のともす火かと思ふに、漸々に近くなるを見れば、百姓とおぼしき者大勢明松を前に照らし、注連をはりたる棺を舁き、幣帛を持ち、此の社を望みてすゝみ來つゝものいふを聞けば、「嗚呼村一番のうつくしき此の娘、人身御供

になるといふはかはゆい事」「おいなう年は八つ親の歎きはいかばかり、何がうまうて御神は、をさない娘を食ひ給ふぞ、悲しき目を見る事よ。」と、餘所の哀れを諦きつゝ、社の前に棺をすゑ、其の上に幣帛をさし夾み、皆々ひれふしぬかづきつゝ、「おん神に告げ奉る。おん望みの餼をかやうに供じ奉れば、田畑を荒し給はぬ樣にねぎ奉る。」と、いふ間も身の毛そばだちて、「やゝ腥き風が吹く、松明を吹き消されな、そや風が。」といひさして胸をひやし、魂を消やして打ちわなゝき、我先にと爭ひて、こけつまろびつ逃げ歸る。修行者は社の隅に身をひそめて此のやうすを見聞し、さては此の社に變化すみてをさなき者をとると覺ゆ。我さいはひに此に宿す、變化を退治して諸人の歎きを救はばやと思ひつゝ、錫杖に仕籠みたる刀を抜きかけて、猶うかゞひてぞ居たりける。漸く時移り、夜嵐はげしう吹きわたりて颼々と梢をならし、青葉を吹き落しいとものすごき時しもあれ、奥深く神前俄に鳴動して、足音ひし〳〵と響き、翠簾をかなぐる音などして、現はれ出でたる變化の姿、白き薄衣のやうなる物を頭にかづきて、正體は知らざれども、かの棺のそば近く歩みより、銀の戟を打曲げたるやうなる爪生ひ、鐵の針をうゑたるやうなる毛生ひたる手をさしのべて、棺の蓋をめり〳〵と爬き破りけるが、不思議や棺の裏よりも手を出して、變化の手くびをしかと摑み、忽ち棺を踏み破りて、前髪ある若者旅裝束にて包を負ひ、白羽の矢を握りてあらはれ出でたり。是れ則ち別人にあらず、背元動之助氏邦なり。變化は手を振り拂ひ、動之助を摑み殺さん勢ひなり。修行者は變化を目がけ、錫杖に仕籠みたる刀を抜きて唯一打と斬りつくる。變化は早く身をかはし、頭をのぞめば身を沉め、下を拂へば飛び上る。動之助は生捕らばやと思ひけるにや、空虛をうかゞひ變化の腰に組付きぬ。變化は背後に手をまはし、動之助が襟首つかみ、引きのけんとしたる所を、修行者が呀と聲かけて打ちこむ刀、變化の腕を斬り落せば、動之助はさつと退く。其の間に變化はすり抜けてかき消す樣に失せたりけり。修行者は暗き裏に動之助を變化と思ひ、又斬りつくれば飛び退りて抜き合はせ、丁丁しとと斬り合ひしが、雨雲の絶間よりもれいづる月のさやけさに、互に顔を見合はせて、「和主は。」「御身は。」「こは計らず。」「思ひかけず。」と互に驚き刀をひきて鞘に納め、先づ修行者いひけるは、「和主は何故に棺に入りて此處には來つるぞ。」と問ひければ、動之助いひけるは、「其の不審は理なり。我亡父の仇を尋ぬる爲、武者修行といひなして當國に到り、昨夜此の山の麓の村長の家に宿をかりんといひ入れしに、主人夫婦をはじめ家内の者、都て歎き悲しみ居たるゆゑ、何事を愁ふるぞとたづねしに、近頃此の蛭牙山の木枯の森の古社に邪神すみて、月毎に一人づゝをさなき女を人身御供にとる事あり。これを供ぜざれば村々の田畑をあらし、あまたの人の難儀になるゆゑ止む事を得ず、いとしき子をとらるゝ者數しれず、其のとらんと思ふ子のある家には、軒端に白羽の矢の立つ事あり、

是れ其のしるしなり。我が家にも其の矢立ちしゆゑに、今年八つになる娘を人身御供に供ふるなり。其の故にかく歎くなりといふ。其の矢は則ち我が携へたる此の矢なり。我夫れを聞きうたがふ處おほければ、其の主人にかう〳〵せよといひふくめ、我其の娘にかはりて此の棺の裏に入り、百姓等には娘と思はせ、此處に舁かれ來つるが、果して推量にたがはず。今おん身の斬り落したる變化の腕をよく見給へ。」といふにぞ、修行者かの腕を取りて月の光によく〳〵見れば、是れ眞の腕にあらず、手覆ひなす物に怪しき物の爪、恐ろしき物の毛をうゑて作りたる物なりけり。修行者はこれを見、又かの矢を見、「扨は眞の變化にあらず、曲者の所爲に疑ひなし、打ちもらせしこそ殘念なれ。」といへば、動之助いはく、「いかにもさなり、なみ〳〵の曲者とは思はれず、かう〳〵ならん。」と耳語けば、修行者も何にかあらん耳語きぬ。動之助は打ちうなづき、「路上の說話草裏人ありといへば、かかる山中といへども容易に密事は語りがたし。拙者は此の山奥に分け登りて樣子をこゝろみ候はん。」「しからば互にたち別れ、再會の時はかやう〳〵。」と修行者又耳語きつゝ、枯木の枝をひろひ集めて松明につくれば、動之助は火燧袋を取出し、火を打ち出して松明に燃し、兩人これを分ち取り、たがひに思ふ旨やありけん、動之助は山奥の方、修行者は麓の方、別れ〳〵に出で去きぬ。かくて動之助は松明をふり照らし、木の下露に袖ひぢて、山ふかく登りゆくに、徑路盤曲し類まれなる險阻なり。人跡たえたる深山なれば、梢を傳ふ山猿、岩間にすだく鵰鼠も、人をあなどる風情なり。狼の吼ゆる聲は山響にひゞきてすさまじく聞ゆ。山蛭は肉に喰ひ入りて鮮血を吸ひ痛みに堪へざれば、蛭牙山と名づくるも宜なりとおもひつゝ、あやふげなる岨をつたひ、苔なめらなる巖橋を渡りなどしてゆくに、峯越しの風に松明を吹き消されければ、岩が根はひ出でたる所に尻かけて休らひ居たるに、松の林の裏よりあらあらしき大男二人歩み出でて動之助に向ひ、雷のおちかゝるばかりの聲して曰く、「汝は前髪ある弱輩なるが、何等の爲に夜中獨り此の山に上るや、此の山の半ばより上は人の上るべき處にあらざるに、見かけに似ず膽太き奴かな。」といふ。動之助此の者等を見るに、身の材高く、眼は狼の如く、鼻は野猪のごとく、髭は熊の如くなるが、峯萊をもて編みたる頭巾を被り、蒲擘手をかけ、巖菅の腰巾をゆひ、山刀の長きを帶び、一人は矛を横へ、一人は鐇を提げたり。なみ〳〵の者ならば打驚くべきに、動之助は臆したるけしきも見せず、「かかる山中を夜に入りて獨り上ること、心得なくてなるべきか、汝等もし妨げせば、我が手竝を見すべきぞ。」といふ。かの者共は呵々と打笑ひ、「いよ〳〵膽太き奴なり、汝さばかり手なみあらば、我々と勝負を決せよ。萬に一つ我が輩に勝つことあらば此の山にのぼすべし。若し負けなば活かしては歸さじ。」といふ。動之助莞爾と笑ひ、「我は武者修行のために旅をする者なれば、そは望む所なり、いで〳〵勝負を決すべし。」といひつゝ立上りて身構へすれば、

先づ一人矛をひねりて突きかくる。心得たりと刀を抜き、飛び上りてははしと打ち、沉みては丁と斬り、風にもまるゝ胡蝶の如く、雪を持ちたる柳の枝の、弱氣に見えて強きが如く、柔よく剛を制する手練、凡人ならぬ太刀すぢを、見かねて殘る一人も、鐇をさゝげて斬りつけたり。動之助は二人を相手に小太刀のあしらひ、牛若丸が鞍馬にて、木の葉天狗と戰ひしを、今見るごとき形勢にて、勢ひますます猛かりければ、二人の山人何かは以て敵すべき、高這してぞ逃げ去りぬ。動之助は刀を納め、かの奴原は山賊とも思はれず、熊とりの獵者にや、何にまれいぶかしき者等なり。此の山の奥見きはめずばあるべからずと思ひつゝ、清水を掬して咽をうるほし、松明も燒き盡したれば、月の光に乘じてなほ上りゆくに、いまだ初秋なれど、深山のゆゑか、冬の時のごとく、寒風肌をとほして堪へがたし。かくてゆき〳〵て猪の通ふ道だになき所に到りければ、蔦葛にとりつき木の根岩角を階に踏み、からうじてゆくに、やう〳〵一條の路ある所に出でたり。さて四邊をかへりみるに、此處は草木などもよのつねならず、峙ちたる岩石なども都て目馴れざる物なり。孔雀石、綠青石、紺青石、石英、琅玕、石牡丹、石木賊のたぐひも見ゆ。山中に海石のまじれるも一奇事なり。蟹石蛤石のたぐひの貝石おほく路のかたはらにあり。沙は金色なるもあり五色なるもあり、方解石は鑿々として餅を刻みたるがごとく、舍利石は皓々として露の滋きに似たり。殊に怪しむべきは、野曝の白骨を散らしおきたる如き石あり、是れいはゆる野曝石なるべし。これ等の玉石奇石、玲瓏たる月の光にかゞやきはれば、好景えもいはれず、人間を出でて仙境に入りしかと疑はれぬ。其の外見もおよばず聞きも傳へざる奇石おほかれば、動之助は奇異のおもひをなし、暫く四邊をながめてぞ居たりける。

## 十五　宿かして名をなのらする化石の鍋蓋

萬仞の青壁劍を削り、千丈の碧潭藍に染り、磊々たる蛭牙山の奥ふかく、王石奇石交はりて、たゝむ巖をきりひらき、つくり懸けたる草屋あり。苔むしたる白石樹は青龍の雲を出づるに異ならず、なめに伏したる黃瑪瑙は猛虎の風を起すが如し。かたへは深き谷川にて、漲る音のすさまじく、石鐘乳は時ならぬ軒の氷筈とあやまたれ、石燕の飛ぶ外は鳥も通はぬ所なれど、住めば都とおもふにや、篝火といふ此の家の娘、あるじの留主にたゞ獨り、燈火に向ひ居て、砧打つ手のたゆげなり。折節來る獵者の、晝狐の髭四郎あるじの留主を見こみにて、簀子の上にのし上り、だみたる聲していひけるは、「コレ娘夜なべ仕事をとりおきて、こちのいふ事聞きめされ。あたら花を此の樣に、深山木にして朽ちさする便なさよ　折々來りていふ如く、こちの心にしたがはば、此の山を連れて退き、都の花と眺むる氣、得心なきかいかにぞ。」と、いひつゝひし〳〵と寄りそへば、突倒し、「あな穢らはし、母さ

まの留守といへば、來ては囀り妾をせむるうるささよ。母さまに告げ聞え、辛き目を見するぞ。」と、いふをも聞かず又さし寄りて、猿が稗を揉むやうなる身ぶりをすれば、娘はなほうるさくおもひ、擣衣の杵で頭をはしと打ち退くる。髭四郎は頭を打たれて腹立ちつゝ、「手負猪狼のたぐひといへど、手捕にする男なれど、戀なればこそ猛のやうになほくなれ。よし〳〵我がいふ事をうけひかぬ報いには、此の家のあるじ雲根の老女のあしき仕業を、縣司に告げ聞え、やがて憂目を見すべきぞ。」といひつゝ立つを引留め、「それを告げてすむべきか。」「すまぬと思はばうけひきたまへ。」といふに娘は口ごもる　こなたはせきて、「いでいかに〳〵。」といはれて娘は胸に釘、當座を欺き母に告げ、いかにもすべしと心をさだめて笑顔をつくり、「さばかり深くおぼす心を、無解に聞かんも心なし、いかにもそなたにしたがふべし。」と、いへばこなたは細目になり、「それは實かあなうれし。」と、掌を合はして拜みつゝ、「然らば後刻に此の背後の岩陰に忍ぶべし。よき時分これを吹きて相圖を。」と、いひつゝ鹿笛を取出して娘に與へ、「燈火消して合點か。」と、むくつけき山人も戀には心をなやましつ、「先づ酒買うていはふべし。」と、穴熊の一番槍を突きとめたるこゝちして、獨り喜び歸りけり。娘はあとに腹立ち顔にて自ら頭をさぐりつゝ、「今朝結うた大事の蟬鬢を、此のやうに損ねさしたる憎さよ。」と獨語ち、再び砧を打ち居たり。彼所には動之助しばしやすらひ居たりしが、遙かむかうに火の光ひらめきて、砧を打つ音聞えければ、かならず人家あるらめとおもひつゝ、火の光を目當にゆきて、彼の草屋の門に彷徨み、物のひまより裏をうかゞひ見てけるに、十七八ばかりなる美麗しき娘、紅のこぞめの梅の小枝に春霞立田の山の鶯といふ文字を縹に染め抜きたる木綿の振袖を著たるが、帶しどけなくひき結び、額髪の顏にこぼれかゝりたるえもいはれず、人の斬首を臺にし、人の腕を杵にして衣を擣ちてぞ居たりける。かく人跡たえたる深山に人家あるすらいぶかしきに、世にすぐれて美麗しき娘唯獨り人の腕首を砧にして、平々たるけしきこそ怪しけれ、これは眞の變化にや、何にまれ宿りを乞ひて試むべしと思ひ、門の戸を打ちたゝき、「これは道を踏み迷うて難儀におよぶ旅人なり、一夜の宿をめぐみ給へ。」と聲たかやかにいへば、娘は砧の手をとゞめ、「いなこゝは人を宿す家ならず、彼處の谷に下れば麓に到る道あり、とく〳〵ゆき候へ。」といふにぞ、猶あなかちに乞ひけるに、娘は其のいらへもせず、「こちは情の心をもて此にやどさじと思ふに、其の心もしらで死地に入るを好む、命しらずの旅人や。」と、口の裏に呟くがほのかに聞えければ、益怪しみ、「宿かす事のなりがたくは、少刻のあひだ休はせてよ。」とて、猶いそがはしく戸を叩けば、娘は腹立たしげに立上りて歩み出で、戸を引きあけて月あかりに動之助が容を見れば、玉をあざむく許りに美麗しき若衆なれば、忽ち眷戀の心を起して心頭突々と跳り、あからめもせず打ちまもり居けるが、しばしありていひけるは、「主人の留主といい

ひ故ありて人を宿しがたくおもへど、おん身ならば妾が命にかへても宿したくおもひはべるなり。いざ給へ。」といひつゝ手を取りて裏に迎へけるにぞ、動之助は身上の塵を打拂ひ、脛巾をとき草鞋をぬぎなどすれば、娘はいそがはしく筧の水を石の鉢に汲み入れて足をあらはせ、何にかあらん黑き石を圍爐裏に打ちくべて火を燃し、「此は深山ゆゑに寒さもはやし、いまだ初秋なれど見たまふごとく妾は綿入を著はべり。おん身は夏衣なれば寒さに堪へ給ふまじ、いざ火にあたりて身をあたゝめ給へ。あら山に踏み迷ひ給ひ、さぞな佗しうおほされん、飢ゑもしたまひつらんなれど、かかる石山にて辛菜一房つくり得ざればすゝめ參らすべき物もなし。せめてこれなりとめし給へ。」といひて、折敷の上に白き絲のやうなる物を盛りて出せり。動之助はもてなしの厚きを謝しこれを食らふ。少し甘味ありて忽ち飢ゑを忘れたり。「これは何といふ食物ぞ。」と問ひけるに、娘いはく、「他になき物なれば知り給はぬも宜なり。そは石麪といひて此の邊の岩窟に生ふる物にて、我々が平日の食なり。」といふ。動之助はこれを聞き、よく〳〵見れば折敷も石なれば益いぶかり家内を顧みるに、砧の腕首も石にて、火桶、燈臺、絲車、麻笥、鍋釜の蓋、楕槌、擂盆、切机のたぐひの雜具、すべて皆石なり。其のうちにも石の枕は昔語の一つ家を思ひ出しておそろしければ、轉いぶかしみて其のゆゑを問ふに、娘いはく、「此處は王石奇石おほければ、奇石が洞とよび候、かしこなる谷底に川あり、よろづの物を其の川水にひたしおけばおのづから石に化す、ゆゑに化石谷となづけ候。妾が家の雜具すべて石なるは、皆かの谷川にひたして石にせしなり、しかすれば萬の物かたくなりて破損せざるゆゑなり。今爐火に燒きたるは石炭なり。此の燈火は燃石といひてよく燃ゆる石なり、松明のかはりにもして燃し候。」といふにぞ、動之助はこれを聞き、「扨は聞きおよぶ化石谷といふは此處にてありしか。」とやう〳〵不審はれにけり。さて娘は振袖の袂を口にくはへ、背後ながらによりそひて、いとはづかしげにいひけるは、「何れの國にや京の女郎田舍の女郎とかいふ石もある由、都の花の京女郎も、深山木の田舍女郎も心の實に二ッはあらじ。女子の念は岩をもとほし、思ふ男をしたうては、石にもなると聞きはべる。日陰の木々はおろかにて、石に花咲く谷もあり、岩間にたまる清水にも、月影はうつるぞかし。一河の流れも他生の緣、今夜お宿をいたせしも、深きえにしとおほさずや。」と、心の裏を仄めかし、人に馴れねばおもはゆく、顏に紅葉の木の葉石、磨きあげたる水晶に、綠をこぼす額髮、くれなゐ匂ふ口紅は、沙の中の珊瑚砂、顏に袂の隔て垣、まだ初戀の咲きそめぬ、莟の花の石梅に、色を含みてかはゆらし。動之助は娘が戀を幸ひに此の家の樣子を窺はばやと心にうなづき、「落つる花に心あれば、流るゝ水にも情あり。さばかりにおもひたまはる志、さら〳〵あだにおもはず。」と、靡きあうたる絲薄、ひとつに落つる白露に、濡れの緒ほころびぬれば、娘は嬉しさかぎりなく、動之助が手を取り

て、一間の裏にともなひ去きぬ。かくて時刻もやゝうつり、山風はいと烈しくぞ吹き渡る。此の家の主は雲根といへる老女にて、雪をあざむく白髪を肩に打亂し、いく年ふりし女蘿の古松にかゝりしごとくにて、面は節木のやうにからびたるが、石綿といふ物をもて織りたる衣の裙を高くかゝげ、片手には弭みじかなる弓に獵箭を握りそへ、片手には兎を提げ、老いを見せざる健やかさ、谷の險阻をのぼりつゝ、家路に歸り門首より、「娘今戻りしぞ、娘々。」とよびければ、かゞり火は一間の裏を走り出で、「いつよりも御歸りの早かりし。」といへば、「今夜は山風さわがしきゆゑに、鹿も猪も驚き走りて手にあはず、化石谷の岩陰にて、やう〳〵此の兎一つとりて歸りぬ。酒は晝ほど買うてあり、是れを肴に寢酒飲まん。」と、いひつゝ邊を見まはして、脛巾草鞋などのとき捨てあるを見つけ、「旅人を留めしか。」といへば、娘は筧の水に手を清めつゝ、「されば候、道を踏迷ひしとてわぶる旅人を宿しはべり。」といふ。老女はうなづき、「そはよくせしぞ。いかなる體の旅人にや、我見えて試むべし。奥の間にをらば此に伴へ。」といふにぞ、娘は、「心得つ。」といひて一間の裏に入り、動之助を連れて出で來り、「これは妾が母に侍り。」といへば、動之助は宿をかりし禮をのべなどするに、老女は動之助が爲體を見て笑顔をつくり、「かかる山深き栖なれば、萬の事たらぬがちなれど、若し侘しくもおぼさずば、ゆるやかに旅のつかれを休め給へ。」と、いと懇にいへば、娘は母の詞を幸ひに、「なう旅の郎、母もしか申せば、十日も二十日も十年も百年も此におはせ、必ず見捨てて出で去き給ふな。」と、いふ詞のはしばしに、自然と戀は見はれぬ。動之助も打ちとけて、「母子そろひての厚き情、謝すべき詞も候はず。」といへば、老女は微笑みて、「御身はいづくよりいづくへの旅なるや。」動之助いつはりていひけるは、「拙者は原下總の葛飾に住む武士の浪人の子なるが、繼母に憎まれて追出され、立寄るべき陰なきゆゑ、越後國にある少しの所縁を心あてにゆく旅なり。」といふに、老女またいはく、「そは痛はしき事なり。卒爾なる事なれど、我が此の娘見給ふごとく、身材高く生立ちぬれど、いまださだまる壻なければ、明日をしれぬ此の老いが亡き後は、いかにして世を過ぐべきと、不便に思ふは親のならひ、此の山住のいぶせさを厭ひ給ふ心もなくは、おん身を壻に。」といひさして娘を見れば、かゞり火は顔赤くしてはぢらひぬ。動之助は老女が詞にしたがひて、なほ樣子探りて見ばやと思ふにぞ近く寄り、「そはありがたきまでにかたじけなきおほせなり。今きこえ申せし如く、水鳥の陸に迷ひ、足なき蟹の身のうへなれば、此の家の壻となし給はば上なき幸ひなり。」といふにぞ、老女は喜び、「善は急げといふ言あれば、今夜假に婚姻の杯をさすべきなり。娘戸棚の酒もて來よ、竈の下を燒きつけよ。我は兎を料理して肴にすべし。」といへば、娘はいと嬉しみつゝ、俄に襷ひき結ひて、母とともに立ちはたらき、石の切机石刀、料理終りて石酒壺、石の杯とりそへつ、松吹く風の颯々々を、祝儀の謠に聞きなし

て、三々九度も假初に、婚儀は軈てすみにけり。老女は益喜びて、「何をがな壻引出に。」といひつゝ、あたり見まはして、釜の蓋を手に把りあげ、「今からは釜の下の灰までも、壻どのに參らする、證はこれ。」と差出せば、動之助はこれを受け、「心ありげな引出物、拙者も何がな納采のしるしと思へど、憂き旅なれば一物も貯へず、せめてこれを。」と、そばにありあふ鍋蓋を把りあげつ、「破鍋にはひきかへて、筑摩の祭數もなき、玉の器の娘子に、似合はぬ拙者は此の緘蓋。」と差出し、互に探る心と心、謎はとけねどうちとけて、「これ娘、まだ山住に馴れぬ壻どの、かならず夜風をひかさぬやうに心をつけよ。おくまりたれど磋造りの亭座敷は、屏風岩にて風をふせげば暖かなるぞ、かしこへ伴へ。壻どのゆるゝかに寢ね給へ。」といふにぞ、「しからばゆるしたまはれ。」とて、動之助は立上り、娘が案内に打連れてかしこの一間に入りにけり。あとには老女眉顰め、かの若者の爲體いぶかしく思ふゆゑ、壻に望むにいなみもせず、いよ〳〵合點ゆかざるゆゑ、今世にはびこる足利の家の紋、二引兩にたとへたる此の釜の蓋は、四海におほふ引出物なりと謎をかけしは、足利方のまはし者ならんと思ふ故に、我も足利方に所縁の者なりと思はすべく思ひて與へたるに、彼又中黑の紋にたとへたる鍋蓋を、納采なりと謎かけしは、我を南朝の味方と察し、おのれも南朝に心をよする者なりと思はせて、我に心をゆるさせ、我が素性を探らん爲の計畧ならん、若年に似合はざる卽座の頓智といひ、かかる深山へ唯



獨りのぼり來つる大膽不敵、唯者とはおもはれず。別にまたいかなる謀計あらんもしるべからず。大事は小事よりあやまつなれば、今夜のうちにたゞ一打と、獨りうなづく折しもあれ、相圖の飛礫に石蛤をはつしと打てば、老女は心得立出でて戸を引きあくれば、燃石に火をともし、門方にひかへし手下の獠者、秦龜の泥九郎、山蛭の血平太、兩人ひとしくいひけるは、「先刻此の山の半途にて旅の若者に出であひ、矛と鐇にて戰ひをして試みつるに、劒法を精熟し、しかも早業にて我々敵しがたきゆゑに、這ふ〳〵逃げ退き候なり。彼奴唯者とは思はれず、此のよし注進仕る。」と、いふをおさへて、「聲高に物いふな、其の若者は此方にとめおきぬ。果して我が推量にたがはず、いよ〳〵足利方のまはし者に疑ひなし。我彼奴を今夜の中に打ちとらばやとおもへども、若し打ちもらさばかの磋造りの亭座敷の軒口に釣りおく磬石を打つべければ、其方にても貝石の螺を相圖に吹き合はせ、かの活道をさへぎりて打ちとるべし。若し又死地に入らば自ら死すべければ、手をくだすに及ばず。又此方にて打ちとらば、豫てしめし合はせおきたるかの相圖をあぐべきぞ、此の通り手下の者等に殘りなくひ聞かせよ。」と耳語けば、兩人の者は打ちうなづき、早足を出して走せ去きぬ。老女は門をさしかためめ、石の刀を取出して腰におび、燈火を吹き消して拔足しつゝ、亭座敷に歩みより、梯のうへに二足三足上りしが、いな〳〵娘が目をさましなば、必定妨げすべければ、宿鳥をさすにしくまじと、巖

に下りて牀の下にくゞり入り、石の刀を引抜きて、突上ぐる簀子の上に、「あなや。」とさけぶ聲もろともに流るゝ血しほ、仕すましたりとおもひつゝ、いそがはしく梯を上り、明障子を蹋放して、月影にすかしみるに、おもひもよらぬ手下の獠者、畫狐の髭四郎、朱に染りてのた打ちつ、旅人も娘も居ねば、「ャァとり逃せしか、くやしさよ。」とひとりごとし、豫て用意の雷椎を取上げて、掛けおく相圖の磬石を打たんとせしに、屏風の陰より娘かゞり火走り出で、其の手にすがりてとゞむれば、老女は眼をいからしつ、「扨は汝色に迷ひてかの若衆めを逃せしな、にくき奴、こゝを放せ。」と突倒して、又も打たんと踏み出す足に、倒れながら取りつきて、手弱き力にとゞむる娘、老木の松に藤波の、まとひつきたる如くなり。娘は聲をふりたてて、「これ母さま妾がいふこと聞いてたべ。日來おん身のあしき業、此の山に迷ひ來る旅人をとゞめおき、剛臆をこゝろみて、強き者は味方につけ、弱き者は打つて捨て、又剛なれども味方につくをうけひかざれば、手下の者にいひつけて道をさへぎり殺さすゆゑ、非命に死す者幾人といふ數しれず、其の悪報はかならずおん身にかゝるべしと、平日に妾が諫むれども、聞き入れ給はぬ無得心、先刻此の髭四郎が妾にたはぶれ、得心せずば母人の、あしき仕業をうつたふるといひし故、いつはりてうけひきたる體にもてなしたるを實と思ひ、しのび來つるを幸ひに、相圖に與へし鹿笛を吹き、誘きよせて彼の旅人と入りかはらせ、おん身の手にかけさせしは、訴人の難をのがれんため、旅人を逃せしも、まつたく色に迷ふにあらず、生先ある若人を、殺さんことのいたはしく、二つには母人に罪つくらすをいとへばなり。此のところを聞きわきて、其の相圖の石をうたず、何とぞたすけたまはれ。」と、泣く〳〵いへば老女は益怒りをなし、「我が心には大望あり、汝等が知る事にあらず。彼の者を逃しては、我が家の樣子他に漏れて大望の妨げとなるなれば、たすくる事はなりがたし。放せ〳〵。」とあらそふひまに、髭四郎おき上り、痛手に屈せぬ強氣者、「さては我をしのばせしは殺させん爲なりしか、憎さも憎しいよ〳〵訴人になるべし。」と、いひつゝ岩下に飛びくだる。折しも下には血平太泥九郎兩人ひとしく來かゝりければ、老女は上より聲をかけ、「心變りの髭四郎、それ打ちとれ。」と下知すれば、二人は心得かけへだち、等しく石の刀を抜きて斬りつけたるに、深手に弱らぬ髭四郎、同じく刀を抜き放して、二人を相手に打ち合ひぬ。老女も益氣を焦ち、取りつく娘を突きのけて、磬石をうち鳴らせば、忽ち四方に吹きたつる石の螺、山響高くひゞき合ひていとすさまじく聞えつゝ、遙かの山間谷間に許多の松明かゞやきて、つらなる星の如くなり。娘は四方を見わたして、獨り氣をやみ身をもだえつゝ、案内もしれぬ此の山中の、ゆく道々をふさがれては、彼のお方はかならず打たれたまふべしと、歎く涙のひまよりも、圍みをとかせ退かする、相圖はかねて聞きおきしと、思ひ出して此方にかけ下り、埋火を外の方に持ちいでつ、曲玉壺に貯へたる、

螢砂を掌に握りて、火桶のうちに打入るれば、火氣にしたがひ螢砂空に高くのぼりけるが、相圖を合はする螺の音もやみ松明の光も漸々に消えけるにぞ、娘はやう〳〵安堵して、胸撫でおろす時しもあれ何ものともしれず、岩の陰よりあらはれ出でて娘を捕へ、口をおさへて小脇に抱き行方もしれずなりにけり。老女はこれを露しらず、螺の音やみ松明消えしをいぶかりつゝ、なほ磬石をつゞけうちに打ちけるが、下の方を見おろせば、血平太泥九郎の兩人髭四郎に斬り立てられ、いと危く見えければ、老女は雷槌をなげ捨てて大きなる吸針石を取上げつ、髭四郎がはたらくにしたがひて、上よりこれをつかひけるに、血平太泥九郎の兩人は石の刀、髭四郎が刀は常の鐵刀なれば、吸針石の氣勢にいざなはれて、刀の手の裏狂ふ所を、二人の者は得たりとしたゝみかけて斬りつけたれば、髭四郎はつひに打たれて死してけり。此の髭四郎は別人ならず、是れ卽ち前の月餘吾郎が住家の竹林にしのびて餘吾郎を打たんとしたる堂左衞門が僕なり。素獠者なりしゆゑ其の後又此の業をして、雲根の老女が手下となりしが、鹿笛の音にあざむかれて殺されしは、妻戀ふ鹿を數多殺生したる報いなるべし。さる程に動之助は篝火が情によりて危急をまぬかれ、包を背負ひて彼の家を逃れ出で、松明にかへよとて娘が與へたる夜光石といふ物は、我が身の四方五尺ばかりを照らし、外より見れば光なし。折ふし月、雲かくれして暗しと雖も、かの石を以て道を照らして走りけるにぞ、恰も白晝をゆく如くなり。

又娘が教へけるには、是れより東の方遙か先に路二條あり、一條を死地と號け、一條を活道と號く。瑠璃の巖聳えたる方は則ち死地なり。是れ立山の地獄につゞき、三稜石といひて劍の山の如き巖あれば行く事あたはず。水晶の巖ある方は活道にて、則ち化石谷の下に出で、心安く籠に到る道ありといひける故、教への如く活道に入りて走りけるに、忽ち背後の方に磬石の音ひゞくとひとしく四方に螺を吹合はせ、許多の獠者等松明を振り照らして走せ集まり、動之助を取圍み、矛鐇山刀のたぐひの得物々々を打振りてぞ向ひける。動之助は止むことを得ず、兩刀をぬきて左右の手に打振りつゝ、風の如くに打ちならし、雲の如くにさへぎらし、多勢を相手に戰ひけるが、劍法手練の早業に、斬立てらるゝ獠者等、瓜の如くに砍倒され、匏の如くにうち割られ、死人おほしといへどもなほ入りかはり立ちかはり、四方よりとりかこみてすき間もなく戰ふにぞ、さしもに猛き動之助も雙拳四手に敵しがたく、ほと〳〵危く見えたる處に、夜霧深く立籠めたる裏に叫子笛の音聞えけるが、忽ち黑き裝束したる武士三人、空木を出つる荒熊の如き勢ひして走り出で、鉈をそろへて獠者等の摯る中に斬つて入り、旋風の如くにかけめぐりて戰ひければ、獠者等は敵する事あたはず、蛛の子を散らすが如く、四方八方へと逃げ散りける。三人の武士は道暗ければ長追ひせず、舊の所に歸りしに、動之助は訝しみ、「何等の人なれば我が危急を救ひたまはりしぞ。」といひつゝ、彼の夜光石を以て三人の面を照らし

みるに、一人は南方十字兵衞が兒子南餘兵衞、のこる二人は北岩倉の僕露助、山咲莊司が僕夢平なれば、「こは思ひ掛けず。」といひて益訝しみけるに、南餘兵衞いひけるは、「拙者が主人山咲莊司君命によりて俄に旅立ち、我が輩を具して當國にいたり、今此の山の麓なる假名寺と云ふ寺に旅宿せり。然るにおん身今夜獨り此の山に登り給ひしと聞き傳へてあやふく思はれ、我が輩を召し、『汝等今夜彼の山に登り、動之助若し危き事あらば救ふべし。』と命ぜられしによりてかくの如し。」といへば、動之助は今にはじめぬ莊司が厚意を感激し、四人しばらく休息してゐたりけるに、かの血平太泥丸郎の兩人、石の刀を拔きそばめて、岩の陰より歩み出で、動之助と南餘兵衞を欺打にと斬りつけたり。此方の二人はいそがはしく身をひねり、動之助は血平太が首をはつしと打ち落し、南餘兵衞は泥丸郎を腰車に斬り放し、兩人一度に刀をぬぐひて鞘に收めけるが、南餘兵衞動之助に對ひていはく、「主人莊司おん身に見えて密談ありと申されたれば、一旦假名寺へおはして御對面あるべし。」といふ。時已に東しらみ、山鴉鳴きさわぎければ、四人ひとしく麓をさしてぞ下りける。

前に莊司南餘兵衞に對し、「深山の濕地といへども遠く音を發する叫子笛をつくれ、他日おのづから用ゐる時あるべし。」といひしが、果して此の時用だちぬ。

## 十六　おもしろうて頓てかなしき鵜養の腹切

其の磧礫を翫びて、玉淵を窺はざる者は、未だ驪龍の蟠る所を知らず、其の弊邑に習ひて、上邦を視ざる者は、未だ英雄の纏る所を知らずといへる吳都賦を、おもへば越の中國、蛭牙山の崖を背後になし、龜毛川の流れにそひ、兎角といへる村中に、閑作といふ鵜養あり。頭に雪は戴けども、面は朱をそゝぐが如く、古來稀なる七十歳の、翁と見えぬ岩乘作り、營む業は朝暮に、龜毛川の鮎をとり、唯殺生を事として、波の滴の腰蓑に、露の命をつなぎ船鵜舟にともす篝火の、消えなん後の闇路をも更におもはぬ罪業は、日々に深くぞなりぬらん。栖のかたへに幾年を、經るともしれぬ大木の古松あり、空に注連をひきたるは、樣子ありげに見えにけり。比しも七月盂蘭盆の時なりしが、さすがに盆中は殺生の業を休み、靈棚をいとなみつゝ、孤筵に杉の葉垣、茄子の牛に瓜の馬、椒の箸に土器も、土になりたる人のため、淨土の風に瓔珞の、ゆらくが如く掛け渡す、粟穂稗穂に青匏瓜、濁りにしまぬ蓮の葉も、露の手向と見えにけり。村中の鵜養等、あるじの招きに寄りつどひ、靈棚の前に圓居して、百萬遍を繰る念珠の、手つきも常に手馴れたる、鵜繩さばくが如くなり。あるじの閑作音頭取り、「發願以至心歸命阿彌陀佛、念佛衆生攝取不捨。」と、鉦打ちならす一越調の、聲もゆがめる

小屏風に、押し散らしたる追分繪の鬼の念佛に異ならず。老いたる若き打交りて、調子ちがひの六字詰は、巖に咽ぶ谷川の、黄頰魚の聲かとうたがはれ、尻聲のなき責念佛は、松の嵐に鳴きまじる、秋の蟬かとあやしまる。欠まじりに退屈の、念佛を奥齒に嚙みくだけば、「いづれも御苦勞これからは、顯以此功德平等に、あるじぶりすべし。」といひて、鉦打ちをさめ念珠取りをさめて、閑作は皆々に打向ひ、「闇を好むが鵜養のならひ、月の半ばは月夜といひ、殊に盆の中はどれも〳〵休みを幸ひ、明の十五日が冥日にあたる亡者があるゆゑ、今日の逮夜に志の百萬遍、ようつとめてくだされた、心ばかりの蓮の飯、新酒なと參らしてもてなすべし。あれ見給へ盆中は、鵜籠をひらきて鵜等にも樂をさするが罪ほろぼし、こちらも盆が骨休め、畔跨むとも寢まるとも、心まかせてうち寛ぎて語りめせ。」といひつゝ地獄の釜の蓋、あけて盛りだす蓮の飯、薄き新酒の磁鐔酒、精進肴とりそへてさし出せば、遠慮會釋もなみ居たる鵜養等、時宜挨拶もそこ〳〵に、施餓鬼にあひたる亡者の如く、或は食らひ或は飲み、咽につかへてむせかへるも、鵜養の罪とも思はれぬ。かくて漸時うつりて、暮影に鳴く晩蟬も、野邊の鶉に音を讓り、蘆花の風雪を散らし、殘螢の光燈を點じて、日も已に暮れければ、鵜養等はあくまで食らひいたく醉ひつゝ、我が家〳〵に歸りけり。さて此の閑作につかふる下男に、崩築吳呂藏といふものあり。此の時船に檣さして歸りきつ、岸の柳に船を繫ぎ、櫂をかたけて裏に入り、訛みたる聲して、「最早念佛もすみましたか、おん身獨りで嘗ないをがはしくありつるに、今夜は空に雨氣がみゆれば船には苫をかけました。」といへば閑作、「唯々それはよく氣がついた、高燈籠にも火を燃し、彼等が飲み食ひに取りちらしたる、此の器どもも取りをさめよ、鵜にも餌を飼ひ魂棚にも燈明たてよ。」といひつゝ、樽を打振りて、「五升ありし此の酒を、滴も殘さず飲みをつた。寢酒なくては寐つかれぬ、何かの用をしまうたら、一走り買うて來よ。ついでに豆腐小半丁、線香二把、錢はかしこに出してある。我は少刻休息するぞ。」といひ捨てて、奥の一間に入りにけり。吳呂藏は何くれと健やかに立ちはたらき、門に立てたる高燈籠にも火を點し、「これであらまし用はすむ、唯一走りと、いうた所が酒屋へ一里豆腐屋へ半道、菖蒲ヶ池の狼に油斷がならぬ。」と獨言し、櫂の先に樽を括りて打ちかたけ、松明をたづさへて、いそがはしげに出で去きぬ。夫れ飛花落葉のはかなさを觀ずれば、妻子珍寶なにかせん、生死長夜の夢の世を、驚き悟る人なるか、まだ年わかき修行者の、笈を負ひ錫杖をつき、打ちならす鉦の音いろは松蟲の、草葉に鳴くが如くにて、萬燈籠を目あてに來り、殘る螢の二ツ三ツ風に亂れて露深き、葎の門に歩みより、「これは廻國の修業者なるが、行き暮れて難儀に及ぶ、一夜の宿を御報謝にあづかりたし。」といひ入れたり。閑作は一間を出で門の戸をあけ、「今日しも亡き靈を祭る日といひ亡せぬる人の逮夜なるに、修行者の坐せしこそ幸ひなれ、いざこなたへ。」と迎

ふれば、「然らばゆるし給はれ。」とて、修行者は裏に入り、草鞋をとけば、閑作は苔井の水を汲みとりて足を洗はせ、「麁末の齋飯を調ずる間、廻向をたのみ候。」とて、いそがはしく奥に入りぬ。修行者は笈をかたよせ、魂棚に向ひ居て、先づする忍おきたる位牌を見るに、延文四年三月十五日打死、大佛九郎貞直靈、としるしたり。修行者はこれを見て、或は驚き或は悲しむけしきにて、落涙袖をしぼりしが、良ありて懐より香包をとり出して香を燒き、鉦打鳴らし、「南無亡靈頓證佛果菩提、南無阿彌陀佛あみだ佛。」と唱へつゝ、廻向をしてぞ居たりける。時に香氣馥郁として、家内に薫じ、世の常ならぬ香なれば、閑作は一間の障子を細目にあけて香の薫をいぶかしむ。かかる折しも蛭牙山の雲根の老女、此の門首に來かゝりて、これも香氣を不思議に思ひ、しばし窺ひ居たりしが、何か心にうなづきて、家の背後に廻り去く。修行者は廻向を終り鉦を打ちをさむれば、閑作は一間を出でて修行者の側近く寄り、「今おん身の手向け給ひし名香は、楊貴妃の身摺といふ香ならずや。」と問ひければ、修行者曰く、「いかにも然り、彼の香をきき知りたる和主の素性は何人ぞや。」と問ひ返せば、閑作いはく、「先づおん身の素性をあかされよ、其の上にて我が素性をも語るべし。」といふに、修行者威儀を繕ひ、「我實は相模次郎時行殿を守りそだてし、大佛九郎貞直が一子なり。すぎつる延文四年、信州苦形落城の刻、戰場にて出生したる由育てたる者物語れり。父貞直打死とは聞きしかど、存亡疑はしければ、若し活きながらへて此の世に坐すならば、めぐり會ふこともやと、かく修行者に身をやつし、諸國をめぐり尋ねしが、思ひよらず此の家に祭る亡父の位牌、さては打死にきはまりしと、思へば力も落ち果て、むなしき位牌を拜む事、よく〳〵薄き親子の緣、亡父を祭る此の家のあるじは、必ず所緣の者ならめと思ふにより、探らんために燒きたる香は亡父の遺物、此の香包を見られよ。」とさし出せば、閑作は是れを見て打驚き、「いざ先づこれへ。」と上座に移して兩手をつき、「扨は戰場にて生まれ給ひし若君よな、今は何をかつゝむべき、かくいふ拙者はおん父九郎貞直君に仕へし郎等魚淵劍太とまうす者、はからず今夜めぐりあひ奉るも、おん父尊靈の導き給ふにうたがひなし。おん父君は知具麻川に入水して、底の水屑と成り給ふ、明は冥日今夜は逮夜。過ぎし昔をおもひ出すもくちをしや。」と、拳を握りていひければ、修行者は落涙しつゝさしうつぶきて詞なし。閑作重ねていひけるは、「壁に耳あり墻に縫めありとまうせば、端近にてはおん物語もなりがたし、いざたまへ。」と案内して、奥の一間にいざなひぬ。かくて初更もやゝすぎて、雨雲の晴間よりもれいづる月影の、川波てらす岸づたひに荷をになひて、心太を賣る商人歩み來つ、此の家の門邊に荷を下し、「心太めせ、ちうしやくも入りて候。心太の曲突をのぞみ給はば見せ申さん。」と、聲たかやかにいひければ、此の村の鵜養等寄り集ひ、「心太の曲突とは珍らしき商人、いで望みて見るべし。」とて取りかこめば、商人は嗽きしつゝ、「そ

も我が商ふ心太は伊豫國宇和島の名產なり。漢名はあまたあり。和名は古留毛波またこゝろていとも申すゆゑ、ところてんとよこなまれるなり。『盂蘭盆のなかばの秋の夜もすがら月にすますや我がこゝろてい。』と詠みたる歌もはべれば、今がもなかの商ひ物に候ぞ、ひやゝかにめし候へ。曲突をのぞみ給はば、いで〳〵見せ申さん。」といひつゝ、或は空に高く突きあげて皿坏に受留め、或は背後ざまに突きて肩を越させ、或は突きて股をくゞらせ、或は突上げて落つる處を箸をもて挾みなどし、いろいろさま〴〵に曲を盡して見せければ、鵜養等は興に入り、「扨もおもしろき商人かな。」といひ囃して、我も〳〵と心太をうち食ひ、錢を與へて立去りぬ。折しも川風颯と吹きて閑作が魂棚の燈明を消す暗まぎれに、彼の商人四邊を見まはし忍び入りて、魂棚にするゐありし位牌を奪ひ、懷に押入れつゝ、荷をになひて行方もしれずなりにけり。時に庭の苔井の裏より、大きなる蛇蠢き出でて、鵜の鳥の雛をくはへ、傍邊の古松の空に入らんとせしが、忽ち地上に撲的おち、のたうち廻り死してけり。彼の修行者は一間の障子を押しあけて、眦もせず此の體を見居たりしが、あの空をこそ怪しけれと心にをさめて打ちうなづき、松のもとによらんとせしが、閑作はいそぎまどひて走り出で、むかうにまはりておし戻し、「さてこそ僞者觀念せよ。」とよばはりつゝ、一腰を拔き放ちて斬りつくれば、修行者は錫杖をとりのべて丁と受留め、又斬付くるを受け流し、裏に仕籠みし刀を拔きて、打々しとと打ち合ひぬ。かかりける時崩築吳呂藏は、買物をとゝのへて家路に歸る其の跡より、以前の商人拔刀を背後にかくしてねらひより、肩尖のぞみて斬りつくれば、吳呂藏は身をひるがへしてこれを避け、酒樽を投げ捨て櫂に仕籠みし刀を拔き、拂へば退き引けば入り、來往去囘の祕術を盡し、雙方おとらぬ蝸牛の角、裏には閑作修業者が、互にはげしき刃の音、外方には吳呂藏商人が、火出づるばかりに戰ひしが、何思ひけん吳呂藏は、巖の上にかけ上りて、川にざんぶと飛び入りつ。拔手をきりて游ぎゆく。商人は岸づたひに跡をしたひて追ひ去きぬ。修行者は閑作が、電光石火とひらめかす、刀の光に眼くらみ、勢ひ猛きに氣をのまれ、劍法亂れて敵しがたく、すでに打たるべう見えけるが、流るゝ足を踏みとめつゝ、門に立てたる高燈籠の引綱をはつしと斬れば、燈籠は地上に落ち、銀河の星か山々に、つらなる松明旗捺物、夜風になびく雲の波、陣鉦太鼓鯢波、龜毛川の漲る音にひゞき合ひて、いとすさまじくぞ聞えける。閑作は刀を引き、向うを屹と見渡して、「シヤもの〳〵しき金鼓のひゞき、我を打たんと鎌倉勢遊卷すとおぼえたり。たとひ萬騎の敵たりとも、なでふ事のあるべきや。あな小黠しや。」と冷笑ふ。油斷を見すまし修行者が、又斬りつくる刀をはつしと打落し、手早く側に引付けて、膝の下に敷きたる折しも、雜兵許多かけ來り、槍をひねりてつめ寄せたり。閑作は修行者を摑み退け、庭におり立ち身がまへして、突き來る槍を左右に握り、一つもぎれば二人一度にひるがへり、

倒るゝ上を飛びこえて、又突きかくる槍の血留を捽みて、蹴やれば槍の手を放ち、四五間飛んで大勢の、羣る中に倒れたり。なほこりずまに隙間もなく、鋩鋒をそろへて突く槍は、篠をつかぬる急雨の如く、ひらめく光は電光の、山の端めぐる如くなれど、是れを物の數ともせず、飛龍のごとくにかけ廻り、猛虎の如き勢ひして、前後に當り左右を支へ、陸離々々と斬り拂へば、雜兵等は敵しかね、しどろになりて引退く。修行者は隙間を見て、背後抱きにむずと組むを、腰をひねりて振りほどき、襟首颯みてうごかさず、仁王立に立ちたる處に、弦音高く鳴りひゞきて、白羽の箭とび來り、閑作が胸板をはつしと射たるが、うらをかかず矢幹くだけて飛び散りぬ。閑作は呵々と打笑ひ、「形も見せず遠矢を射たる卑怯者、我が身は鐵石、かかる弱矢の立つべきか。」と、嘲る彼方に聲高く、

「またこんと賴むの鴈のわかれ路は待つ間ひさしき名殘なりけり。」

と、思ひもかけず一首の歌を吟ずるにぞ、さしもの閑作おどろけば、又曰く、「大佛九郎さのみな騷ぎそ。月影ヶ谷判官の家臣、紫元動之助氏邦見參すべし。」とよばはりつゝ、遙か向うの木陰より、現はれ出でて歩み來る、其の扮裝いかにとなれば、綠なす額髮を玉なす顏に颯と振りかけ、雙蝶の金物打ちたる鹿卷を結びたれ、小櫻縅の腹卷に、丹地の錦の陣羽織を著くだして、秋野の摺箔したる白精好の大口はき、黃金作の太刀を鴛尻にさけ佩きて、頰籐の弓を小脇にかいこみ、物具の金物を月影に輝かし、光渡りて歩み來る、其の形勢志氣堂々威風凜々たる若武者なり。閑作は眉をゆすりてほくそ笑ひ、「こと〳〵しげに名乘りし故、いかなる荒武者か出で來ると思ひしに、手にも足らざる小冠者原、討手の大將なんどとはかたはら痛し、しかのみならず我をさして大佛九郎と呼びかけしは何の狂言、貞直殿は知具麻川に入水したるをしらざるや、飼み殺すは安けれども、童を相手はおとなげなし、汝が命を汝に與へて許しやる。とく〳〵歸れ。」と高笑ひ、ほざきにほざく不敵の詞。動之助は少しも臆するけしきなく莞爾と笑ひ、「入水といふが則ち僞り、人を欺く死間の計畧、今あらはれて口をしからん。先つ比鎌倉極樂寺の切通に於て、我が養父紫元澀右衞門を遠矢にかけ、日月のおん旗を奪ひ取りしは汝なること疑ひなし、其の證據は是れなり。」とて、腹卷の引合より、矢の根をいだし目前にさしつけ、「此の矢の根におぼえあらん。養父を射たる此の父の根は、他國にまれなる鏃石、我是れを證據に仇をたづね、蛭牙山の麓に宿り、木枯の森の邪神人身御供をとるしるしに射たる矢なりといふを見れば、今我が射たる白羽の矢にて、これも おなじ石の鏃なれば、これぞ仇の手がゝりと思ひ、人身御供の棺に入り、かの社に到りて試みつるに、果して眞の變化ならねば、いよ〳〵怪しみかの山深く登りて見るに、化石谷に鏃石多くあり、又石の刀を用ゐること鐵刀に異ならず。察する所梓となりて月影ヶ谷のおん館に入りこみしも彼の奇石が洞に住む老女なるべし。曾て十洲記にいへることあり、

西海の流洲に昆吾石あり、劒に作るに水精の如く、玉を割るに泥を切るが如しといへり。又王氷素問を註していはく、肅愼國の人枯木を以て矢とし、青石を鏃とし、毒を施し、人に中れば卽ち死す、これを石砮と號く、又滕州に青石を以て刀劒となすこと銅鐵のごとしといへり。汝これ等にならひ、化石谷の鏃石に毒を施し、澀右衞門を射たるに疑ひなしと思ひし故、假名寺を陣所となし、兵具をとゝのへ向うたり。養父の敵といふは私、知具麻川に入水といつはり活き殘りて、足利殿を亡ぼし北朝を傾けんと味方を集むる謀叛の張本、大佛九郎貞直と、とく〳〵本名名告るべし、君命おもき打手の大將動之助氏邦、汝が首を打取りて、初陣の高名にすべきなり。」と、鋭き詞の舌劒に、勇氣はげしき閑作も、肝さき突かるゝ如くにて、眼血ばしり面色變り、頭の汗煙の如くに立ちのぼり、蘆の花の如くなる鬢髭をそらざまにひるがへし、牙を嚙み拳を握り、鼻をふき怒らし、堅庭を踏みならしつゝ、「我自ら意を蟠龍に比して泥中に蟄し、魚鼈と伍はりを同じうして、升天の時至るを待ちつるに、汝等如き小冠者ばらに見あらはされたるくちをしさよ。さるにてもいぶかしきは、我苦形の戰場にて、生子にそへたる香包の裏にしるせし一首の歌を、汝今吟ぜしはいかなる故ぞ、それ聞かん。」といひければ、動之助、「唯々其の不審理なり、委しく語りて聞かすべし。」といひて腹卷の引合より位牌を出し、「我先刻南餘兵衞といふ者を心太賣の商人に身を扮させ、奪ひとらせし此の位牌に、大佛九郎貞直



靈としるせしは、是れ則ち養父の仇の形代なり。かの豫讓が衣をさしたる例に倣ひ、今父の仇を報ゆるなり。思ひしれや。」とよばはりつゝ、太刀をすらりと拔き放して、位牌を切割りいそがはしく物具を脫ぎ捨てて、雪の如くなる膚をおし膚脫ぎ、太刀をさかしまに取直して、脇腹に突立てたり。大佛九郎は益いぶかり、「汝何ゆゑ自殺するぞ。」と問ひければ、動之助苦しき息をつきて云く、「君恩おもき嚴命なれば默止し難く、生きては謀叛の張本を打手の大將、二ツには、產みの恩より猶深き、養父の爲の復讎、公私とわかる忠孝二ツ、見のがす事の能はざれば、死して親子の名告をせんと、其れ故に此の自殺。かくいふ拙者は苦形の戰場にて出生したるおん身の實の子なるぞや、其の證據見たまへ。」とて、陣羽織を差出し、「是れを著して打手に來しは、豫て自殺の覺悟ぞ。」といひければ、さしもの貞直肝つぶれてどつかと座し、陣羽織を取上げて好く〳〵見るに、紛ふ方なき雲鶴の錦なれば、「さては我が子にてありしか。」と、猛き心もよわりつゝ、唯惘然れたる許りなり。良ありて修行者に打向ひ、「先刻汝香包を證據にして我が子なりと名告りしが、苦形の落城を指折りて算ふれば、今年で丁ど十八年、汝が年のころほひは、二十を過ぎしと見ゆるゆゑ、僞り者と推量し、我又汝をいつはりて、郎等劒太と名告りしは、汝をあざむき人質に取りおかん計畧なり。そも汝は何者ぞ。」と問ひければ、修行者云く、「汝自ら我が名を位牌にしるして祭り置くは、死聞の奇畧と察せしゆゑ、動之助が所持

したる香包を假名寺の陣所にて受取り、かの香を燒きて汝がふるまひを試みたり。我實は山咲莊司が一子山咲餘吾郎雪村といふ者なり。先頃兄山咲窗閑が隱宅に、紫の裝束してしのび入り、朱塗の箱を奪ひ出でたる曲者を、窗閑からめとりて責め問ひつるに、『大佛九郎貞直が郎等、魚淵劍太といふ者なるが、南朝の帝、古今傳授の祕書を求め給ふにより、其の祕書のをさめある此の箱を奪ひ出でし。』と白狀し、其の時彼が物語にて、動之助が素性を委しく知りつるなり。『大佛九郎が存亡はいかにぞ。』となほ責め問ひしが、『入水に疑ひなし。』といひて白狀せず。火水を以て責めたれども猶いはず、自ら舌を喰ひ切りて死しつるなり。先程汝が魚淵劍太と名告りしを實とせざるは其の故なり。假名寺にて諜し合はせ、此の家に立てし高燈籠を切落すを相圖とさだめ、さてこそかくははからうたり。」といひければ、貞直いはく、「しからばいよ〳〵我が子は背元澀右衞門に育てられしな、過てり〳〵。澀右衞門は元來、主君相模太郎殿を敵の手に渡して打たしめたる、不忠至極の五大院左衞門が子なる故、一ッには日月の御旗を奪はん爲、二ッにはせめて其の子を打ちて相模太郎殿の讎を報いんとてせし事なるが、今おもへば恩を讎にて復せしなり、返す〳〵もあやまてり。」と歎息しつゝいひければ、動之助はなほ苦しげに息をつき、「されば候生子のときより育てられ、大恩うけたる養父の仇をむくいんとすれば、實父のおん身を打たねばならず、それ故に養父の仇を射かへす心で、先刻射かけし白羽の矢の、鏃をはぶきて射かけしは、養父の爲には弓を引き、產みの親に對しては、引かぬといふ心にて、是れ父子の義を二ッに分けて何れをも重んずる所なり。養父の敵が實父にてあらんとは露思はず、世界のうちの惡因果を、此の身一ッに引受けて、苦しき者は我が身なり。推量してよ父うへ。」と、いひつゝ、そばに這ひ寄りて、おとす涙は疵口の、鮮血と共にほとばしれば、烈火のごとき貞直も打ちしをれ、又陣羽織を取上げて、片手には介抱しつゝ、いひけるは、「苦形の戰場にて、汝が出生せし時に、此の雲鶴の地紋を幸ひ、此の子の齡千歲の鶴にあやかれと、心に祝せしかひもなく、霜を悲しむ夜の鶴、子を思うて泣く爲の、證になりし因果さよ、生まれたる時襁褓にしたる此の羽織が、今死ぬ時の經帷子になるべしとは、いかでか思ひはかるべき、此の錦はいかなる者が織りなして、かかる因果を見せけるぞや。」といひて羽織をひしと抱きしめ、萬夫不當の勇將も、恩愛といふ大敵には、背後を見せて泣き居たり。時に不思議や荒鵰ども、籠を離れて軒翥し、背を鳴らしつゝ、動之助に飛びつき〳〵苦しむれば、動之助は、「あなや」と叫び打ちわなゝきて悶絶し、此の世のうちの拔目鳥、地獄の呵責眼前、無慙なりけるありさまなり。此の時月はふたゝび又雲にかくれて暗かりしが、岸に繫ぎし苦船より、山咲莊司雪森鐵巾野袴陣羽織、籠手脛楯に身をかため、苦かなぐりてあらはれ出で、がんだう提灯振照らして門口にあゆみ寄り、裏の樣子を窺ひぬ。貞直は聖靈を送る火の薪にと用意しおきた

る麻幹を束ねて火を燃し、松明にしてふり照らし、動之助が荒鵶どもに責めらるゝ苦痛の體を屹と見て、且怪しみ且悲しみ、涙瀾然腰蓑に散りかゝりて、波の滴に異ならず。蛭牙山の雲根の老女、いつの程にかかくれ居けん、此の折二階の障子を開きて座したる姿、白髪の頭に髪紐、錦の袿緋袴、笛をよこたへ吹きならす、其の音凄風楚雨の如く、いとゞ哀れをそへにけり。貞直涙を押しのごひ、「あなあさましや身の罪業を今ぞ知る。懺悔に罪を滅すと聞けば、我が憂き業のあらましを語るべし。

　　實にや世の中を、うしと思はば捨つべきに、其の心更に夏川に、鵶つかふことのおもしろさよ、しめる明松振立てて、藤の衣の玉だすき、籠をひらきてとり出す、志萬豆巣おろしあら鵶ども、此の川波にさつと放せば、面白のありさまや。底にも見ゆる篝火に、おどろく魚を追ひまはし、かづきあげ、すくひあげ、ひまなく魚をくふときは、罪も報いも後の世も、わすれはてておもしろや。

其の殺生の罪重き、親の因果が子に報い、荒鵶の責めの不便さよ。」とて、松明を投付くれば、鵶の烏どもはぱつと退き、動之助はつく息も、絶え〳〵にぞなりにける。雲根の老女も笛を納めて、いそがはしく二階をかけおり、動之助をかき抱き、苦形の戰場にて、「そなたを產みたる實の母、更級といふは我が身なり。產むと其の儘活き別れ、いづくに居るやとおもひしに、逢へば忽ち死別の歎き、よくよく薄き親子の緣、いかなる者が親となり、子と生まれては來つるぞや。娘篝火が行方しれざる故、もし爰へ來はせぬかと、先刻爰へ尋ねに來て、門口に彷徨みしが、修行者の燒きたる香の訝しさに、裏口より立入りて、樣子は殘らず聞きとりぬ。我が子とは露しらず、足利方のまはし者と察せし故、殺さんとまで思ひしは、我が惡業の報いなり、不便の者の最期や。」と、聲曇りつゝいひければ、手負はやう〳〵起上り、「さては實の母人か、親子は一世と聞くなれば、よく顏見せて給はれ。」とて、母の手を握りつめ、見あぐる顏、大膽強氣の老女なれど、目をもる涙鬼薊に、露おきあまる如くなり。先刻より門首に樣子を窺ふ山咲莊司、此の時裏に走り入り、いかに大佛九郎殿、戰場にて互に面を見しらねども、名は豫て聞き給ふらん、月影ヶ谷判官の家臣、山咲莊司雪森とは我が事なり、陪臣なれども主人の名代ゆるされよ、我苦形を歸陣の折柄、山風に吹き落して、我が手に入りし密書の一通、隱語を以て記せし故、事分明ならずといへども、當名は大佛九郎とあれば、入水せしは僞りならんと我が推量に果して違はず、死間の奇畧今あらはれて嘸くちをしくおぼされん。」と、禮儀正しくいひければ、貞直も威儀をつくろひ、「たとひ千騎萬騎をもつて攻むるとも、物の數とは思はねども、子といふものの大敵に、敗軍したる我なれば、今はつゝまずものがたらん。我苦形の一戰にたゝかひつかれて打死、と心をさだめし其の折から、はからず飛びくる矢文の一通、ひらきて見れば主君相模次郎時

行殿、隱語を以て自筆にかかれし奇密の文、我虛腹を切りて暗かに城を落つるゆゑ、汝も打死するこ
となかれと記されしゆゑ、こはよくはかられしと思ひつゝ、知具廐川に入水と見せて敵を欺き、かね
て水練に達せしゆゑ、水底をくゞりて逃れ去りぬ。」と物語れば、莊司曰く、「我とくよりしかあらんと
察せしなり、主君判官梓殘が詞を信じ、相模次郎苦形にて實に死亡ありしと思はれしは誤りなり。時
行殿の行方はいかに。」と問ひけるに、貞直は口ごもりていはざりけり。時に又陣鉦太鼓を打鳴らし、
彼方の岩陰より二ツ引兩の旗をさつと靡かして、月影ヶ谷玉兎之助、身上おごそかによろひ、露助夢
平等兩人に案内させて岩上に出で來り、聲たかやかにいひけるは、「九郎貞直よく聞くべし。我が父判
官照影此の度足利殿にきこえて、北朝の帝に奏し奉り、南北兩朝御和睦あるべきに定まり、足利殿よ
り、吉野の皇居に進奏する、御和睦の盟書をまうし受けてこゝにあり。それにつき敕して時行も助命
し給ふなれば、包まず行方を申すべし。」といひければ、莊司も其の詞の尾につきて、「いでいはれよ、
いで聞かん。」とぞ責めたりける。時に老女すゝみ出で、「其の儀は妾が物語り候はん、そも相模次郎殿
は、箱根水飲峠の合戰の後は、深山幽谷の裏に蟄し坐して、鎌倉には面を見知る者なきを幸ひ、宮奴
に身を扮させ、常又と名のらせ、わざと妾が從者の樣にあつかひて世をしのばせ申せしなり。又妾味
方を集めん爲、鎌倉を徘徊したる時、奇石が洞にある蛇石を大指にはめて諸人を欺き、蛇ヶ谷の因果

婆々と呼ばれしは妾なり。其のきさみ箕腹蟻右衞門、袴田紺九郎等を味方につけしが、彼等おもんば
かり淺きゆゑ、密事あらはれ出奔して、其の後戮せられたるよし、鎌倉の風聞にこれを聞きぬ。又都
にありし時、五條坂の阿曾比、吾妻が所持したる濡髮の名笛を奪ひしいはれは、原亡君相模入道殿の
祕藏の笛なる故に、おん形身とも見ばやと思ひて奪ひしなり。則ち今吹きたるは其の笛なり。」といふ
にぞ、餘吾郎はこれを聞き、老女をよくゝ見るに見知りあれば、「扨は其の時我にやとはれたる老女
はおん身にてありしか。」といへば、老女は打ちうなづきつゝ又いはく、「げに珍らしき對面なり。其の
後妾太麻の現女と名告りて、ふたゝび鎌倉にありし時、月影ヶ谷判官の息女、病になやむと聞き、幸
ひ時行殿宮奴に扮して、鶴ヶ岡におはせしゆゑ、現女の噂をさせ、月影ヶ谷の館に入り籠み、梓の弓
に載する器の裏に火氣を仕籠み、化石谷に生ずる蛭石といふ奇石を暗かに洗米に交ぜて蒔き散らし、
火氣にしたがひ蛭の蠢くやうに見ゆるを、洗米眞に蛭に化したりと思はして欺きしも、日月の御旗を
鶴ヶ岡の神庫より出さしむべき計畧なり。又我々夫婦一ツ處に住まざるは人の疑ひをいとふ故なり。
妾は蛭牙山に別居し、味方の者を療者にして山中にすまはせ彼等にいひふらさせて、木枯の森の邪神
といつはり、白羽の矢をしるしにして人身御供を取りしは、其の子を遠國に賣渡して、軍用金を貯へ
ぬ。獸の皮に化石谷の天狗の爪石といふものを植ゑて、これを妾が手におほひ、眞の變化と思はせた

り。或は奇石洞化石谷の玉石槃石を取出して黄金に替へぬ。又礎に用ゐたる石の腕首は、原化石谷に葬りたる、五大院左衛門が死骸の石に化したるなり。彼が遺骨をはづかしめ、相模太郎殿の恨みをはらさん爲に礎にして常に打ちぬ。今思へば人身御供といつはりて、人の子を奪ひたる我が悪報、忽ち我が子の身に報い、かかる憂目の罪科を、滅せん爲の懺悔ばなし。此の家の下人崩簗吳呂藏といふは、則ち宮奴の幣又にて、實は相模次郎時行殿に候なり。いよ〳〵助命給はれかし。妾は過ぎつる元弘三年鎌倉にて打死したる、長崎勘解由左衛門爲基が妹なり、素性を語るもはづかしや。」といひければ、莊司いはく、「さればこそ女に稀なる膽氣の烈しさ、おん身等夫婦は竝々ならぬ人なるに、忠義には似たれども、善を以て行ひとせざる事惜しむべし殘念さよ。崩簗吳呂藏といふは時行殿に疑ひなしと、我が推量に露たがはず、助命の儀は氣遣ひあるな。」とのべければ、老女曰く、「それ聞けばもはや此の世に望みなし、我が子と共に死出三途の旅立ちせん。去りながら娘かゞり火にあはで死ぬるが殘念なり。南無あみだ佛。」と唱へつゝ、懐劍吭に突き立つれば、貞直も居直りて、「今妻の語りし如く、夫婦こゝろを盡し様々の罪を造りて貯へたる軍用金は、まさかの時の鎧卷腹、これ見られよ。」と諸膚脱げば、肌著にひしと許多の黄金を縫ひつけて、鵜の羽をかさねしごとくなり。動之助が射たる箭幹の、くだけ散りしもことわりなり。貞直又いひけるは、「兩朝のおん和睦さだまる上に、時行殿の助命あれば、我が望み外になし。唯一目あひたきは娘かゞり火、行方しれぬは不思議なり。親の死日にあはざるは、宿世なるか。」と落涙し、暫し歎きに沉みしが、屹と心をとりなほし、大音あげて名乘りけるは、「桓武天皇第五の皇子、葛原親王に三代の孫、平將軍貞盛より十三代、相模入道高時の御内に鬼神とよばれたる、大佛九郎貞直なり、背元動之助氏邦、初陣に打ちとつたり、手柄を見よや讃めよや。」と自らよばはりつゝ、肌著を寛げ刀を腹に突立つれば、山吠莊司立寄りて、「天晴由々しき打死ぞや。」と賞美して、餘吾郎に打向ひ、「汝が奪ひし人質はもはや用なし、父母の死目にせめてあはしめよ。」といへば餘吾郎心得て、笈の扉をひらくをおそしと、其の裏よりまろび出でしは、すなはち是れかゞり火なり。父に取りつき母に取りつき、動之助に取りつきて、かなたこなたと迷ひつゝ、聲ふりたてて泣きさけび、がばと伏して身をもだえ、現心もなかりしが、良ありておき上り、動之助がたづさへ來たる石の矢の根を取る手も見せず、吭に突立てんとしたるを、老女更級いそがはしくおしとゞめ、「こや娘せめて汝はいき殘り、我々が亡き後の、追善供養香花をも手向けてくれよ。」といへば娘は聲くもらし、「今笈の裏にてくはしき事をうけたまはれば、動之助殿といふは、妾が兄にておはすよし。それとはしらずはづかしながら、戀の重荷を身に負ひて、右の枕に假寐せしは、此の世からなる畜生道、などてながらへ居らるべき。」と、いひつゝ又打伏して泣き沉めば、貞直いはく、「其の儀

ならばくるしからず、汝は原我が實子にあらず、十四年前我鎌倉をうかゞはん爲、しのびて立越ゆる道、武藏の籠手差原にて、大鷲四歳ばかりの兒を喰らはんとするを見つけて鷲を殺し、其の兒を助け取りてたち歸り、育て上げしは則ち汝なり。さる故に動之助とは兄弟ならず。」と物がたる。莊司はこれを聞くとひとしく、「其の兒の高頰に黑痣はなかりしか。」と忙しく問ひければ、貞直いはく、「それを和主はいかにしてしりけるぞ、いかにも高頰に黑痣今にあり、それ見られよ」と突きやれば、莊司はつく〳〵打ちまもり、「さては我が子の小雪にうたがひなし。」と喜びつゝ、甘繩の神事のかへるさ、鷲にさらはれたることをあらまし物語り、それに居る餘吾郎といふは汝が兒なり。」といへば、かゞり火は、「扨は妾が實の父、實の兒にて坐すか。」とて、莊司餘吾郎に打向ひ、喜ぶも又涙なり。貞直夫婦は痛手に屈せず、我々夫婦死したるあとは、謀叛人の娘と人に指さされ、路頭に袖をひろげても、情をかくる人もなく、憂目を見んをなげかはしくおもひしに、はからず實父にめぐり會ひ、手渡しすれば我々が冥途までの妄念なし、よろこばしや。」と夫婦の者、かはる〳〵にいひければ、莊司は刀をすらりと拔き、かゞり火が綠の髪を切り取りて、「今より汝尼となり、貞直夫婦の菩提をとひ、養育の大恩に報いせよ。やよ動之助、夫婦は二世といふなれば、後の世は此の娘を、汝が妻になしくれよ、此の切髪は壻引出、冥途の土產に持ち去け。」と落涙しつゝ、手に渡せば、動之助は押戴き、唯掌を合はすばかりなり。貞直は莞爾と笑ひ、「あなうれしやよろこばしや、我もまた納采のしるしとして、娘にあたふる物あり。」とて、左の小脇に突立てたる刀に手をかけ、右の傍腹まで切目長く搔き破りて、中なる腸を手繰り出し、傍邊の松の空に投入れたるに、忽ち枝葉動搖し、血しほの穢れを忌みけるにや、空の中より風を生じ、白木の箱を吹き上げたり。餘吾郎手ばやくこれをとりて開き見るに、これ則ち日月のおん旗なれば、其のまゝ玉兎之助に奉る。玉兎之助はこれを取りてうや〳〵しく押戴き、兩朝のおん和睦すむまでは、此のおん旗はおのれしばらくあづかるべしとて取りをさめけるとき、再び又陣鉦太鼓を亂調に打ちならす。折しも烈しき川風に、一間の障子を吹き倒せば、迚かに見わたす龜毛川、四方の山には旗捺物、陸には松明川には篝火、天を焦せるごとくにて、水にも暉く火の光、南餘兵衞が下知にしたがひ、鵜養ども數多の船を漕ぎ出して、崩築吳呂藏が乘つたる船を取りこめば、吳呂藏は相模次郎時行と本名を名告りつゝ、阿修羅王のあれたらんもかくやと思ふ勢ひにて、寄せ來る鵜養を手玉にとり、投げこむ水音水煙、喚きさけびて戰ふ聲、川波の漲る音にひゞき合ひて、すさまじかりける光景なり。貞直夫婦はこれを見て、「助命といふはいつはりにや。」と訝れば、玉兎之助いひけるは、かならず疑ふことなかれ、諸軍をもちゐず鵜養どもに戰はすは、足利殿への聞えばかり、助命はすこしもいつはりならず。いで我自ら立越えて、時行殿に對面し、和睦助命の盟書を渡して戰

ひをやめさすべし。」といへば、側につきそふ露助夢平心得て、馬引寄すれば玉兎之助ゆらりと乘り、一鞭あてんとしたりしが、動之助が死別を悲しみ、暫したゆたふ唐綾の、鎧の袖におちかゝる、涙をおさへ、「露助夢平いづれも續け。」と下知しつゝ、山を巡りて走せ去きぬ。程なく彼方に揚貝を吹立つるとひとしく、陸の松明船の篝火、一度に消えて忽ち暗夜の如くになり。戰ふ聲も已に止みて、たゞ松風と川波の漲る音のみ殘りけり。貞直夫婦は安堵の體、莊司は夫婦にうちむかひ、おん身等の集めし金は鎌倉葛西ヶ谷の東勝寺に寄附なして、相模入道殿一門の菩提をとふべき料となし、又人身御供といつはりて集めたる子ども等のゆくへをたづね、身をあがなひて其の親々に返しつかはすべし。又高德の僧をえらび、化石谷の小石をとり、たとひ宗旨はちがふとも、利益ふかき法華經の題目を、一石に一字づゝ書かしめて、此の川に沉め、おん身等親子三人の佛果菩提の爲にすべし。」と、暫ひし言は經石とも鵜養石とも云ひ傳へて、末の世までも殘りけり。夫婦は益感激し、「今ははやっ」とて吭かき切りて伏しければ、動之助もともに吭をかき切りて、夫婦親子三人が、一度に息を引汐に、水の哀れを殘しけり。かゞり火獨り生き殘る、歎きは筆に盡されず、貞直行年七十歳、更級行年六十歳、動之助行年十八歳とぞ聞えける。時も時なる魂棚の、瓜や茄子を其の儘に、手向にするや龜毛川、西方淨土へおくり火の、鵜船を弘誓の船となし、稻葉の露に浮雲も、法華の法のたすけ船、一葉の秋と散りて行く、鳴く音悲しき窟馬の、髭題目の功力にて、實相の風吹きて、眞如の月の出でぬれば、山咲莊司は餘吾郎に親子三人の亡骸の葬りを懇に命じつゝ、「娘も暫し此の家にて佛事供養を營むべし。」といふ折しも、南餘兵衞走せ來り、「相模次郎時行殿和睦の盟書を内見あり、『情にはむかふ劍なし』とて戰ひを止め、玉兎君と共に假名寺の陣所へ打越されし。」といへば莊司はこれを聞き、「しからば我も急ぐべし。」とて、餘兵衞を具し歎きを跡に殘しつゝ、假名寺をさして出で去きぬ。

右に記し殘せし事あり。苦形の戰ひのとき、魚淵劍太主人大佛九郎の生子をあづかり山越に落ち行きしが、鎌倉勢に取りかこまれてせん方なく、生子を山神の社のうちに隱し置き、身がるになりて戰ひしが、紫元瀧右衞門駕籠の塵兵衞といひしとき、其の社の前をよぎり、生子の泣く聲を聞きつけて捨子なりとおもひ、陣羽織につゝみ香包をそへたるを見て、なみ〳〵の人の子にあらざるを知り、不便に思ひひろひとりてかへりぬ。劍太は鎌倉勢を追ひはらひて舊の所にかへり、社のうちを見るに、生子なかりければ大いにくやしみ、すでに自殺せんとしたるが、主人の妻更級の行方をたづぬるために生きながらへ、其の後山咲窗閑が家にしのび入りて捕はれたるとき物語れる事と、瀧右衞門がかねて動之助に語りおきける事と、符合するを以て、動之助は苦形の戰場にて生まれたる大佛九郎が子なりといふこと、あきらかに知れけるなり。此の仔細を前回にしるし入れんはくだ

くだしければ此に別記して、看官の疑ひを解くのみ。

## 十七　鶴おりて日こそおほきに和睦の酒宴

さる程に相模次郎時行は、和睦の盟書を携へて吉野の皇居に到り、是れを進奏しけるに、南朝の帝叡慮をよろこばしめ給ひ、已に南北兩朝御和睦と、のひければ、時行今は望みたれりとて剃髪し、佛門に入り、日月のおん旗は舊の如く鶴ヶ岡の神庫に納む。苦形の合戰より大佛九郎の亡びしまで、都て月影ヶ谷判官父子の武畧によれりとて、父子ともに位階昇進あり。これによりて玉兎之助前の不行跡を悔いおもひて、文武をはげむの外他事なし。妹姫は病全快して、梅ヶ谷郡領の嫡子に嫁し、兩家むつみ深し。又山咲莊司が忠義軍功拔羣なりとて加增をたまはりければ、兒子餘吾郎歸參させ、あらためて吾妻と婚姻を取りむすびぬ、莊司が妻淀瀨が喜びいひつくすべからず。南餘兵衞をも歸參させ、亡父南方十字兵衞が祿に加增して與へければ、益母に孝を盡し、窗太郎を養育し、朝烏の刀を家寶とし、孝子の美名世に高く聞えぬ。背元澀右衞門が妻於破矢は剃髪して尼となり、籌火の尼と共に鎌倉霧ヶ澤の月輪寺の境内に庵をむすびて住み、大佛九郎夫婦、および澀右衞門、動之助、堂左衞門等が菩提をとふ。五大院左衞門が五輪の塔も月輪寺にうつし建て、其の下に彼の石の腕首を埋めて



しるしとす。放駒の小柄の小刀も同寺に寄附しけるとなん。又大佛九郎夫婦が集めおきたる金は、相模人道一門の自殺ありし東勝寺に寄附し、濃髮の名笛楊貴妃の身摺の名香のなごりも同寺に納め寺寶とす。僕露助は武士に取立てられて餘吾郎に仕へ、妻於關と共に益忠勤をはげみぬ。僕夢平も武士になりて莊司に仕ふ。玉兎之助は衆僧を供養して、白拍子都、動之助兩人の菩提の爲とす。餘吾郎は紀州高野山に祠堂金二百兩を納め、祖父の靈を祭りて前の罪を購ひ、又十字兵衞が靈を祭ること懇なり。蛙鳴丸の刀を家寶とし、かの竹の刀は一生守刀にして自ら短氣をつゝしみぬ。山咲窗閑は古今傳授の祕書を南朝の帝に奉り、玉兎之助より扶持を受けて隱者となり、狂言綺語を飜して、讃佛乘の因、轉法輪の緣として、白拍子都が菩提をとふ事厚し。其の名は後世に朽ちず。燕子花の句、夏の澤水の句、人口に膾炙して、今の世までもいひ傳ふ。そも明らかなるところには王法あり、暗き所には天罰あり、隱惡といへども必ず報いあり。惡人一旦盛んなるも餘殃の風にくじけて其の枝葉を枯らし、善人一旦衰へたるも餘慶の春にあひて、再び花咲く時にあへり。皆是れ天理のしからしむる所なり。されば浮世の興亡榮枯、人生の禍福吉凶、一部の小說に異なることなし。其の卷末を見ざれば曉り得ることあたはず、豈悟らざらめや。

# 雙蝶記卷之六 大尾




大正十五年十一月十二日印刷
大正十五年十一月十五日發行

（非賣品）

編輯兼發行者　東京市麹町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社

右代表者　東京市麹町區內幸町一丁目六番地　野中次郎

印刷者　東京市本所區番場町四番地　井上源之丞

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麹町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
電話銀座七八三番　二一八八番
振替東京五二二九八番

近代日本文學大系
第十四卷

終